

大分市

下郡遺跡群 1

下郡遺跡群第151次調査・第152次調査

都市計画道路庄の原佐野線（下郡工区）街路改良事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書（1）

2025

大分県立埋蔵文化財センター

大分市

下郡遺跡群 1

下郡遺跡群第151次調査・第152次調査

都市計画道路庄の原佐野線（下郡工区）街路改良事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書（1）

2025

大分県立埋蔵文化財センター



下郡遺跡群調査地遠景（東方から大分川を望む）

巻頭図版 2



庄の原佐野線（下郡工区）と大分市市街地（大分土木事務所提供）

序 文

本書は、都市計画道路庄の原佐野線（下郡工区）街路改良事業に伴い、大分県教育委員会が大分県土木建築部大分土木事務所の依頼を受けて実施した、下郡遺跡群の発掘調査報告書です。

下郡遺跡群は、大分川東岸の自然堤防上に所在する、縄文時代後期から近代にいたる広大な複合遺跡です。学史上著名な「弥生ブタ」が出土した下郡桑苗遺跡を含め、140次以上にのぼる調査によって、大分平野における拠点的な性格をもつ遺跡であったことが判明しています。

庄の原佐野線街路改良事業に伴う下郡遺跡群の発掘調査は、令和3年度から5年度にかけ三度にわたって行いました。本書では、令和4年度の第151次調査、令和5年度の第152次調査の一部を報告します。この地域では、これまでの発掘調査で弥生時代中期の集落や古代の掘立柱建物群が確認されています。今回の発掘調査でも、弥生・古代を中心に多くの遺構・遺物を確認し、下郡遺跡群の様相をより鮮明にする貴重な資料を得ることができました。

本書が埋蔵文化財の保護・啓発とともに、地域の歴史を理解する資料として、さらには学術研究の一助として活用されれば幸いです。

最後に、長期にわたる発掘調査の実施にあたり多大な御支援・御協力をいただきました関係各位に対し、衷心から感謝申し上げます。

令和7年3月

大分県立埋蔵文化財センター

所長 後藤晃一

例　　言

1. 本書は令和4～6年度に実施した、大分市下郡南に所在する下郡遺跡群の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は都市計画道路庄の原佐野線（下郡工区）街路改良事業に伴い、大分県土木建築部大分土木事務所の依頼を受けて大分県立埋蔵文化財センターが実施した。
3. 下郡遺跡群は大分市教育委員会により149次にわたる調査が実施されている。大分県立埋蔵文化財センターの調査についても既往調査との整合を図るため、調査次数を連番とした。発掘調査期間及び調査担当者は以下のとおりである。
 - ・下郡遺跡群第150次調査 令和3年11月16日～令和4年 2月 4日 (諸岡初音)
 - ・下郡遺跡群第151次調査 令和4年 5月30日～令和5年12月23日 (西 貴史)
 - ・下郡遺跡群第152次調査 令和5年 5月17日～令和6年 3月14日 (西 貴史)なお、本報告書では、第151次調査の一部（1区・2区）及び第152次調査の一部（4区）の調査成果を報告し、残りの調査地点については次年度以降報告する。
4. 発掘調査の実施にあたり、発掘作業及び記録作成、現場管理を支援業務とし民間調査組織に委託した。発掘調査での実測図の作成及び写真撮影は上記担当者の指示のもと下記の支援業務受託業者が行った。
 - ・第150次調査 有限会社九州文化財リサーチ (堤 真子、廣川里恵)
 - ・第151次・152次調査 株式会社イビソク大分支店 (佐藤孝則、高木裕司)
5. 出土品の洗浄、注記、接合、実測、遺物写真撮影、トレース等の整理作業は令和4～6年度に株式会社九州文化財総合研究所に委託した。遺構・遺物図面の作成は、汐月朝洋（埋蔵文化財センター副主幹）及び坂本嘉弘（埋蔵文化財センター非常勤職員）の補助を受け、西が行った。
6. 出土遺物及び調査記録は大分県立埋蔵文化財センター（大分市牧緑町1番61号）で保管している。
7. 本書の編集執筆は、西 貴史が行った。

凡　　例

1. 本書で使用する方位は座標北で、座標値は世界測地系の数値である。標高はすべて海拔を表す。
2. 本書で使用する遺構略号は下記を使用し、各調査での遺構については下記の順に報告する。
S H (竪穴建物)、S B (掘立柱建物)、S D (溝)、S E (井戸)、S K (土坑)、S P (柱穴)、
S X (遺物集中ブロック及び性格不明遺構)

目 次

第1章 調査に至る経緯と発掘調査の経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法	4
第3節 整理作業・報告書作成の経過	4
第4節 調査組織の構成	4

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	8
第3節 下郡遺跡群の既往調査	10

第3章 調査の成果

第1節 発掘調査の概要と各調査の設定	15
第2節 第151次調査1区の成果	16
(1) 調査の概要と経過	16
(2) 調査区の基本層序	17
(3) 主要な遺構と遺物	17
第3節 第151次調査2区の成果	19
(1) 調査の概要と経過	19
(2) 調査区の基本層序	22
(3) 主要な遺構と遺物	23
(4) その他の遺構・遺物	51
第4節 第152次調査4区の成果	77
(1) 調査の概要と経過	77
(2) 調査区の基本層序	78
(3) 主要な遺構と遺物	79
(4) その他の遺物	88

第4章 自然科学分析

「下郡遺跡群（第151次調査）における自然科学分析」一般社団法人文化財科学研究センター	92
---	----

第5章 総括

遺物一覧表	113
写真図版	129

挿図目次

第1図 庄の原佐野線の事業区間	1	第37図 151-SK2027 出土遺物実測図 (1/3)	36
第2図 庄の原佐野線（下郡工区）完成予想図	2	第38図 151-SK2031 実測図 (1/40)	37
第3図 試掘確認調査実施箇所 (1/5,000)	3	第39図 151-SK2031 出土遺物実測図 (1/3)	37
第4図 試掘調査で出土した遺構	3	第40図 151-SK2040 実測図 (1/40)	37
第5図 試掘調査出土遺物実測図 (1/3)	3	第41図 151-SK2040 出土遺物実測図 (1/3)	38
第6図 大分平野部の地形環境	7	第42図 151-SK2044 実測図 (1/30)	38
第7図 下郡遺跡群の位置と周辺の遺跡	9	第43図 151-SK2044 出土遺物実測図 1 (1/3)	38
第8図 下郡遺跡群既往調査地一覧 (1/7,000)	11	第44図 151-SK2044 出土遺物実測図 2 (1/3)	39
第9図 下郡遺跡群の調査区配置図 (1/3,000)	15	第45図 151-SK2089 実測図 (1/30)	40
第10図 1区遺構配置図 (1/150)	16	第46図 151-SK2089 出土遺物実測図 (1/3)	40
第11図 1区土層断面図 (1/60)	17	第47図 151-SK2090 実測図 (1/30)	41
第12図 1区出土遺物実測図 (1/3)	17	第48図 151-SK2090 出土遺物実測図 (1/3)	41
第13図 1区主要遺構実測図 (1/20)	18	第49図 151-SK2134 実測図 (1/30)	42
第14図 下郡遺跡群の調査区配置図 (1/3,000)	19	第50図 151-SK2134 出土遺物実測図 (1/3)	42
第15図 2区1面目遺構配置図 (1/80)	20	第51図 151-SK2140 実測図 (1/30)	43
第16図 2区2面目遺構配置図 (1/80)	21	第52図 151-SK2140 出土遺物実測図 (1/3)	43
第17図 2区土層断面図 (1/60)	22	第53図 151-SK2149 実測図 (1/30)	44
第18図 151-SD2002 実測図 (1/30)	23	第54図 151-SK2149 出土遺物実測図 (1/3)	44
第19図 151-SD2003 実測図 (1/30)	24	第55図 151-SK2150 実測図 (1/30)	44
第20図 151-SD2022 実測図 (1/40)	24	第56図 151-SK2164 ほか遺構実測図 (1/30)	45
第21図 151-SD2003 出土遺物実測図 (1/3)	25	第57図 151-SK2172 出土遺物実測図 (1/3)	45
第22図 151-SD2022 出土遺物実測図 (1/3)	26	第58図 151-SK2224 実測図 (1/30)	46
第23図 151-SE2122 実測図 (1/40)	27	第59図 151-SK2224 出土遺物実測図 (1/3)	46
第24図 151-SE2122 出土遺物実測図 (1/3)	27	第60図 151-SK2227 実測図 (1/30)	47
第25図 151-SK2001 実測図 (1/30)	28	第61図 151-SK2227 出土遺物実測図 (1/3)	47
第26図 151-SK2001 出土遺物実測図 (1/3)	28	第62図 151-SK2256 実測図 (1/30)	48
第27図 151-SK2012 実測図 (1/30)	29	第63図 151-SK2256 出土遺物実測図 (1/3)	49
第28図 151-SK2013 実測図 (1/40)	29	第64図 151-SP2228 出土遺物実測図 (1/3)	50
第29図 151-SK2013 出土遺物実測図 (1/2)	30	第65図 151-SB2261 実測図 (1/40)	51
第30図 151-SK2021 実測図 (1/30)	31	第66図 151-SB2261 出土遺物実測図 (1/3)	52
第31図 151-SK2021 出土遺物実測図 1 (1/3)	32	第67図 151-SX2004 出土状況	52
第32図 151-SK2021 出土遺物実測図 2 (1/3)	33	第68図 151-SX2004 出土遺物実測図 1 (1/3)	53
第33図 151-SK2021 出土遺物実測図 3 (1/2, 1/3)	34	第69図 151-SX2004 出土遺物実測図 2 (1/3)	54
第34図 151-SK2024 実測図 (1/30)	35	第70図 151-SX2004 出土遺物実測図 3 (1/3)	56
第35図 151-SK2024 出土遺物実測図 (1/3)	35	第71図 151-SX2004 出土遺物実測図 4 (1/3)	57
第36図 151-SK2027 実測図 (1/30)	36	第72図 151-SX2004 出土遺物実測図 5 (1/3)	59

表 目 次

第1表	下郡遺跡群調査一覧1	12	第13表	遺物観察表3	116
第2表	下郡遺跡群調査一覧2	13	第14表	遺物観察表4	117
第3表	下郡遺跡群調査一覧3	14	第15表	遺物観察表5	118
第4表	庄の原佐野線事業に伴う本調査の内容	15	第16表	遺物観察表6	119
第5表	分析項目の詳細	92	第17表	遺物観察表7	120
第6表	リン酸・カルシウム分析結果	93	第18表	遺物観察表8	121
第7表	花粉分析結果	98	第19表	遺物観察表9	122
第8表	珪藻分析結果	100	第20表	遺物観察表10	123
第9表	テフラ分析結果	104	第21表	遺物観察表11	124
第10表	重鉱物分析結果	105	第22表	遺物観察表12	125
第11表	遺物観察表1	114	第23表	遺物観察表13	126
第12表	遺物観察表2	115	第24表	遺物観察表14	127

写真図版目次

写真図版 1	131	写真図版 25	155
写真図版 2	132	写真図版 26	156
写真図版 3	133	写真図版 27	157
写真図版 4	134	写真図版 28	158
写真図版 5	135	写真図版 29	159
写真図版 6	136	写真図版 30	160
写真図版 7	137	写真図版 31	161
写真図版 8	138	写真図版 32	162
写真図版 9	139	写真図版 33	163
写真図版 10	140	写真図版 34	164
写真図版 11	141	写真図版 35	165
写真図版 12	142	写真図版 36	166
写真図版 13	143	写真図版 37	167
写真図版 14	144	写真図版 38	168
写真図版 15	145	写真図版 39	169
写真図版 16	146	写真図版 40	170
写真図版 17	147	写真図版 41	171
写真図版 18	148	写真図版 42	172
写真図版 19	149	写真図版 43	173
写真図版 20	150	写真図版 44	174
写真図版 21	151	写真図版 45	175
写真図版 22	152	写真図版 46	176
写真図版 23	153	写真図版 47	177
写真図版 24	154	写真図版 48	178

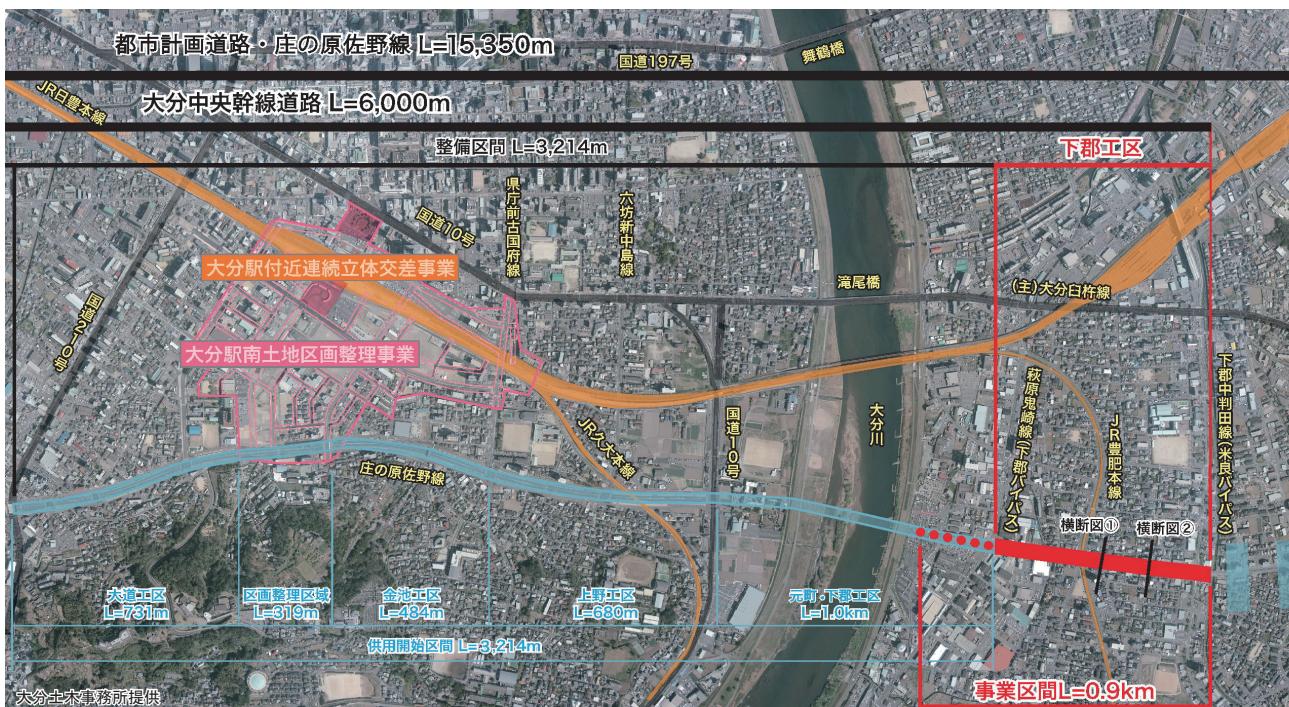
第1章 調査に至る経緯と発掘調査の経過

第1節 調査に至る経緯

(1) 庄の原佐野線と大分市街地の交通網

地域高規格道路 都市計画道路庄の原佐野線は、大分市庄の原に位置する東九州自動車道大分インター チェンジより、大分市中心部の元町、下郡、明野を東西へ横断しながら市東部の佐野へと至る地域高規格道路である。大分市内には県内の主要渋滞箇所の7割が集中しており、とくに下郡をはじめとする市街地中心部においては、朝夕の交通渋滞が常態化し、それに起因する交通事故の多発が課題となっていた。このよう な中で、大分県土木建築部により、市道萩原鬼崎線（下郡バイパス）から県道56号下郡中判田線（米良バイパス）を繋ぐ庄の原佐野線「下郡工区」の整備が計画された（第1図）。この区間の整備により、交通渋滞の緩和をはじめ市街地と南部の広域防災拠点を結ぶ災害時の緊急輸送網を確保できるため、主要幹線としての利便性をより高めることが可能となり、一層の都市活動の活性化が期待される。庄の原佐野線の工事にあたっては、平成6年の計画路線認定以後、延長約6kmにわたって路線整備が進められてきた。整備が完了し既に供用を開始している4区間のうち、大分川西岸の「元町工区」では、周知の埋蔵文化財包蔵地である蔣山万寿寺跡、そして国指定史跡大友氏遺跡の一部を構成する旧万寿寺跡の旧境内地に該当していたため、事業者と文化財部局間で十分な協議を行った上で、施工法を盛土から橋梁へと変更した。橋台設置箇所については平成23年度から平成27年度まで発掘調査を行い、その成果を報告した。また、「元町工区」と「下郡工区」を跨ぐ大分川上には、新設となる「宗麟大橋」が架橋され、平成30年1月から供用開始となった。

下郡工区の概要 「下郡工区」は、大分市道萩原鬼崎線から県道 56 号下郡中判田線に接続する延長 0.9km の区間を指す。この下郡工区は令和 9 年度供用開始の予定で、平成 29 年 4 月に国から整備区間の指定を受け、平成 29 年 7 月に事業認可を取得した。本工区では、既設路線の拡幅に加え、用地内に橋台・橋脚を設置し



第1図 庄の原佐野線の事業区間（大分土木事務所提供図を加工）

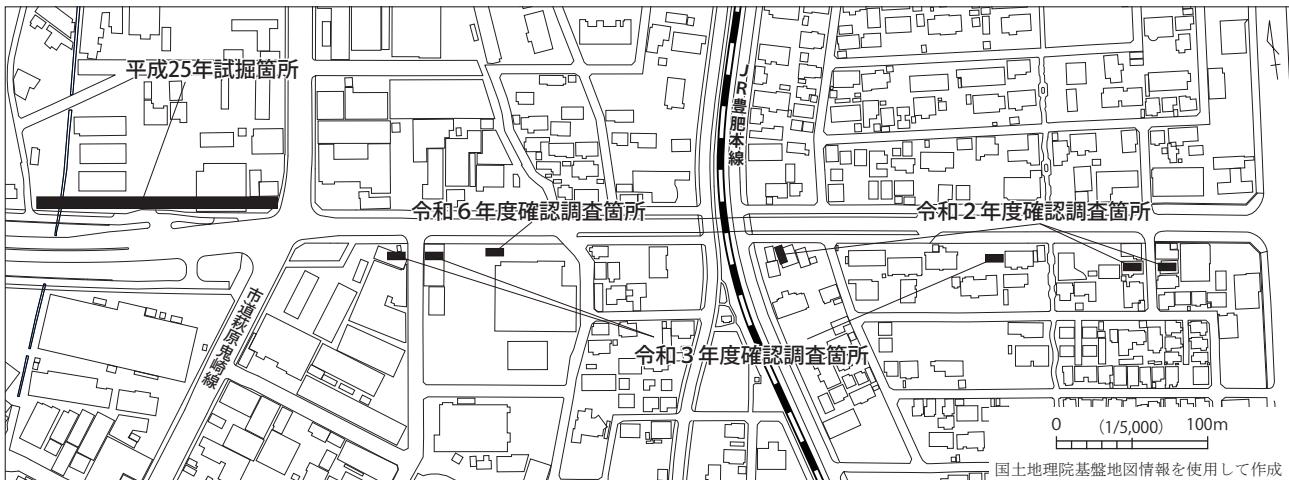


第2図 庄の原佐野線（下郡工区～明野工区）完成予想図（大分土木事務所提供）

高架を設ける立体道路整備を特徴とする。宗麟大橋から急峻な傾斜を持つ明野丘陵へスムーズな接続が可能となり、交通渋滞の改善も期待される（第2図）。下郡工区の整備区間は、周知の埋蔵文化財包蔵地「下郡遺跡群」の範囲に該当し、遺跡内を大きく東西に横断するものとなっていた。そのため、路線整備と埋蔵文化財の保護の両立を目的として、用地状況の整った箇所から隨時試掘確認調査を実施した（詳細は後述する）。その結果、計画路線内の各地点で埋蔵文化財が確認されたため、事業者を含む関係機関と埋蔵文化財の取扱いについて協議した結果、工法変更は難しく遺跡の現地保存が困難であると判断し、令和3年度から記録作成のための本調査を実施することとなった。

（2）下郡工区内での試掘確認調査

本事業に伴う試掘確認調査は、令和6年度までに路線内の各地点で合計5回実施した（第3図）。調査箇所の設定については、事業者である大分土木事務所と協議を重ね、用地状況が整った箇所のうち埋蔵文化財に影響を与えると想定できる工事箇所（橋台・橋梁の設置箇所、ほか大分市教育委員会による調査が未実施の箇所）を中心として実施した。その結果、弥生土器をはじめとした遺物や近世に属する柱穴をはじめとして、複数の時期にまたがる遺構や遺物が確認できた。これらを踏まえ、再度大分土木事務所を含む関係機関と綿密な協議を行い、路線内での本調査を行うこととなった。



第3図 試掘確認調査実施箇所 (1/5,000)

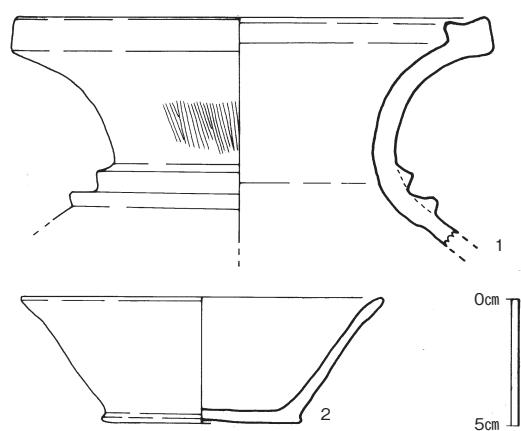


第4図 試掘確認調査の状況 (左: 平成 25 年度調査時、右: 令和 2 年度調査時)

(3) 試掘調査出土遺物

試掘調査で出土した遺物のうち、主要なものを第5図に示した。いずれも平成25年試掘調査の際に出土した遺物である。調査地は、宗麟大橋と市道萩原鬼崎線が接続する交差点部分に位置する。遺物はいずれも地山である砂層から出土した。これら以外の遺物や遺構は確認できなかった。以下に遺物の詳細を記述する。

1は弥生土器である。壺形土器の口縁部から頸部にかけての破片であり、胴部分を大きく欠損する。残存高9.0cm、復元後の口径は19.6cmである。色調は明黄褐色を呈する。内外面の調整はナデで丁寧に仕上げられる。口縁端部は平坦な形状であり、特に施文や装飾は見られない。三角状突帯が口縁内部に1条、頸部に2条貼り付けられている。弥生時代中期の壺形土器である。2は土師器坏である。口縁部を一部欠損するものの、全体形状は明瞭に残る。口径は14.2cm、底部径は7.8cmを測る。色調は橙褐色を呈する。胎土には長石を多く含む。内外面はナデで仕上げられ、底部は回転切り離し後にナデつけてある。諸特徴から9世紀の土師器坏であると判断できる。



第5図 試掘調査出土遺物実測図 (1/3)

第1章 調査に至る経緯と発掘調査の経過

第2節 調査の方法

各調査の実施にあたっては、重機での表土除去、人力掘削（遺構検出・遺構発掘）、記録写真撮影、遺構実測、空中写真撮影、実測原図のデジタルトレース図作成、現場管理及び労務管理等を埋蔵文化財発掘調査支援業務として一括して民間調査組織に委託した。その一方で調査区の設定や層序確認、遺構の認定、遺構埋土や調査区土層の分層等は埋蔵文化財センター調査員が行い、遺構の性格や遺跡全体の関係を把握しながら受託業者に作業指示を与え、調査員が常駐して全体を指揮監督する体制をとった。作業班は2班とし、作業班1班につき調査技師・調査助手各1名、作業員15名を基本とした。

第3節 整理作業・報告書作成の経過

発掘調査出土品の整理作業は、令和4年度から6年度に実施した。各年度とも下郡遺跡群を含む当該年度整理実施事業を一括し、「埋蔵文化財センターが実施する埋蔵文化財発掘調査に係る整理作業委託」として発注した。

業務は基本作業と資料作成業務からなり、埋蔵文化財センター整理作業棟を作業場所として実施した。委託内容は出土遺物の水洗、出土地点の注記、遺物接合・復元、遺物実測、遺物観察基礎データ作成、遺物実測原図のトレース、遺物写真撮影、ほか遺物の区分けや収納等諸作業である。委託業務では各作業工程で調査担当者が完了確認を行い、作業精度の確保に努めた。各整理作業は以下の日付で実施した。

- ・第150次調査整理作業：令和4年6月1日～令和5年1月4日
令和5年1月13日完了検査、同1月17日委託成果物提出
- ・第151次調査整理作業：令和5年6月1日～令和6年1月11日
令和6年1月30日完了検査、同2月1日委託成果物提出
- ・第152次調査整理作業：令和6年6月10日～令和6年10月8日
令和6年10月17日完了検査及び委託成果物提出

本書作成にかかる遺構・遺物実測図版作成作業や原稿執筆、編集作業は調査担当者が整理作業と並行して行った。令和7年1月に原稿を入稿し、三度の校正を経て令和7年3月末に本書を刊行した。

下郡遺跡群第150次から第152次調査の発掘調査報告書については、令和6年度から3箇年かけて順次以下のとおり刊行する予定である。

- ・令和6年度 第151次調査（1区・2区）、第152次調査（4区）：下郡遺跡群1（本書）
- ・令和7年度 第150次調査、第151次調査（3区・4区）：下郡遺跡群2
- ・令和8年度 第152次調査（1～3区）：下郡遺跡群3

第4節 調査組織の構成

下郡遺跡群第150次から第152次までの発掘調査に係る調査組織は、以下のとおりである。

調査主体 大分県教育委員会

調査機関 大分県立埋蔵文化財センター

令和3年度 下郡遺跡群第150次調査

調査責任者 松本昌浩（大分県立埋蔵文化財センター所長）

調査総括 後藤晃一（大分県立埋蔵文化財センター副所長兼調査第一課長）

調査事務 藤原邦夫（同 総務課長）

西森公誠（同 総務課副主幹）

池見佳輔（同 総務課主事）

調査担当 諸岡初音（同 調査第一課主事、本調査担当）

発掘調査支援業務委託受託者 有限会社九州文化財リサーチ（調査技師 堤 真子、調査助手 廣川里恵）

令和4年度 下郡遺跡群第151次調査及び第150次調査整理作業

調査責任者 松本昌浩（大分県立埋蔵文化財センター所長）

調査総括 後藤晃一（大分県立埋蔵文化財センター副所長兼調査第一課長）

調査事務 藤原邦夫（同 総務課長）

山田哲也（同 総務課主査）

平田愛香（同 総務課主事）

調査担当 西 貴史（同 調査第一課主事、本調査担当）

吉田 寛（同 調査第二課長、整理作業統括）

小堀嵩史（同 調査第二課主事、整理作業委託監理）

発掘調査支援業務委託受託者 株式会社イビソク大分営業所（調査技師 佐藤孝則、調査助手 高木裕司）

整理作業委託受託者 株式会社九州文化財総合研究所（整理作業指導員 永井美香）

令和5年度 下郡遺跡群第152次本調査及び第151次調査資料整理、出土遺物保存処理業務

調査責任者 後藤晃一（大分県立埋蔵文化財センター所長）

調査総括 染矢和徳（大分県立埋蔵文化財センター調査第一課長兼調査第二課長）

調査事務 藤原邦夫（同 総務課長） *令和5年5月14日まで

上條年明（同 副所長兼総務課長） *令和5年5月15日から

山田哲也（同 総務課主査）

平田愛香（同 総務課主事） *令和5年6月30日まで

吉川小百合（同 総務課臨時職員） *令和5年7月～9月まで

岩男修太（同 総務課主事） *令和5年10月1日から

調査担当 西 貴史（同 調査第一課主事、本調査・整理作業担当）

染矢和徳（同 調査第二課長、整理作業統括）

小堀嵩史（同 調査第二課主事、整理作業委託・保存処理委託監理）

発掘調査支援業務委託受託者 株式会社イビソク大分営業所（調査技師 佐藤孝則、調査助手 幸重由香）

整理作業委託受託者 株式会社九州文化財総合研究所（整理作業指導員 永井美香）

保存処理業務受託者 一般社団法人文化財科学研究センター

第1章 調査に至る経緯と発掘調査の経過

令和6年度 下郡遺跡群第152次調査資料整理、報告書作成、出土遺物保存処理業務

調査責任者 後藤晃一（大分県立埋蔵文化財センター所長）

調査総括 横澤 慶（大分県立埋蔵文化財センター調査第一課長）

調査事務 上條年明（同 副所長兼総務課長）

山田哲也（同 総務課副主幹）

岩男修太（同 総務課主事）

調査担当 西 貴史（同 調査第一課主事、整理作業・報告書作成担当）

染矢和徳（同 調査第二課長、整理作業統括）

汐月朝洋（同 調査第二課副主幹、保存処理委託監理）

森 春奈（同 調査第二課主事、整理作業監理）

整理作業委託受託者 株式会社九州文化財総合研究所（整理作業指導員 木村藍子）

保存処理業務受託者 株式会社吉田生物研究所

発掘調査の期間中、事業者である大分県土木建築部大分土木事務所をはじめ、地元の下郡地区、大分市教育委員会には発掘調査への御理解と多大な御協力を賜った。また、発掘調査現場には以下の方々の来訪があり、発掘調査に係る種々の御指導、御助言をいただいた。

田中裕介（別府大学）、越智順平・荻山琴美（大分県教育庁文化課）、原田昭一（大分県立歴史博物館）、吉田寛・服部真和（大分県立埋蔵文化財センター）、坪根伸也・池邊千太郎・小野綾香（大分市教育委員会）、諸岡郁（豊後大野市教育委員会）、久住猛雄（福岡市埋蔵文化財センター）、柴田義弘（敬称略、所属は当時）

また、本書に掲載した図面のうち、巻頭図版1及び第1・2図については大分土木事務所から、第8図の原図は大分市教育委員会から提供いただいた。記して感謝したい。

参考・引用文献

荒添陽平 2017『地域高規格道路の整備と文化財の保護の両立～大分県』『都市と交通』105 日本交通計画協会

大分県土木建築部 2024『大分県土木建築部長期計画 おおいた土木未来プラン2024』（素案） 大分県

吉田寛・横澤慶編 2019『蔣山万寿寺跡』大分県立埋蔵文化財センター調査報告書6 大分県立埋蔵文化財センター

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

下郡遺跡群の所在する大分市は、九州の東端、瀬戸内海の西端に位置し、北は別府市、西は由布市、南は臼杵市、豊後大野市と接している。市域は東西約60km、南北約25kmに広がり、総面積は約500平方kmである。地形的には、北部が別府湾に面し、東は佐賀関半島を介して豊後水道に接している。西部には高崎山、東部には樅木山、南部には鎧ヶ岳などの山々が連なる。これらの山々を縫うように、一級河川である大野川と大分川の二大水系が南北に流れ、別府湾に注いでいる。大分平野はこれら河川の堆積作用によって形成された沖積平野である。この平野は、両河川の三角州とそれらの間の海岸平野から成り立っており、平野の面積は比較的狭い。海岸部は、北部沿岸海域が水深深く、東部沿岸は豊予海峡に面したリアス式海岸で、天然の良港となっている。地質的には、臼杵一八代構造線の影響によって、多様な岩石や地層が分布する地帯である。市内中心部周辺では、大分層群や碩南層群といった堆積岩が広く分布している。これらの層群は、新生代第三紀に形成されたもので、砂岩や泥岩などから構成されている。気候は瀬戸内海性気候に属し、温暖で降水量が比較的少ない。交通面では、JR久大本線・豊肥本線・日豊本線や東九州自動車道といった主要交通施設のほか、一般国道10号や197号、210号などが幹線道路として機能している。また、大分港や佐賀関港からは四国方面へのフェリー航路が運航されており、海上交通の要衝となっている。

下郡遺跡群は大分川下流域東岸に位置するが、この一帯は大分川の氾濫原であり、砂やシルトで構成される沖積層の上に、標高5mから6mへと緩やかに展開する平坦な地形が広がっている。



第6図 大分平野部の地形環境

第2節 歴史的環境

下郡遺跡群は、大分川下流域、大分平野の沖積地内に立地する。大分川下流域一帯では、大分市街地の都市機能形成に伴い、高頻度で開発が行われてきた。それに伴い、埋蔵文化財が密集する地帯であることも明らかとなり、各地で発掘調査が行われ考古学的な知見が蓄積されている。以下、下郡遺跡群を含む大分川下流域の歴史的環境について、調査の行なわれた遺跡に焦点を当てながら概観する。

旧石器時代 一方平I遺跡や丹生遺跡群、庄ノ原遺跡群などキャンプサイト的な性格を有する遺跡が平野内の台地・丘陵上に点在するが、大分川下流域に限れば当該期の遺跡は確認されていない。

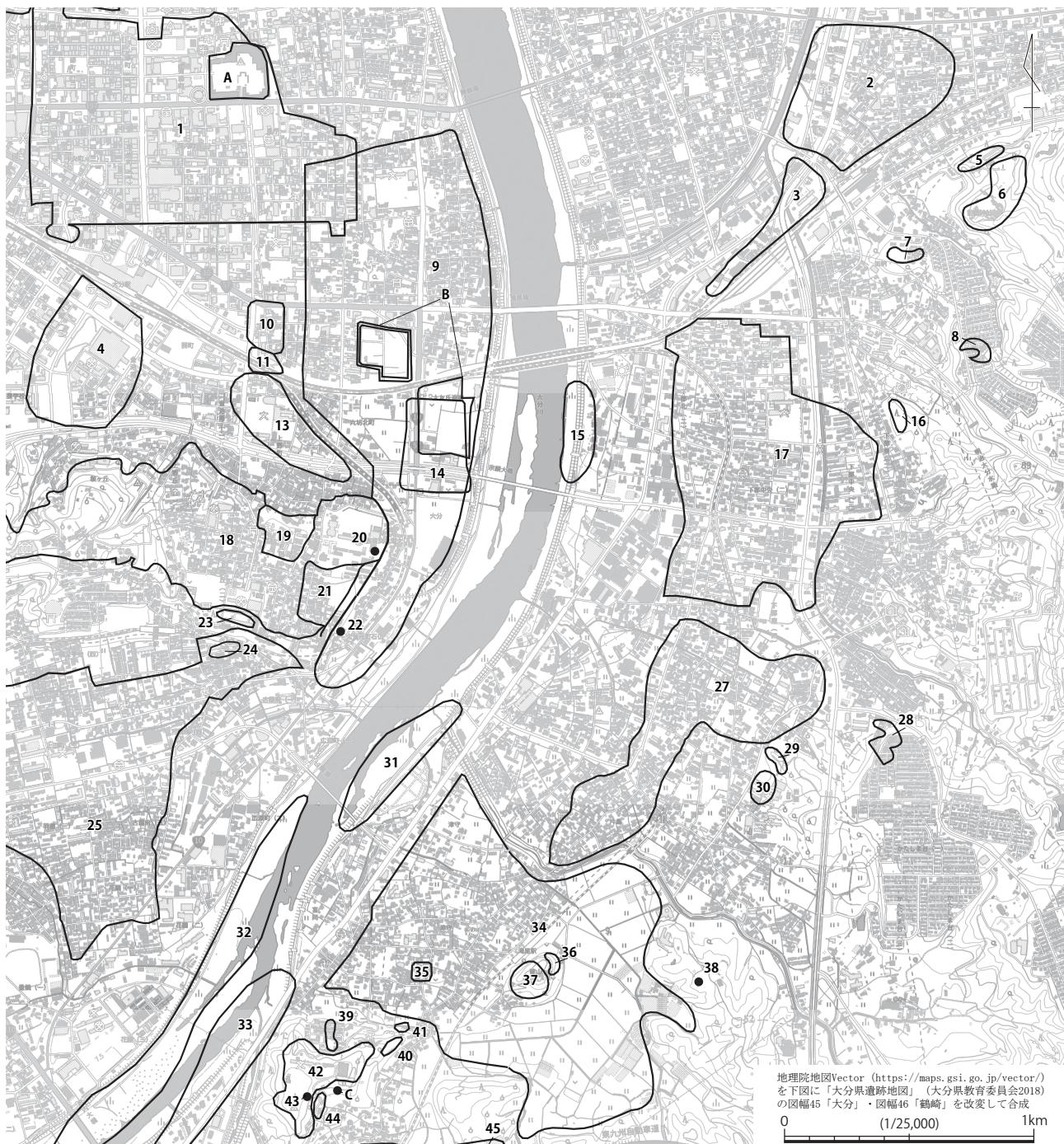
縄文時代 旧石器時代から継続して台地・丘陵上に遺跡が確認できるが、大分川下流域では下郡桑苗遺跡の貯蔵穴などを除いて縄文時代の遺跡はみられない。しかしながら各地で縄文土器片の出土や採集が確認できるため、定住を伴う人間活動は行なわれていたようである。

弥生時代 早期段階の刻目突帶文土器は羽田遺跡などで確認されるが、本格的な集落形成は前期末から中期段階にみられるようになる。当該期の集落は守岡遺跡や雄城台遺跡等の独立丘陵上のほか、羽田遺跡などの標高の低い沖積地にも確認できる。後期後半段階になると、平野内の遺跡数が急増し、規模の拡大も看取されるようになる。大道遺跡群をはじめとする拠点的な集落地ではこの時期を前後し環濠が巡らされる状況がみられる。しかしこれらの大規模な遺跡は弥生時代終末期から古墳時代前期にかけて多量の土器廃棄が確認でき、集落の廃絶・生活域の変化が生じている。

古墳時代 大分川下流域西岸では、前期の亀甲古墳を皮切りに蓬萊山古墳や大臣塚古墳などの首長系譜が継続する。対して東岸地域では津守古墳などを除けば墳丘を有する高塚墳が概して少ないが、後期に入り横穴墓群が密集して築造される様子が確認できる。集落地は自然堤防上に連続して立地する状況が確認でき、牧六分遺跡から下郡遺跡群にかけて展開する。古国府遺跡群では古墳時代中期の方形区画や後期の大型掘立柱建物が確認された。若宮八幡宮遺跡では後期の玉作り工房が確認され、集落内からは大阪湾岸産製塩土器が出土している。

古代 現在の古国府や上野周辺に豊後国府が位置していたと想定されるが、政庁本体に位置付け可能な遺構は現状確認されていない。上野丘陵沿いの竜王畑遺跡では7世紀後半から10世紀までのまとまった大規模建物群が検出されている。とくに9世紀代には同一方位上に規格性をもって配置された建物群がみられ、それらは国司館など豊後国府に関係する可能性が高い遺跡として評価される。上野丘陵の北に位置する金池南遺跡では焼塩用製塩土器の廃棄土坑や剝貫式の井戸枠が検出され、近接する上野町遺跡では円面硯や墨書き土器の出土がみされることから、当該地周辺の遺跡は大分川下流域の水上交通を担う拠点としての機能が想定されている。

中世 13世紀に入ると大友氏がこの地域で支配権を掌握し、14世紀には万寿寺が建立される。以降、大分川下流域西岸で大友氏遺跡を中心とした町づくりが盛んとなり、17世紀初頭の府内城下町移転まで継続する。中世大友府内町跡からは通有の生活道具に加え、対外貿易に伴う品々やキリスト教関連の遺物が確認されることとは、この地が当該期における流通の中心であったことを物語る。上野丘陵には土壘や堀を巡らせる上野原館が築かれ、対岸の守岡遺跡内では山城的な性格を有する遺構が確認されている。大友氏の改易に伴い、福原氏による府内城の築城が開始されると府内城下町へと町が移動し、中世都市としての府内はその役目を終えることとなる。



1 府内城・城下町	11 上野町遺跡	21 竜王畠遺跡	31 大分川河川敷3遺跡	41 鳥越伽藍石仏
2 牧遺跡	12 大友館跡	22 元町石仏	32 大分川河川敷1遺跡	42 守岡遺跡
3 牧六分遺跡	13 若宮八幡宮遺跡	23 岩屋寺横穴墓群	33 大分川河川敷2遺跡	43 守岡古墳
4 大道遺跡群	14 蒋山万寿寺跡	24 岩屋寺遺跡	34 津守遺跡	44 曲平横穴墓群
5 松栄山横穴墓群	15 大分川河川敷4遺跡	25 古国府遺跡群	35 松平忠直津守館跡	45 曲遺跡
6 高城石棺群	16 穴井前横穴墓群	26 机張原遺跡	36 碇山横穴墓群	
7 下郡横穴墓群	17 下郡遺跡群	27 羽田遺跡	37 碇山山頂遺跡	
8 北下郡横穴墓群	18 上野遺跡群	28 長谷横穴墓群	38 津守古墳	A 府内城跡
9 中世大友府内町跡	19 上野館跡	29 滝尾百穴横穴古墳群	39 滝尾守岡横穴墓群	B 大友氏遺跡
10 金池南遺跡	20 大臣塚古墳	30 岩屋遺跡	40 曲迫横穴墓群	C 曲石仏

第7図 下郡遺跡群の位置と周辺の遺跡 (1/25,000)

第3節 下郡遺跡群の既往調査

下郡遺跡群は、大分市教育委員会によって149次にわたる発掘調査が実施されてきた。昭和30年代には「下郡第2段丘遺跡」として認識されていた下郡遺跡群は〔大分市1931〕、昭和59年から開始した下郡地区の土地区画整理事業に伴う事前調査によって遺物や遺構が確認されたため、埋蔵文化財包蔵地としての面積が拡張され、延べ面積96haを対象に大規模な発掘調査が平成16年まで行われた。その膨大な調査成果については、10巻からなる大部の正式報告書に詳細に記述されており、下郡遺跡群は縄文時代後期から現代まで続く人間活動が確認できる大規模な複合遺跡であることが明らかとなった。平成22年、土地区画整理事業に伴う大規模な発掘調査の報告書刊行が終了した後も、宅地建設などに伴って小規模ながら遺跡群内での調査が実施されている。本節では、現在までの既往調査を整理して概略する。また、大分県教育委員会が調査を行った「下郡桑苗遺跡」〔高橋編1981・1983〕の成果も非常に重要であるため、併せて記述する。

なお、本節を含む本報告書においては、大分市教育委員会による調査内容とその検討成果を積極的に評価し、報告書に掲載された遺物の分類や年代観、遺跡の評価についての多くを依拠したことを断つておく。

旧石器時代 遺跡内において旧石器時代に位置づけられる遺構は見つかっていない。

縄文時代 下郡桑苗遺跡における縄文時代後期の貯蔵穴を除けば明確な遺構は確認されていない。縄文土器が各地点において点的ではあるものの確認されており、縄文時代後期の中津式や福田KⅡ式の段階には当該地での人間活動が開始された可能性が高い。

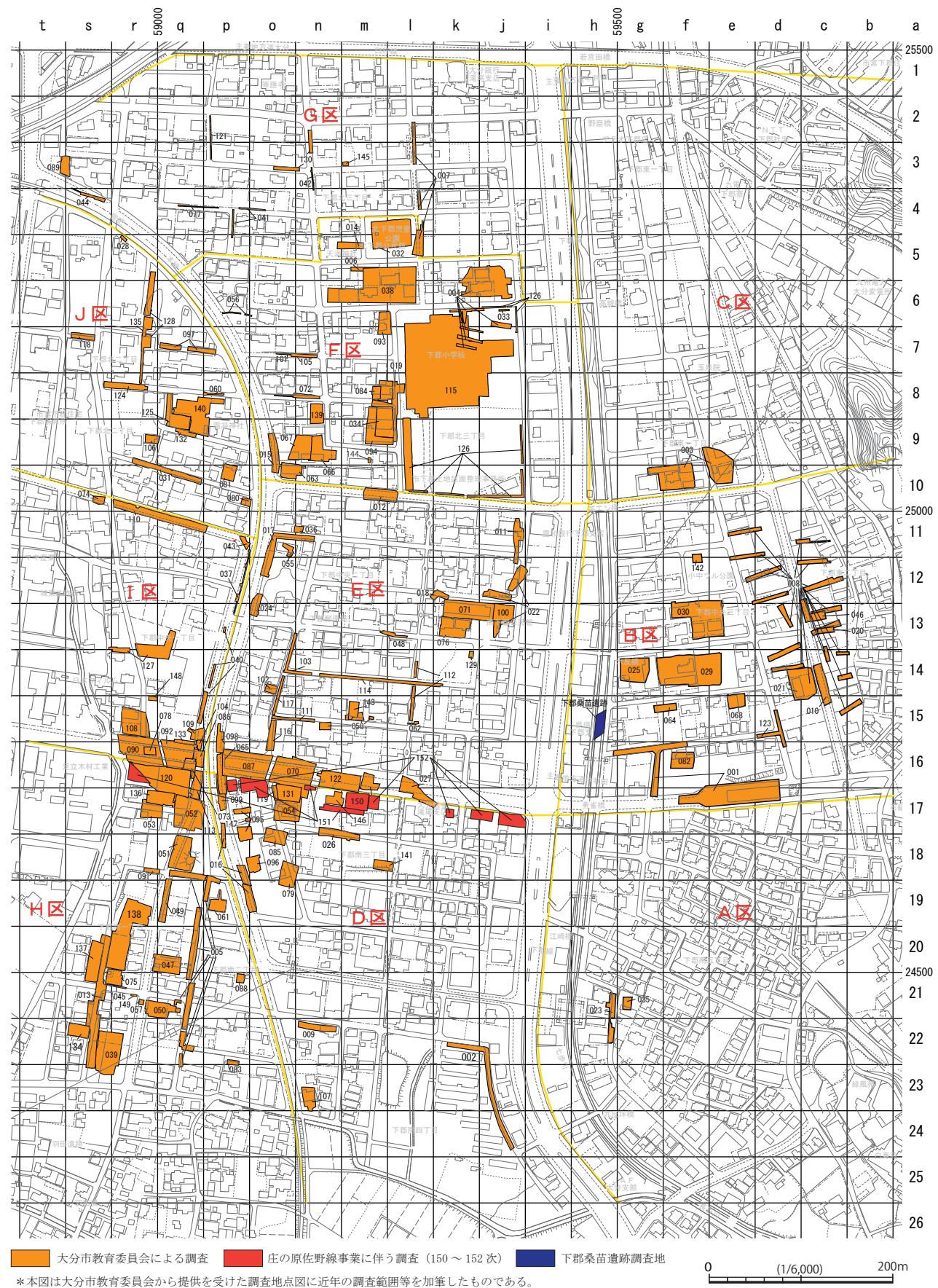
弥生時代 下郡遺跡群において人間活動の痕跡が顕著となるのは弥生時代からである。遺跡群内の自然堤防上には前期末から中期初頭にかけて遺構・遺物が増加し、中期から後期には遺跡の大規模化・密集化が確認でき、後期後葉には環濠が築かれる。中期には下城式土器と東北部九州系土器が共存し、後期には安国寺式土器が成立し型式変化を遂げる。土器・石器が多量に出土する一方で、青銅製鉢や鉈状製品が出土した以外は、鏡や銅剣・銅矛などの青銅器はみられない。旧河道に該当する第25次調査地や下郡桑苗遺跡では多量の木器や動物遺存体が確認された。

古墳時代 弥生時代のような集落の密集は見られなくなるが、遺跡内広範囲に分布するようになる。前期段階は在地系土器に加え、布留式系統の要素が土器組成に看取できる。第18次調査ではTK43型式並行期の陶質土器が出土し、中期における半島との関係性が示唆される。遺跡群東側の丘陵崖面には後期の横穴墓群が展開するが、遺跡群内にそれに対応する集落の存在は明確でない。

古代 8世紀中頃に遺跡の大規模化が進み、9世紀前半頃までは規模が縮小するが、10世紀頃まで継続する。検出遺構には大形の掘立柱建物跡、井戸跡、道路跡（豊後大分型道路）などがある。円面硯や墨書き土器、刻書き土器、石帶など古代官衙に関連する重要な遺物が確認されている。地名の「こおり」や遺跡の分布等から大分郡衙の最有力推定地と推定されており、その評価を裏付けるものと思われる。

中世 古代末期から中世前半期は、以前のような遺跡の大規模化は認められない。その一方で畿内産土師器、楠葉型・和泉型瓦器碗等が一定量確認されることから、複数の小集落が構成されていた可能性があり、大分川に面する交易の要衝としての機能が指摘される。中世後半期の戦国期には現代につながる地割・地名が成立し、方形館の築造が確認できる。華南三彩陶器、タイ・ノイ川窯産の陶器、朝鮮王朝産陶磁器の出土は中世大友府内町跡と強い関連性をもつと考えられる。

近世 水田用水確保のための「はねつるべ」に付属する溝状遺構が確認される。近世墓も多く確認されており、17世紀後半から19世紀後半の間に墓群が形成されたと指摘される。



第8図 下郡遺跡群既往調査地一覧 (1/6,000)

第2章 遺跡の立地と環境

第1表 下郡遺跡群調査一覧1

調査 次数	調査 機関	調査年度	調 査 エリ亞	調査 面積 (m ²)	調査原因	報告書名	報告書刊行	主な時代	主な調査成果(遺構/遺物)
1次	市教委	昭和62年度	B区	2130.0	区画整理				
2次	市教委	昭和62年度	D区	800.0	区画整理				
3次	市教委	昭和62年度	C区	2600.0	区画整理	下郡遺跡群VII	平成21年3月	弥生	竪穴建物、溝状遺構/弥生土器、青銅製鉗
4次	市教委	昭和62年度	F区	1900.0	区画整理	下郡遺跡群VII	平成21年3月	弥生	竪穴建物/弥生土器、須恵器、舟形土製品
5次	市教委	昭和63年度	H区	2007.0	区画整理	下郡遺跡群VII	平成21年3月	弥生	竪穴建物/弥生土器、青銅製鉗状製品
6次	市教委	昭和63年度	F区	120.0	区画整理	概報(1)	平成2年3月	中世	掘立柱建物
7次	市教委	昭和63年度	G区	530.0	区画整理	下郡遺跡群VII	平成21年3月	奈良・中世	掘立柱建物/土師器、須恵器
8次	市教委	昭和64年度	B区	2399.0	区画整理	下郡遺跡群V	平成19年3月	弥生	縄文土器、弥生土器
9次	市教委	昭和63年度	D区	428.0	区画整理	概報(1)	平成2年3月	弥生・古代・中世	竪穴建物、掘立柱建物、溝状遺構
10次	市教委	昭和63年度	B区	383.0	区画整理	概報(1)	平成2年3月	弥生・古墳	縄文土器、弥生土器、石器
11次	市教委	昭和63年度	E区	331.0	区画整理	概報(1)	平成2年3月	弥生・古墳・近世	竪穴建物、溝状遺構/弥生土器
12次	市教委	昭和63年度	E区	450.0	区画整理	概報(1)	平成2年3月	近現代	溝状遺構
13次	市教委	平成元年度	H区	2500.0	区画整理	下郡遺跡群VII	平成21年3月	弥生・古墳	竪穴建物、溝状遺構/弥生土器、土師器、須恵器
14次	市教委	平成元年度	F区	200.0	区画整理				
15次	市教委	平成元年度	F区	500.0	区画整理	下郡遺跡群IV	平成18年3月	弥生・古墳・中世	竪穴建物、弥生墓、中世墓
16次	市教委	平成元年度	D区	2200.0	区画整理				
17次	市教委	平成元年度	E区	700.0	区画整理	年報1	平成2年12月	古墳～中世	竪穴建物、掘立柱建物、溝状遺構、井戸
18次	市教委	平成元年度	E区	150.0	区画整理	下郡遺跡群VI	平成20年3月	弥生・古墳	竪穴建物、溝状遺構/土師器、陶質土器
19次	市教委	平成元年度	F区	700.0	区画整理	下郡遺跡群VII	平成21年3月	弥生・奈良・中世	竪穴建物、掘立柱建物/土師器、須恵器、木製品
20次	市教委	平成元年度	B区	240.0	区画整理				
21次	市教委	平成元年度	B区	1600.0	区画整理				
22次	市教委	平成2年度	E区	791.0	区画整理				
23次	市教委	平成2年度	A区	850.0	区画整理	概報(3)	平成4年12月	弥生・古墳	溝状遺構、水田関連遺構/土師器
24次	市教委	平成2年度	E区	210.0	区画整理	概報(3)	平成4年12月	古代・中世	溝状遺構、井戸/土師器、古錢
25次	市教委	平成2年度	B区	900.0	区画整理	下郡遺跡群III	平成17年3月	縄文・弥生	流路跡、溝状遺構/縄文土器、木器
26次	市教委	平成2年度	D区	360.0	区画整理	概報(3)	平成4年12月	弥生・中世	掘立柱建物、井戸/瓦質土器、石鍋
27次	市教委	平成2年度	E区	450.0	区画整理	概報(3)	平成4年12月	古墳・古代	竪穴建物、溝状遺構/土師器、須恵器
28次	市教委	平成2年度	J区	52.5	区画整理	概報(3)	平成4年12月	弥生・古墳	弥生土器・土師器
29次	市教委	平成3年度	B区	2800.0	区画整理	下郡遺跡群VII	平成21年3月	弥生・奈良・中世	竪穴建物、掘立柱建物/弥生土器、土師器
30次	市教委	平成3年度	B区	2500.0	区画整理	下郡遺跡群VII	平成21年3月	弥生・奈良・中世	竪穴建物、掘立柱建物/弥生土器、土師器
31次	市教委	平成4年度	J区	500.0	区画整理	下郡遺跡群V	平成19年3月	弥生～奈良	竪穴建物/弥生土器、土師器
32次	市教委	平成4年度	F区	1400.0	区画整理	下郡遺跡群V	平成19年3月	弥生・奈良	掘立柱建物、溝状遺構/土師器、須恵器、製塩土器
33次	市教委	平成4年度	F区	24.0	区画整理	下郡遺跡群V	平成19年3月	奈良～	道路状遺構
34次	市教委	平成4年度	F区	1000.0	区画整理	下郡遺跡群VII	平成21年3月	古代	掘立柱建物、溝状遺構/土師器、刻書土器、硯
35次	市教委	平成4年度	A区	6.0	区画整理	概報(4)	平成5年12月		足跡状遺構
36次	市教委	平成4年度	E区	16.0	区画整理	下郡遺跡群IV	平成18年3月	弥生・近現代	
37次	市教委	平成5年度	I区	110.0	区画整理	下郡遺跡群V	平成19年3月	弥生・近世	溝状遺構/弥生土器、土師器、近世陶磁器
38次	市教委	平成5年度	F区	3100.0	区画整理	下郡遺跡群VII	平成21年3月	古代～近世	掘立柱建物、溝状遺構/土師器、陶磁器
39次	市教委	平成5年度	H区	1200.0	区画整理	下郡遺跡群VII	平成22年3月	弥生	竪穴建物、壺棺墓、溝状遺構/弥生土器
40次	市教委	平成5年度	I区	246.0	区画整理	下郡遺跡群V	平成19年3月	弥生	溝状遺構/弥生土器
41次	市教委	平成5年度	G区	81.5	区画整理				
42次	市教委	平成5年度	G区	48.0	区画整理				
43次	市教委	平成5年度	I区	70.0	区画整理	年報5	平成6年12月	弥生	溝状遺構/弥生土器
44次	市教委	平成5年度	G区	120.0	区画整理	下郡遺跡群V	平成19年3月	弥生・古墳	土師器
45次	市教委	平成5年度	H区	41.0	区画整理	下郡遺跡群V	平成19年3月	近世	溝状遺構
46次	市教委	平成5年度	B区	310.0	区画整理	下郡遺跡群V	平成19年3月	弥生	縄文土器、弥生土器
47次	市教委	平成5年度	H区	589.0	区画整理	下郡遺跡群V	平成19年3月	奈良～近世	溝状遺構、井戸跡/土師器、白磁、瓦
48次	市教委	平成5年度	E区	96.0	区画整理				
49次	市教委	平成6年度	H区	350.0	区画整理	下郡遺跡群V	平成19年3月	弥生～奈良	溝状遺構/弥生土器・土師器・瓦器・古錢
50次	市教委	平成6年度	H区	481.0	区画整理	下郡遺跡群VI	平成20年3月	弥生	竪穴建物、壺棺墓、溝状遺構/弥生土器
51次	市教委	平成6年度	H区	936.0	区画整理	下郡遺跡群IV	平成18年3月	弥生・古墳・近世	竪穴建物、溝状遺構/炭化米・豆
52次	市教委	平成6年度	H区	1088.0	区画整理	下郡遺跡群IV	平成18年3月	弥生～奈良	方形周溝遺構、貯蔵穴
53次	市教委	平成6年度	H区	460.0	区画整理	下郡遺跡群IV	平成18年3月	弥生	
54次	市教委	平成6年度	D区	203.0	区画整理				
55次	市教委	平成6年度	E区	110.0	区画整理	下郡遺跡群V	平成19年3月	弥生	溝状遺構/弥生土器
56次	市教委	平成6年度	F区	298.0	区画整理				
57次	市教委	平成6年度	H区	16.0	区画整理	下郡遺跡群V	平成19年3月	弥生	溝状遺構/弥生土器

第2表 下郡遺跡群調査一覧2

調査 次数	調査 機関	調査年度	調査 エリア	調査 面積 (m ²)	調査原因	報告書名	報告書刊行	主な時代	主な調査成果（遺構・遺物）
58次	市教委	平成7年度	E区	256.0	区画整理	年報7	平成8年12月	弥生・近世	溝状遺構、貯蔵穴／弥生土器、瓦質土器
59次	市教委	平成7年度	E区	236.0	区画整理	年報7	平成8年12月	中世・近世	溝状遺構、中世墓、近世墓
60次	市教委	平成7年度	J区	46.0	区画整理	年報7	平成8年12月	弥生	堅穴建物／弥生土器
61次	市教委	平成7年度	H区	247.0	区画整理	下郡遺跡群IV	平成18年3月	弥生・奈良・中世	溝状遺構、道路状遺構
62次	市教委	平成7年度	E区	23.4	区画整理				
63次	市教委	平成7年度	F区	742.5	区画整理	下郡遺跡群IV	平成18年3月	弥生・古墳・中世	溝状遺構
64次	市教委	平成7年度	B区	120.0	区画整理				
65次	市教委	平成7年度	E区	93.3	区画整理	下郡遺跡群IV	平成18年3月	弥生・古墳・中世	堅穴建物、道路状遺構
66次	市教委	平成7年度	F区	578.0	区画整理	下郡遺跡群IV	平成18年3月	弥生・古墳・中世	堅穴建物、掘立柱建物
67次	市教委	平成7年度	F区	485.0	区画整理	下郡遺跡群IV	平成18年3月	弥生・古墳・中世	溝状遺構／古錢
68次	市教委	平成7年度	B区	251.0	区画整理	下郡遺跡群VI	平成20年3月	奈良	溝状遺構、井戸跡／弥生土器、土師器
69次	市教委	平成7年度	E区	405.0	区画整理	下郡遺跡群IV	平成18年3月	弥生・古墳	堅穴建物、道路状遺構
70次	市教委	平成7年度	E区	1655.0	区画整理	年報7	平成8年12月	弥生・近世	溝状遺構／弥生土器
71次	市教委	平成7年度	E区	1050.0	区画整理	下郡遺跡群VI	平成20年3月	弥生・中世・近世	方形周溝遺構、溝状遺構／弥生土器、土師器
72次	市教委	平成7年度	F区	113.5	区画整理				
73次	市教委	平成7年度	H区	223.0	区画整理	年報7	平成8年12月	弥生・古墳	堅穴建物、溝状遺構／弥生土器
74次	市教委	平成7年度	I区	100.0	区画整理	下郡遺跡群V	平成19年3月	弥生	堅穴建物／弥生土器、汽車土瓶
75次	市教委	平成7年度	H区	300.0	区画整理	下郡遺跡群IV	平成18年3月	縄文～奈良	堅穴建物、溝状遺構／縄文土器、鉄器
76次	市教委	平成7年度	E区	660.0	区画整理	下郡遺跡群VI	平成20年3月	弥生	溝状遺構、壺棺墓、貯蔵穴
77次	市教委	平成7年度	G区	315.0	区画整理				
78次	市教委	平成7年度	I区	100.0	区画整理				
79次	市教委	平成7年度	D区	468.0	区画整理	年報8	平成9年12月	弥生・中近世	貯蔵穴、溝状遺構／近世陶磁器、磁器人形
80次	市教委	平成7年度	J区	84.0	区画整理	下郡遺跡群V	平成19年3月	中世	溝状遺構／京都系土師器、青磁、タイ産焼締陶器
81次	市教委	平成7年度	J区	238.0	区画整理	下郡遺跡群V	平成19年3月	奈良～近世	溝状遺構、廐棄土坑／陶胎染付、獸骨
82次	市教委	平成8年度	B区	161.4	区画整理	下郡遺跡群VI	平成20年3月	弥生・古墳	旧河道／弥生土器
83次	市教委	平成8年度	H区	65.0	区画整理	下郡遺跡群VI	平成20年3月	弥生	溝状遺構／土師器
84次	市教委	平成8年度	F区	120.0	区画整理	年報8	平成9年12月	古代	掘立柱建物／土師器、須恵器
85次	市教委	平成8年度	D区	345.0	区画整理	年報8	平成9年12月	弥生・中近世	貯蔵穴、井戸／弥生土器、須恵器、陶磁器
86次	市教委	平成8年度	I区	339.0	区画整理	年報8	平成9年12月	弥生～古代	堅穴建物、掘立柱建物、溝状遺構
87次	市教委	平成8年度	E区	1596.6	区画整理	下郡遺跡群VII	平成22年3月	弥生	堅穴建物、溝状遺構／弥生土器
88次	市教委	平成8年度	H区	300.0	区画整理	年報8	平成9年12月	弥生・古代～近世	堅穴建物、溝状遺構／製塙土器
89次	市教委	平成8年度	G区	210.0	区画整理	年報8	平成9年12月	古代	溝状遺構／縄文土器、土師器
90次	市教委	平成9年度	I区	1315.0	区画整理	下郡遺跡群I	平成14年3月	弥生～古墳・奈良	堅穴建物、掘立柱建物／製塙土器、円面硯
91次	市教委	平成9年度	H区	80.0	区画整理	下郡遺跡群I	平成14年3月	弥生～古墳	堅穴建物、貯蔵穴
92次	市教委	平成9年度	I区	850.0	区画整理	下郡遺跡群I	平成14年3月	弥生～古墳・奈良	堅穴建物、道路状遺構／京都系土師器
93次	市教委	平成9年度	F区	467.0	区画整理	下郡遺跡群VI	平成20年3月	近世	溝状遺構、水溜状遺構／近世陶磁器
94次	市教委	平成9年度	F区	1576.0	区画整理	下郡遺跡群VI	平成20年3月	弥生・古代・中世	掘立柱建物、土坑墓、溝状遺構／土師器、須恵器
95次	市教委	平成9年度	D区	300.0	区画整理	下郡遺跡群VII	平成21年3月	弥生・中近世	溝状遺構／弥生土器、土師器、陶磁器、獸骨
96次	市教委	平成9年度	D区	215.0	区画整理	年報9	平成10年12月	弥生・中近世	掘立柱建物、土坑墓、溝状遺構／土師器、須恵器
97次	市教委	平成9年度	J区	327.0	区画整理	年報9	平成10年12月	弥生・古代～近世	溝状遺構、道路状遺構、井戸／土師器、須恵器
98次	市教委	平成9年度	E区	207.0	区画整理	下郡遺跡群III	平成17年3月	弥生	貯蔵穴、溝状遺構、道路状遺構
99次	市教委	平成9年度	D区	313.0	区画整理	下郡遺跡群III	平成17年3月	弥生	貯蔵穴、溝状遺構、道路状遺構
100次	市教委	平成9年度	E区	543.0	区画整理	下郡遺跡群VI	平成20年3月	弥生・中世・近世	溝状遺構、池状遺構／土師器、須恵器、陶磁器
101次	市教委	平成9年度	F区	25.0	区画整理	年報9	平成10年12月	古代～近世	須恵器、近世陶磁器
102次	市教委	平成9年度	E区	200.0	区画整理	下郡遺跡群VI	平成20年3月	中世・近現代	溝状遺構／土師器、陶磁器、瓦
103次	市教委	平成9年度	E区	270.0	区画整理	下郡遺跡群VI	平成20年3月	弥生・中近世	溝状遺構、近世墓／縄文土器、弥生土器、土師器
104次	市教委	平成9年度	I区	150.0	区画整理	年報9	平成10年12月	弥生・中近世	溝状遺構、井戸、近世墓／弥生土器、陶磁器
105次	市教委	平成9年度	F区	100.0	区画整理	年報9	平成10年12月	近世・近代	溝状遺構、井戸／近世陶磁器
106次	市教委	平成10年度	J区	120.0	区画整理	下郡遺跡群V	平成19年3月	中世	京都系土師器、東播系須恵器、土師質鍋
107次	市教委	平成10年度	D区	305.0	区画整理	下郡遺跡群VI	平成20年3月	弥生～中世	溝状遺構／弥生土器、土師器、瓦器、陶磁器
108次	市教委	平成10年度	I区	771.0	区画整理	下郡遺跡群V	平成19年3月	弥生～奈良	堅穴建物、配石土坑、溝状遺構／弥生土器、土師器
109次	市教委	平成10年度	I区	183.0	区画整理	年報10	平成11年12月	弥生～近世	堅穴建物、溝状遺構／弥生土器、土師器、須恵器
110次	市教委	平成10年度	I区	1434.0	区画整理	下郡遺跡群VI	平成20年3月	中近世	溝状遺構、近世墓／京都系土師器、陶磁器、古錢
111次	市教委	平成10年度	E区	165.0	区画整理	下郡遺跡群V	平成19年3月	弥生・近世	井戸跡／弥生土器、輸入陶磁器
112次	市教委	平成10年度	E区	160.5	区画整理	年報10	平成11年12月	弥生・近世	溝状遺構／弥生土器
113次	市教委	平成10年度	H区	301.0	区画整理	年報10	平成11年12月	弥生・古墳・中世	堅穴建物、方形周溝遺構、溝状遺構／弥生土器
114次	市教委	平成10年度	E区	451.0	区画整理	年報10	平成11年12月	弥生・中近世	溝状遺構、井戸、近世墓／弥生土器、輸入陶磁器

第2章 遺跡の立地と環境

第3表 下郡遺跡群調査一覧3

調査 次数	調査 機関	調査年度	調査 エリア	調査 面積 (m ²)	調査原因	報告書名	報告書刊行	主な時代	主な調査成果（遺構／遺物）
115次	市教委	平成10・11年度	F区	8740.0	学校建設	下郡遺跡群II	平成15年3月	奈良～中世	掘立柱建物、道路状遺構／移動式竈
116次	市教委	平成10年度	E区	246.0	区画整理	下郡遺跡群V	平成19年3月	近世	溝状遺構、井戸跡／近世陶磁器
117次	市教委	平成10年度	E区	120.0	区画整理	下郡遺跡群V	平成19年3月	弥生・古墳・近世	堅穴建物／弥生土器
118次	市教委	平成10・11年度	J区	149.0	区画整理	年報11	平成12年12月	弥生・古墳・近世	堅穴建物、近世墓／弥生土器、土師器、古錢
119次	市教委	平成11年度	D区	150.0	区画整理	年報11	平成12年12月	弥生～近世	堅穴建物、溝状遺構、近世墓／弥生土器、土師器
120次	市教委	平成10年度	H区	1600.0	区画整理	下郡遺跡群IV	平成18年3月	弥生～中世	堅穴建物、掘立柱建物、溝状遺構
	市教委	平成11年度	H区			下郡遺跡群VI	平成20年3月		堅穴建物、掘立柱建物／弥生土器、土師器、刻骨
121次	市教委	平成11年度	G区	189.0	区画整理	年報11	平成12年12月	近世	溝状遺構／近世陶磁器
122次	市教委	平成11年度	E区	800.0	区画整理	下郡遺跡群VI	平成20年3月	近世・現代	溝状遺構、近世墓／近世陶磁器、墨書き木製品
123次	市教委	平成11年度	B区	158.0	区画整理	年報11	平成12年12月	弥生	弥生土器
124次	市教委	平成11年度	J区	360.0	区画整理	年報11	平成12年12月	弥生・古墳・近世	堅穴建物、溝状遺構
125次	市教委	平成12年度	J区	550.0	区画整理	年報12	平成13年3月	弥生・古墳・中世	堅穴建物、溝状遺構
126次	市教委	平成12年度	F区	1150.0	学校建設	下郡遺跡群II	平成15年3月	弥生・古代	堅穴建物、掘立柱建物
127次	市教委	平成12年度	I区	840.0	区画整理	年報12	平成13年3月	弥生～中世	堅穴建物、掘立柱建物、溝状遺構
128次	市教委	平成12年度	J区	523.0	区画整理	年報13	平成14年3月	古代～近世	溝状遺構、道路状遺構
129次	市教委	平成12年度	H区	33.0	区画整理	年報12	平成13年3月	弥生・中近世	溝状遺構
130次	市教委	平成12年度	G区	212.0	区画整理	年報12	平成13年3月	近世	溝状遺構、井戸／近世陶磁器、獸骨
131次	市教委	平成12年度	D区	442.0	区画整理	年報12	平成13年3月	弥生・近世・近代	溝状遺構、井戸／弥生土器、近世陶磁器
132次	市教委	平成12・13年度	J区	188.0	区画整理	年報12	平成13年3月	中近世	溝状遺構、近世墓／土師器、近世陶磁器
133次	市教委	平成13年度	I区	78.96	区画整理	年報13	平成14年3月	弥生～中世	堅穴建物、溝状遺構、道路状遺構
134次	市教委	平成13年度	H区	416.0	区画整理	年報13	平成14年3月	中世	溝状遺構
135次	市教委	平成13年度	J区	152.0	区画整理	年報13	平成14年3月	古代～近世	掘立柱建物、溝状遺構、道路状遺構
136次	市教委	平成13年度	H区	417.0	区画整理	年報13	平成14年3月	弥生・古墳	堅穴建物、溝状遺構／弥生土器
137次	市教委	平成13年度	H区	508.0	区画整理	下郡遺跡群V	平成19年3月	弥生・古墳	堅穴建物／弥生土器
138次	市教委	平成14年度	H区	1774.0	区画整理	年報14	平成16年3月	弥生・古墳・中世	堅穴建物、溝状遺構
139次	市教委	平成14年度	F区	302.0	区画整理	下郡遺跡群V	平成19年3月	近世	溝状遺構、井戸跡／土師器、近世陶磁器
140次	市教委	平成14年度	J区	1136.0	区画整理	下郡遺跡群III	平成17年3月	弥生・古墳・中世	堅穴建物、土壙／中国産磁器、瓦質土器
141次	市教委	平成14年度	D区	214.0	区画整理	下郡遺跡群III	平成17年3月	弥生	溝状遺構／弥生土器
142次	市教委	平成14年度	B区	100.0	区画整理	下郡遺跡群III	平成17年3月	弥生	弥生土器
143次	市教委	平成15・16年度	E区	176.0	区画整理	下郡遺跡群III	平成17年3月	弥生・奈良・近世	井戸、近世墓、近代墓／染付
144次	市教委	平成21年度	F区	8.0	住宅建設	概報2010	平成22年12月	古代	
145次	市教委	平成21年度	F区	15.0	住宅建設	概報2010	平成22年12月	近世	溝状遺構
146次	市教委	平成22年度	D区	160.0	住宅建設	市第108集	平成23年3月	弥生・中世・近世	掘立柱建物、井戸／弥生土器、土師器、陶磁器
147次	市教委	平成22年度	D区	9.8	建物建設	概報2011	平成23年12月	古代・近世	溝状遺構、井戸跡
148次	市教委	平成24年度	I区	36.49	住宅建設	概報2013	平成26年3月	中世	溝状遺構／土師器、須恵器
149次	市教委	平成24年度	H区	10.92	住宅建設	概報2013	平成26年3月	弥生	溝状遺構／弥生土器
150次	県教委	令和3年度	D区	910.0	道路敷設	報告予定	報告予定	古代・中世・近現代	溝状遺構、井戸、近世墓／弥生土器、土師器、陶磁器
151次	県教委	令和4年度	H区	1800.0	道路敷設	一部本書	令和7年3月他	弥生・古代～近世	溝状遺構、井戸、近世墓／弥生土器、土師器、陶磁器
152次	県教委	令和5年度	D区	1100.0	道路敷設	一部本書	令和7年3月他	弥生・古代～近世	溝状遺構、水溜状遺構／土師器、陶磁器

○下郡桑苗遺跡における調査

調査 次数	調査 機関	調査年度	調査 エリア	調査 面積 (m ²)	調査原因	報告書名	報告書刊行	主な時代	主な調査成果（遺構／遺物）
一	県教委	昭和63年度	B区	82.0	河川改修	県80集	平成元年3月	弥生	流路跡、水田状遺構、貯蔵穴／縄文土器、弥生土器
一	県教委	昭和63年度	B区	230.0	河川改修	県89集	平成3年3月	弥生	流路跡／弥生土器、木器、獸骨

○その他の調査

調査 次数	調査 機関	調査年度	調査 エリア	調査 面積 (m ²)	調査原因	報告書名	報告書刊行	主な時代	主な調査成果（遺構／遺物）
一	市教委	平成29年度	G区	100.0	住宅建設	概報2018	平成31年3月	近世	溝状遺構／近世陶磁器

第1表～第3表凡例

・本一覧における記述は、刊行された報告書内容に従いながら作成した。表記を統一するため、変更した箇所もある。

・「報告書名」は略して記述した。詳細は報告書第5章の「参考・引用文献一覧」をご参照いただきたい。

・「年報」は「大分市埋蔵文化財調査年報」を、「概報」は「大分市埋蔵文化財調査概要報告」を略したものである。

年報：「大分市埋蔵文化財調査年報」1～19、概報：「大分市埋蔵文化財調査概要報告」2010～2018（大分市教育委員会）

なお、概報（1）等と表記したものは「下郡遺跡群発掘調査概報」（1）～（4）を示す。

第3章 調査の成果

第1節 発掘調査の概要と各調査区の設定

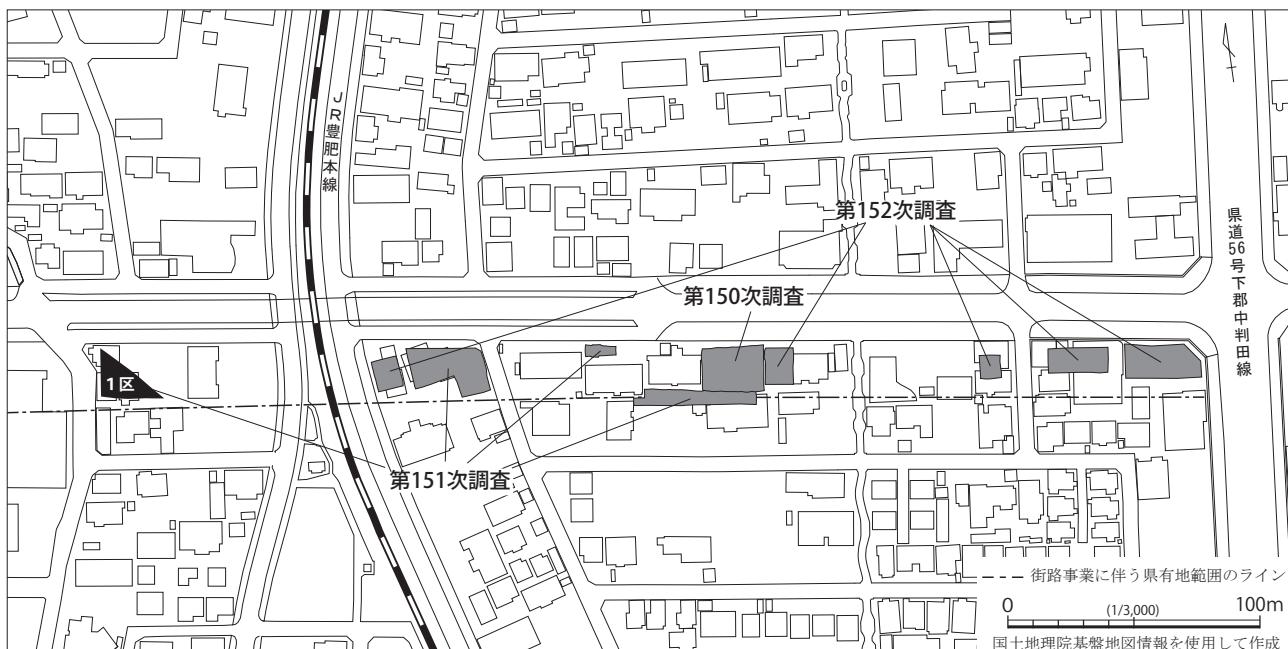
都市計画道路庄の原佐野線（下郡工区）街路改良事業に伴う下郡遺跡群の発掘調査は、大分市下郡南に位置する道路の沿線範囲で実施した。各調査の事業用地内において、発掘調査区に加え、排土置場や調査事務所・駐車場等を確保するため、151次・152次調査とともに1区から4区の調査区を設定した（以下、151次・2区などと表記する）。当該地の状況は、各調査所見のとおり、現代の造成や建物基礎によって、旧地形やその下の生活面が大きく損なわれていた。よって、遺跡の全容を明確にすることは困難であった。

設定した各調査区に対し、世界測地系の座標に基づいて10m方眼の調査グリッドを設定した。グリッド番号は、北から南にアルファベット、西から東にアラビア数字を付し、両者を組み合わせて使用した（第10図ほか）。遺構は検出した順に「S-0000（調査区の数字+4桁番号）」の遺構番号を付与した。遺構は写真及び実測図で記録し、出土遺物は調査区ごとに遺構又は調査グリッド単位で取上げた。遺構の性格に応じた遺構略号は報告書作成時に付し、遺構番号については混乱及び煩雑さを避けるため調査時のものを参考に下記のとおり記述した。

例 151-SH1002 (調査次数) - (遺構略号) (上1桁・調査区番号+下3桁・調査時番号)

第4表 庄の原佐野線事業に伴う本調査の内容

調査次数	調査面積	調査期間	法定手続等（文化財保護法）		
			本調査施行通知 (99条第1項)	埋蔵文化財発見通知 (100条第2項)	本調査終了報告
下郡遺跡群第150次調査	910 m ²	R3.11.16～R4.24	R3.9.28	R4.2.7 (148箱)	R4.2.7
下郡遺跡群第151次調査	1,800 m ²	R4.5.30～R4.12.23	R4.5.17	R4.12.23 (300箱)	R4.12.23
下郡遺跡群第152次調査	1,100 m ²	R5.6.1～R6.3.14	R5.6.1	R6.3.13 (150箱)	R6.3.14



第9図 下郡遺跡群の調査区配置図 (1/3,000)

第2節 第151次調査1区の成果

(1) 調査の概要と経過

151次 - 1区は、大分市下郡南1丁目に位置し、調査地の地番は100、101、102で地目はいずれも宅地である。調査前の標高は5.6mを測る。発掘調査区は計画路線に沿うように設定したため、本調査区は三角形状を呈している。また、本調査区は大分市教育委員会による下郡遺跡群第120次調査の南端部と北接する。151-1区の面積は286.6m²である。本調査区は令和4年6月10日に表土除去を開始し、同年6月25日に埋戻しを完了した。



第10図 1区遺構配置図 (1/150)

(2) 調査区の基本層序

本調査区は調査前に宅地が建設されており、現代の舗装版下にはコンクリート基礎や硬質の改良土が残されていた。それらを除去、または避けながら掘削を行ったが、堆積状況を良好に記録し得なかった。調査区土層の記録は、C 2 及び C 3 グリッド上の A-A' 間を用いた。第 11 図に本調査区の層序を示す。

現代地表面（舗装版、改良土など）から地山面まで約 1 ~ 1.2 m の深さであった。層序は搅乱部分から 1 層、2 層まで現代の造成に伴う面である。10 ~ 12 にかけては、砂を含むシルト層である。10 層については、大きく上層を貫くような状況を確認した。地震に伴う噴砂の可能性があるが、調査期間の都合上、これ以上の詳細を検討することはできなかった。調査で確認した遺構は、その多くは 5 層から 6 層の暗褐色土層に伴う。本来は更に上層の面が残っていた可能性が高いと思われる。調査区の東側、A 2・A 3 グリッド付近では地山に砂を多く含む状況が確認できた。調査区南部から北北西の方向へ向かって流れていた旧河道の痕跡と思われるが、詳細を明らかにしえなかつた。

(3) 主要な遺構と遺物

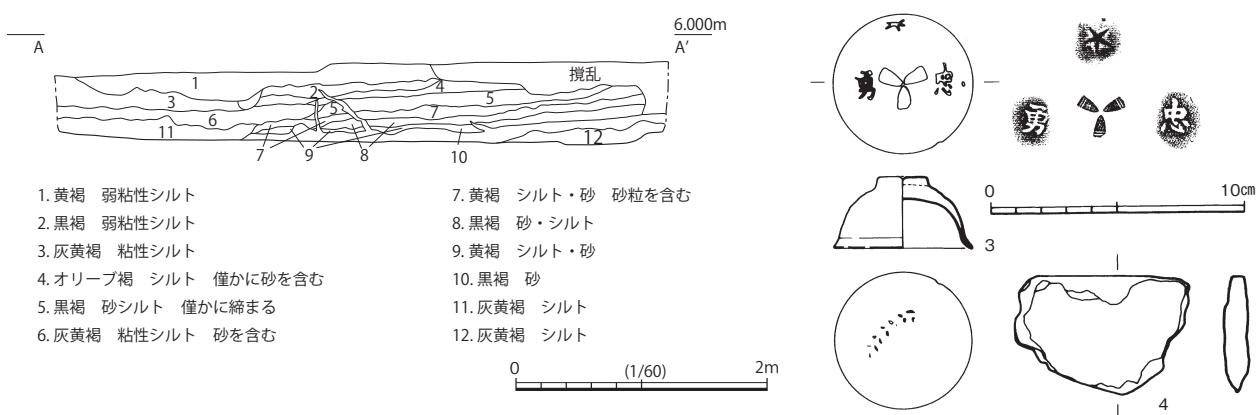
先述のとおり、本調査区は現代の削平、改良によって旧地形や遺跡の痕跡がほとんど失われていた。わずかに遺構が確認できたが、いずれも残りが悪く、本来の形状を留めていないと考えられる。C 3 グリッド付近に遺構が集中する様子がうかがえるが、遺構間の関係は不明である。主要な遺構は第 13 図に示した。以下、順に報告する。

土坑 151-SK1020、2022、2024、2025 はいずれも土坑である。SK1020、SK1024、SK1025 は円形プランである。いずれも遺物は確認できなかつた。SK1022 は長土坑である。遺物は出土していない。

ピット いずれも径 25 cm 程度の小型のピットである。SP1002 や SP1005 は調査区 B 1 グリッドに集中していただため、柱穴列や柵列を構成する可能性を考慮し、調査を進めたが、関係性は判然としなかつた。

遺物 上記の要因から、現代の搅乱に伴う産業廃棄物以外に遺物はほとんど出土しなかつた。表土掘削時に 2 点遺物を確認したため、第 12 図に示した。

3 は陶器の猪口である。器高 2.8 cm、口径 5.4 cm である。完形である。軍帽（ヘルメット）の形状が忠実に模倣され、外面に「忠勇」の 2 文字が、また星の文様も陽刻される。二文字に挟まれた中央部に、高台状の貼り付けが施される。尖頭状をなし、2 条の刻目が確認できるが、これは銃弾を模したものだろうか。特徴的な形状から、戦時に製作された「軍盃」であると判断した。4 は結晶片岩製の温石である。調整痕は確認できず石包丁である可能性も想定したが、残存する形状から温石と判断した。



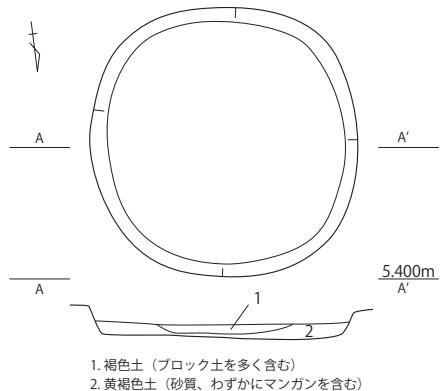
第 11 図 1 区土層断面図 (1/60)

第 12 図 1 区出土遺物実測図 (1/3)

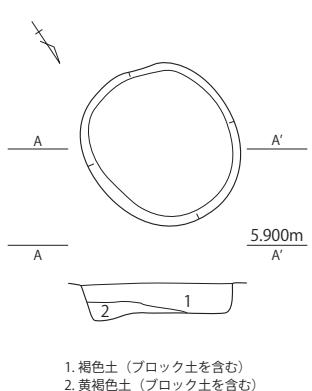
第3章 調査の成果

土坑

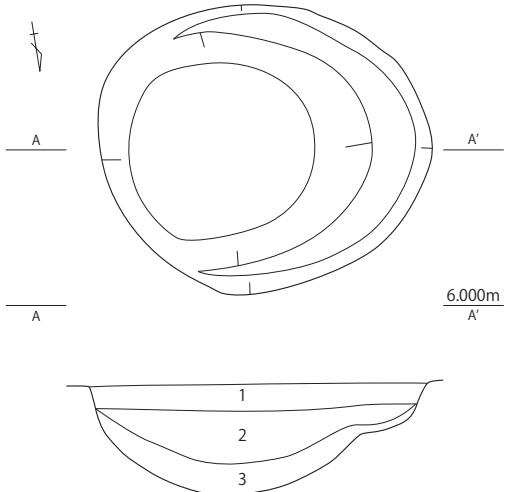
SK1020



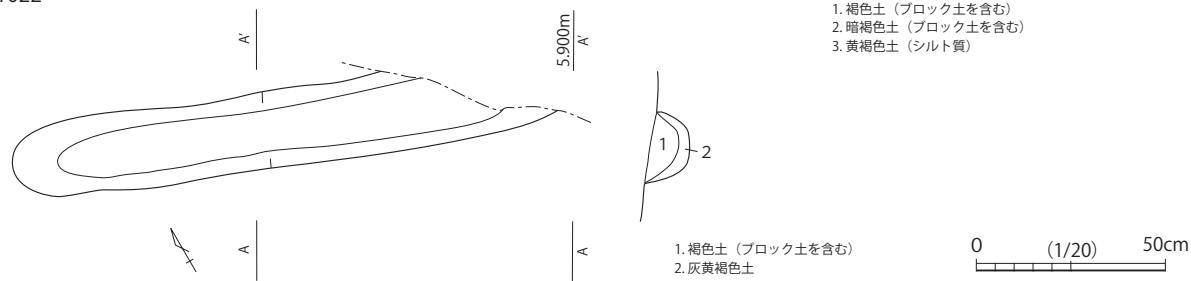
SK1024



SK1025

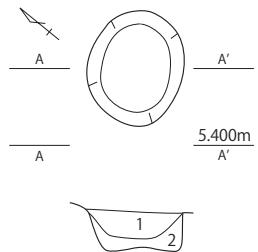


SK1022

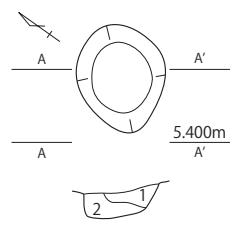


ピット

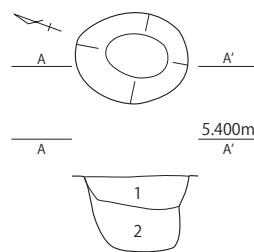
SP1001



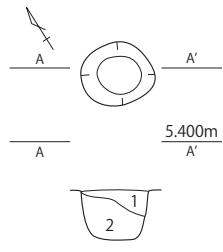
SP1002



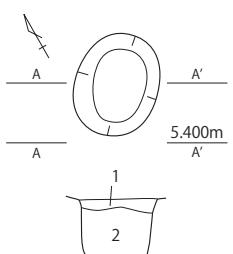
SP1005



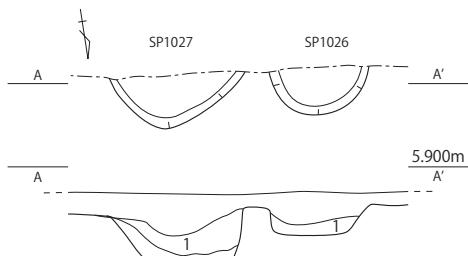
SP1007



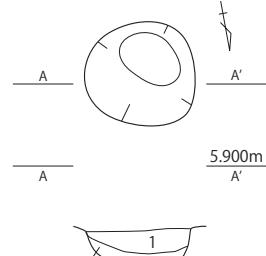
SP1008



SP1027・1026



SP1028



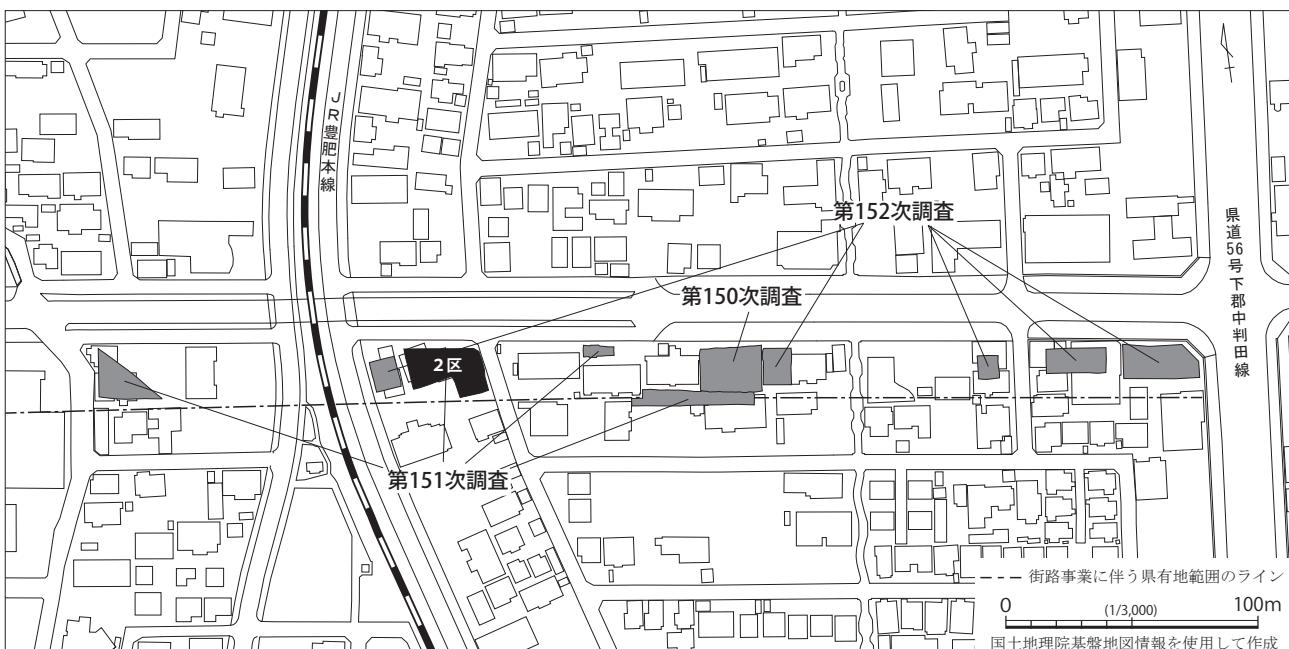
第13図 151次-1区主要遺構実測図 (1/20)

第3節 第151次調査2区の成果

(1) 調査の概要と経過

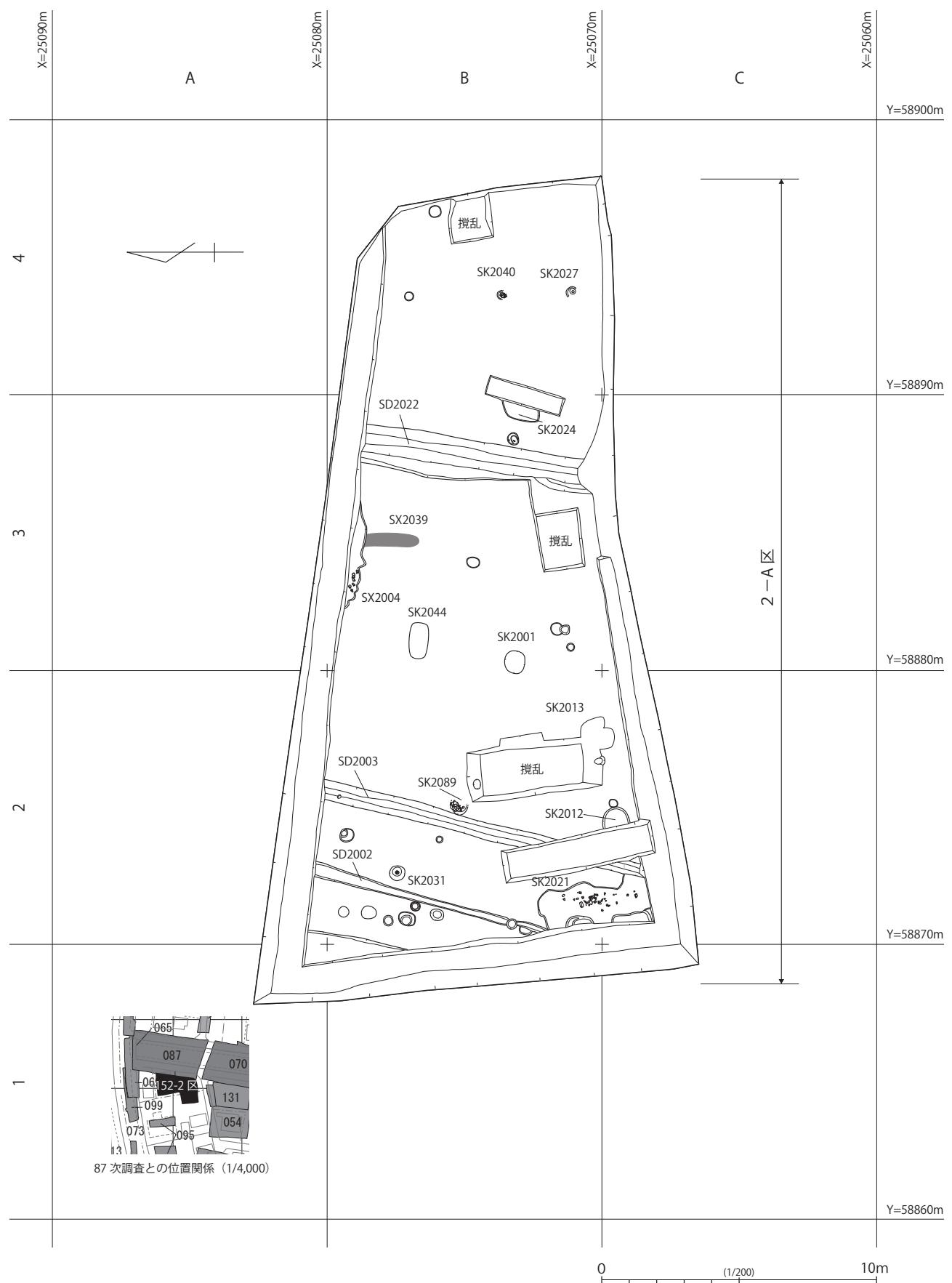
調査の概要 都市計画道路庄の原佐野線（下郡工区）街路改良事業に伴う下郡遺跡群第151次調査は、事前の試掘確認調査の結果や工事の進捗状況を踏まえ、1区から4区の調査区を設定して実施した。本節で報告する2区は152次調査における4区に接し、JR豊肥本線を挟んで東に151次調査1区が位置する（第14図）。調査地は大分市下郡南3丁目に所在し、地番は101・102・103-2、地目はいずれも宅地である。調査前の標高は6.8mを測る。本調査区は大分市教育委員会による下郡遺跡群第87次調査の調査区と北側が接している。調査区の形状は階段状を呈しており、発掘調査面積は438.5m²である。本調査区の発掘調査では弥生時代・古代・中世の遺構を確認したが、特に弥生時代と古代のものが多く、それ以外の時代に位置付けることができる遺構・遺物は少ない。遺構の分布はほぼ調査区の全体に認められ、特に空白域となるような箇所は存在しない。既往調査例と同様に、全体的に遺構の重複が激しく、また遺構埋土と基盤となる土層が酷似しており遺構プランや切り合い関係の把握は困難を極めた。その一方で、後世に削平を受けたために遺構の残りが悪い箇所も多く確認した。そのため、ある遺構の発掘中に本来はそれを切る遺構を新たに把握するなど、切り合い関係を十分に押さえられなかったものも少なからず存在する。従って遺構間における遺物の混在は完全には排除できなかった。調査に伴う廃土・掘削土置場の設置や用地状況・工事進捗の関係上、調査対象地すべてを一度に表土掘削することができなかつたため、2区内にA区・B区として掘削段階を分け調査を行った。それぞれ2-A区・2-B区と呼称した。

調査の経過 2区での調査は令和4年6月10日から同年10月25日まで実施した。2-A区の表土掘削を6月10日から開始し、6月17日から遺構検出を行った。他の調査区での調査も並行して行いながら、9月29日には2-B区の表土掘削を開始し、10月3日に調査対象地の表土掘削を完了した。10月5日まで遺構掘削を行い、10月13日には空撮を実施した。また、この期間中、大分市立滝尾中学校・大東中学校の職場体験に伴い、7月1日から8月31日まで7名の生徒を受け入れた。生徒たちは、発掘調査地の見学を行っ



第14図 下郡遺跡群の調査区配置図 (1/3,000)

第3章 調査の成果



第15図 2区1面目遺構配置図 (1/200)



第16図 2区2面目遺構配置図 (1/200)

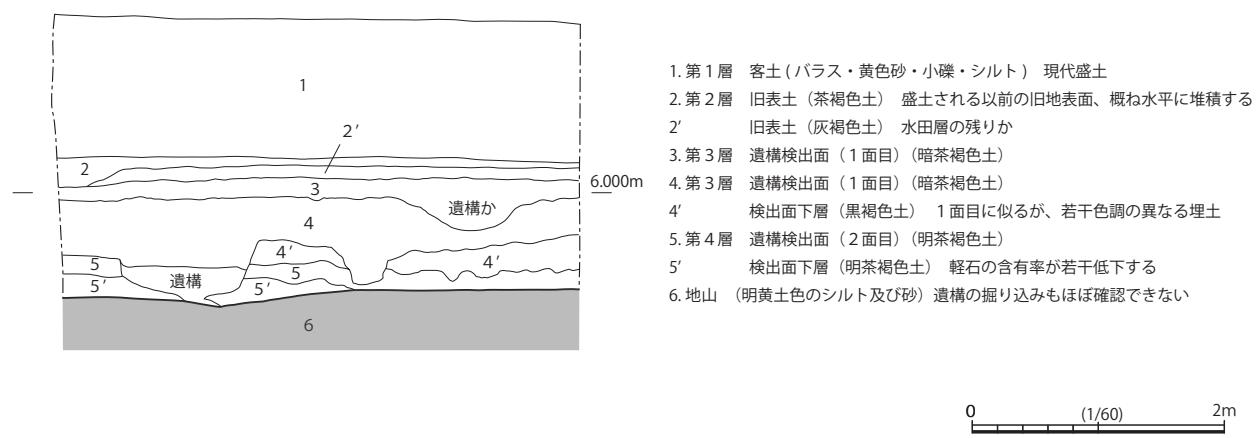
第3章 調査の成果

たのち、遺構の掘下げや遺物の取上げを体験した。調査期間中は盛夏晴天の日が続き、猛暑日を連日記録していたため、熱中症等の対策を十分に行い、休憩時間をこまめに設定した上で調査を進めた。10月19日には調査区内での作業を完了し、埋戻しへ入った。そして10月25日には埋戻しを完了し、大分土木事務所立会のもと、現地調査完了の確認を行った。

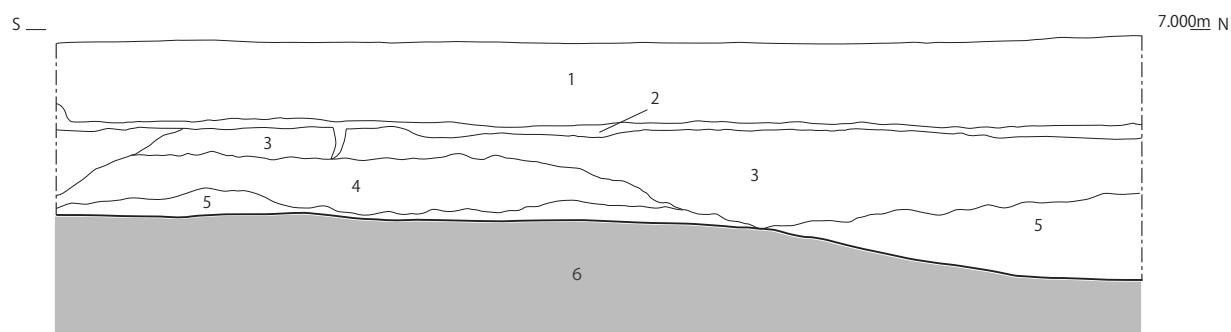
(2) 調査区の基本層序 (第17図)

2区の調査区土層断面図を第17図に示した。第1層は現代の客土であり、土地区画整理事業の際に調査地を含む一帯で盛土されたものである。第2層は旧表土の残りであると思われ、第1層に水平にカットされる様子が調査地内で確認できた。2層直下に粘性の高い暗茶褐色土の第3層が確認でき、遺物を多量に含んでいた。遺構検出をこの第3層で行ったが、3層土(暗茶褐色土)と遺構埋土が酷似しており、ラインの識別に困難を要した。そこで、この面を1面目として認識し、識別できた遺構や遺物の記録を行い、再度機械によって第3層を除去した。第3層直下には本来の基盤土層となる第4層(明茶褐色土層)が広がっており、この第2面で再度遺構検出を実施した。この層の下部に遺構の掘り込み最下部が集中するが、本来は第3層から掘り込まれていた可能性が高い。

2-A区調査区西壁土層断面図



2-B区調査区西壁土層断面図



第17図 2区土層断面図 (1/60)

(3) 主要な遺構と遺物

151次-2区において確認した主要な遺構・遺物について、遺構の種別順に報告する。

1. 溝 (SD)

溝と判断した遺構は、2-A区B2・B3グリッド間に集中する。確認できた3条の溝はすべて南北方向に調査区を貫き、調査区外へと展開する。そのため規模に関する全容を把握することはできなかったが、周辺地の既往調査において同様に南北方向へ伸びる溝が確認されているため、類似した性格を持つと思われる。以下、順に報告する。

151-SD2002 (第18図)

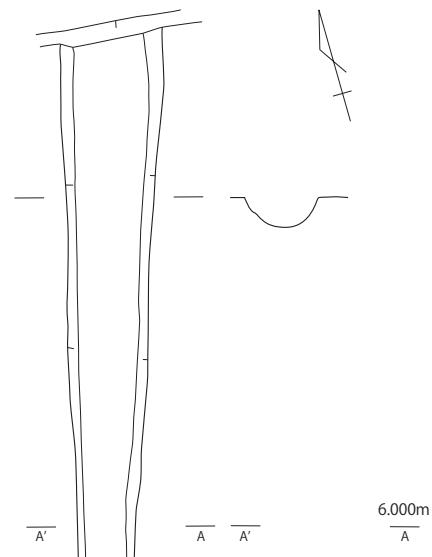
2-A区西部、B2グリッドで検出した溝である。南北に伸びながら調査区内を貫く。両端部は調査区壁面から外に展開しており、終端部分の確認はできなかった。遺構の規模は、南北方向で長さ7.2m、幅は0.4～0.7m、深さ0.2mを測る。大分市教育委員会による下郡遺跡群第87次調査における「087SD177」と同一遺構であり接続する可能性があるが、埋土等の対比が難しく、判然としない。埋土は2層に分層でき、若干ではあるがブロック土が確認できるため、人為的な埋戻しの想定もできるだろう。遺構内へ流入したと思われる自然礫が数点確認できたものの、遺物については図化に耐えない土器細片が出土したのみであるため、図示できなかった。遺構の時期等詳細の検討が困難だが、87次調査の成果を踏まえ、およそ中世以降の遺構であると考えたい。

151-SD2003 (第19図)

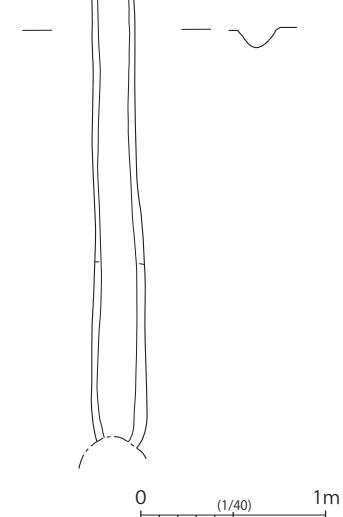
2-A区西部、B2グリッドで検出した溝である。調査区を南北に貫く点ではSD2002と共通するが、遺構の深度や幅は異なっている。遺構の規模は、南北方向で長さ約6.6m、幅は最大で1.1m、深さ0.9mを測る。埋土は5層に分層できるが、上層部分には若干のブロック土が含まれる。埋戻し行為の想定もできるだろう。遺物は土師器壺のほか、いわゆる企救型甕や製塩土器が出土している。SD2003は9世紀前半には埋没したものと考えたい。

151-SD2003 出土遺物 (第21図)

SD2003から出土した遺物を第21図に示した。5は土師器甕である。色調は淡褐色を呈し、復元口径は25.8cmと想定される。外面器壁の調整は粗いハケ目が観察でき、胎土には長石が多く含まれる。口縁部はわずかに内反し、端部は平坦な仕上げとなる。また、端部が

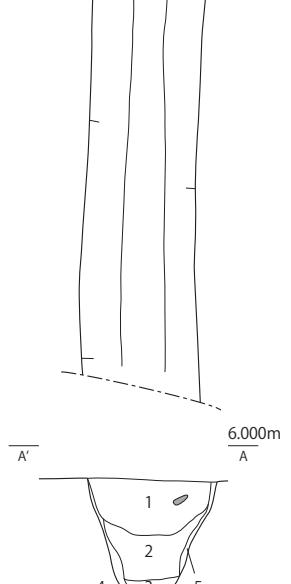
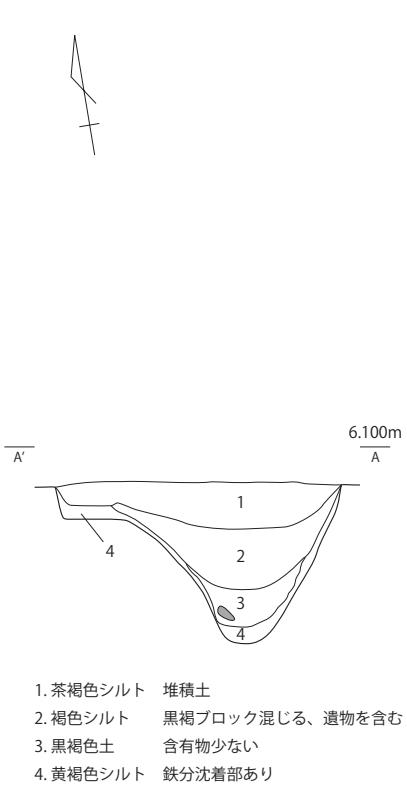
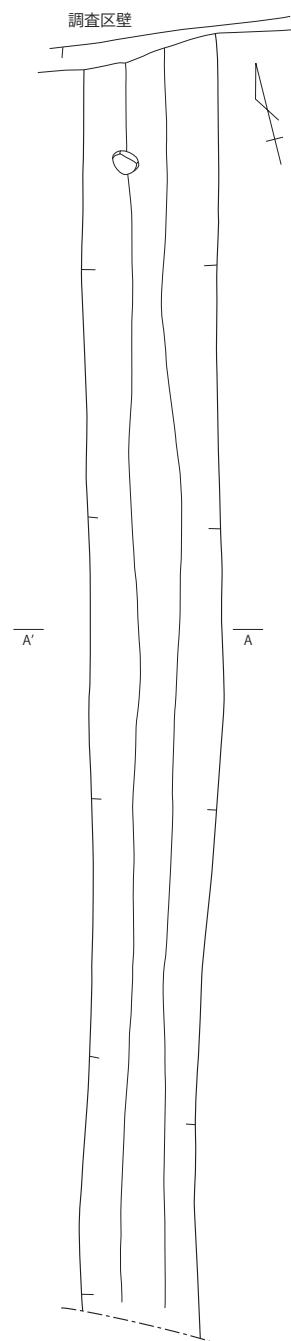


1. 黒褐色シルト
2. 灰褐色シルト



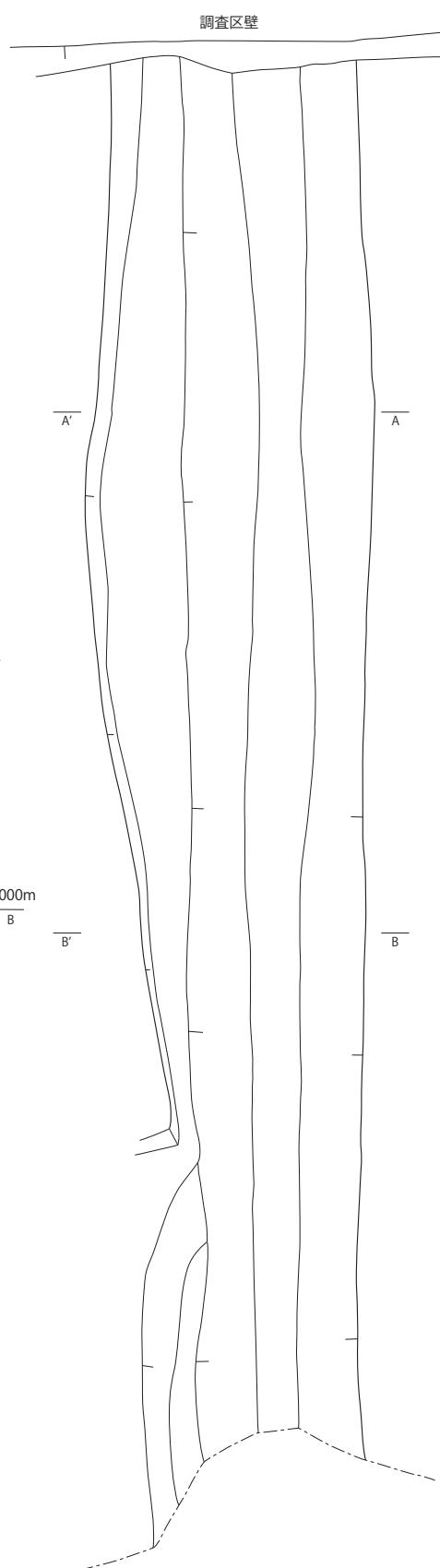
第18図 151-SD2002 実測図 (1/40)

第3章 調査の成果



0 (1/40) 1m

第19図 151-SD2003 実測図 (1/40)



第20図 151-SD2022 実測図 (1/40)

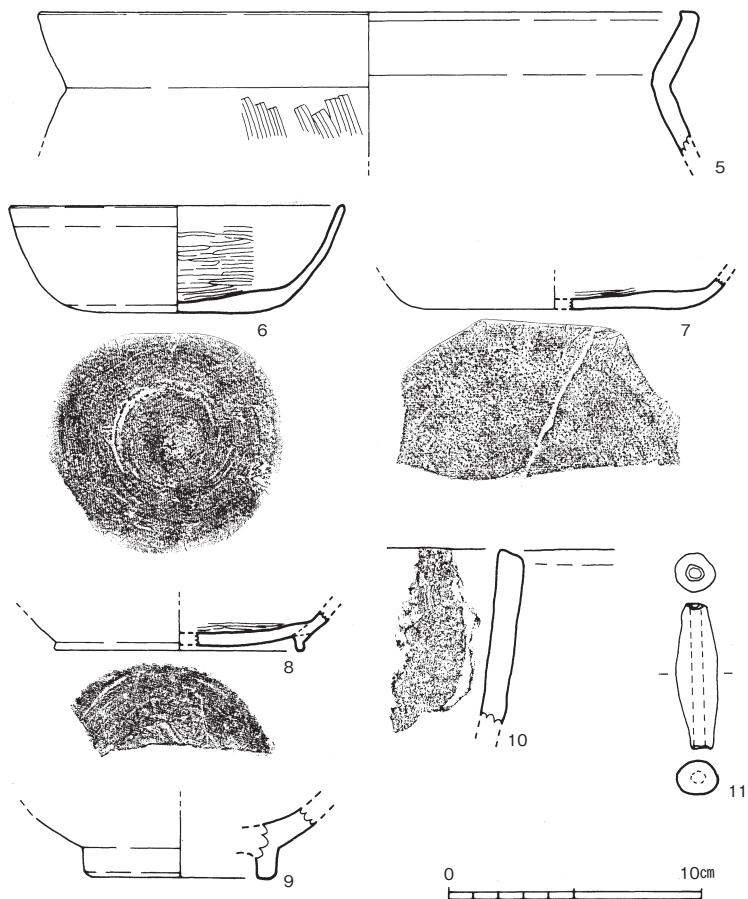
わずかにつまみ出され内側に突出している。いわゆる企救型甕である。6は土師器坏である。底部はロクロ切り離しの痕跡が確認できる。復元口径13.2cmを測り、色調は暗褐色を呈する。内面は丁寧にミガキが施され、外面は回転ナデで仕上げられる。7は土師器坏の底部である。上半部を欠損するものの、底部が残存し回転ナデの痕跡が確認できる。色調は淡赤褐色を呈し、胎土に角閃石を多く含む。8は高台付の土師器坏である。上半分を欠損し、高台と底部の接続部分のみ残存する。底部径は復元値で9.8cmを測る。色調は橙褐色を呈し、胎土に角閃石を多く含む。内外面ともに回転ナデで仕上げられる。9は青磁碗である。底部の一部のみ残存しており、詳細は検討できない。混入品の可能性もあるだろう。10は製塩土器の口縁部である。色調は褐色を呈し、胎土に長石を多く含む。内面には布目痕が明瞭に確認できる。11は管状土錐である。全長5.7cmであり、焼成は良好である。孔径は0.5cmを測る。以上が本遺構から出土した主要な遺物である。9の青磁碗を除き、いずれの資料も9世紀前半に位置づけ可能である。よって遺構の時期を9世紀前半ごろの所産と考えたい。

151-SD2022（第20図）

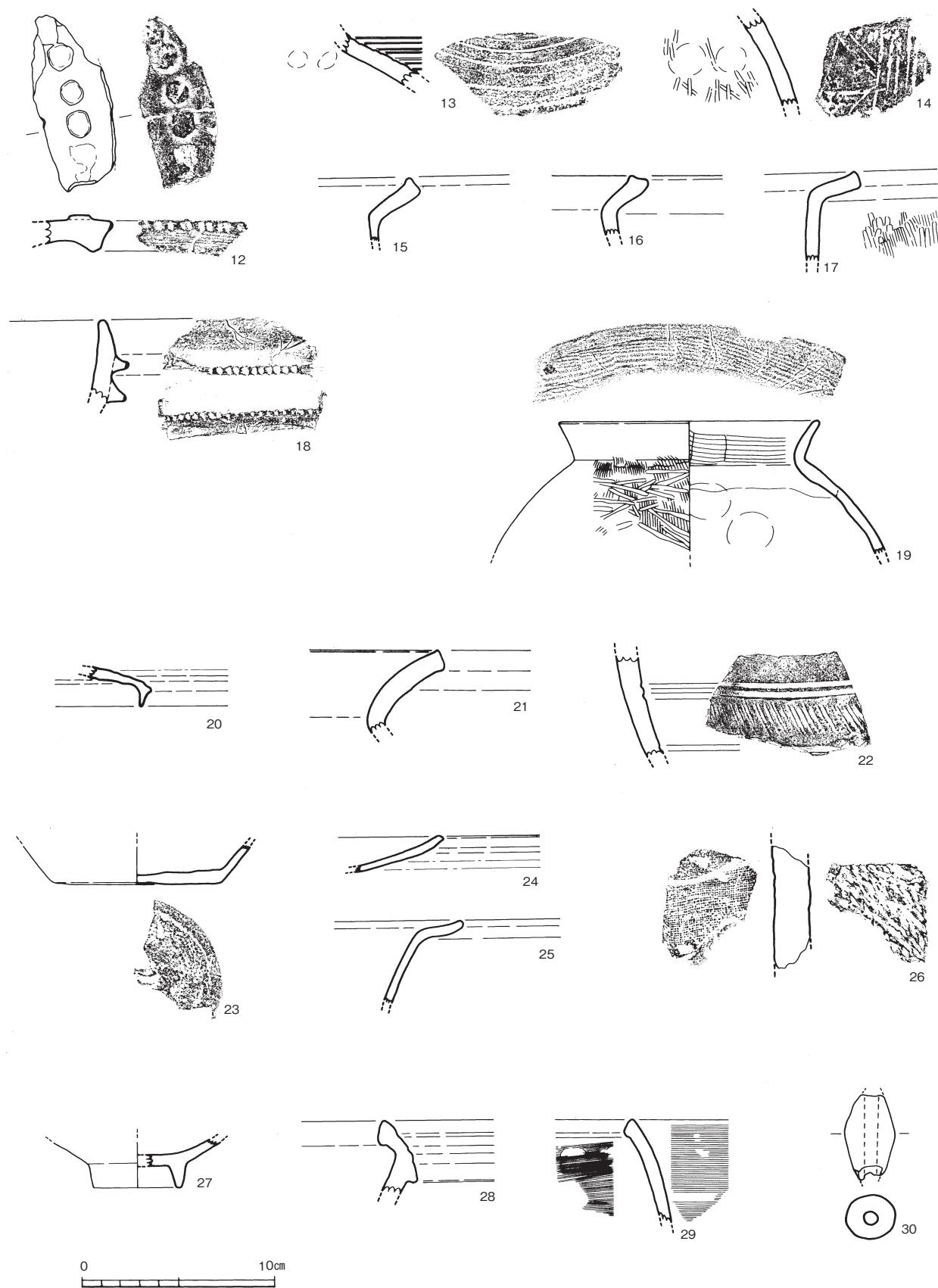
1面目、2-A区西部、B3グリッドで検出した溝である。調査区を南北に貫き、そのまま調査区外へ展開する。遺構の規模は、南北方向で長さ7.6m、幅は1.2～1.5m、深さ0.9mを測る。土層は大きく4層に分層でき、基盤となる第4層の上に3つの層が堆積する。遺物は弥生土器のほか、須恵器や土師器、平瓦や摺鉢が出土している。最終的な埋没時期については近世以降の可能性があろう。

151-SD2022 出土遺物（第22図）

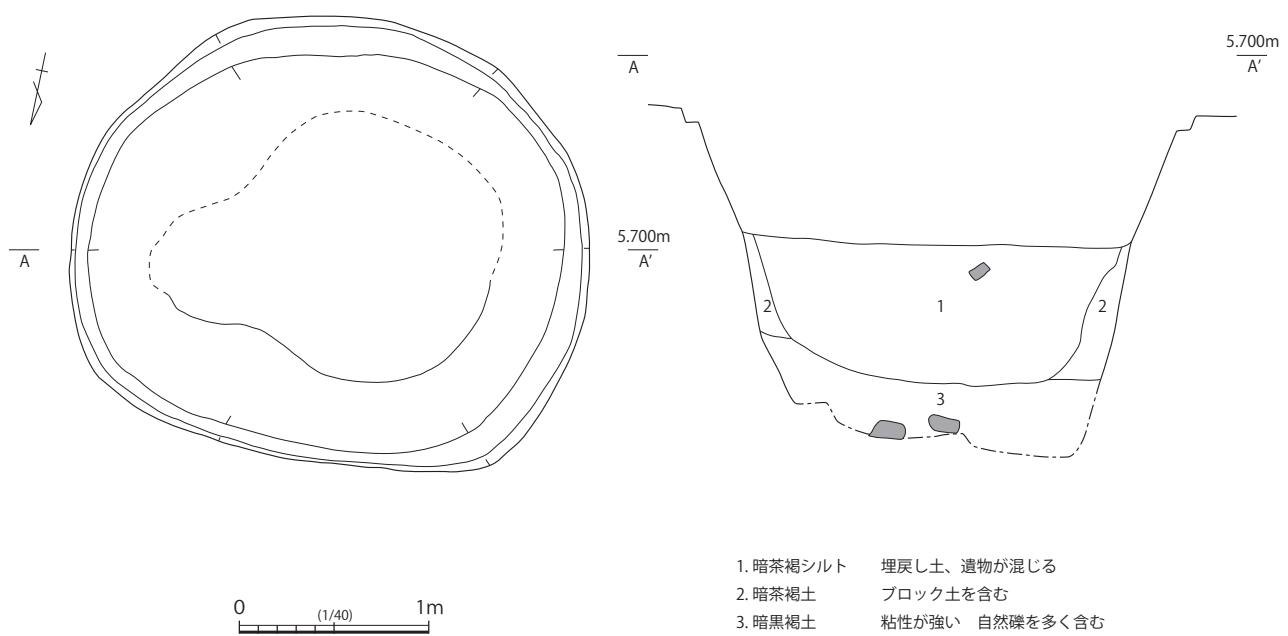
SD2022から出土した遺物を第22図に示した。12～18は弥生土器である。以下器種ごとに詳述する。12は壺形土器の口縁部片である。細片であるため、法量の復元はできなかった。色調は橙色を呈し、胎土に角閃石、長石粒などを若干含む。口縁部内面に粘土を貼付け、平坦面を形成する。口唇部には半截竹管状の工具を用いた刺突文が確認できる。口縁部上面には円形の浮文が貼付けられる。13は下城式壺形土器の胴部片である。色調は褐色を呈する。半截竹管状の2又工具を用いた2条1組の重弧文が施文される。14も下城式壺形土器の胴部片である。刺突文に加え、沈線文が確認できる。色調は橙色を呈する。調整等は細かに残っており判別が難しいが、外面器壁はナデ後施文を行ったものと考える。15～17は東北部九州系の甕形土器口縁部片である。15は



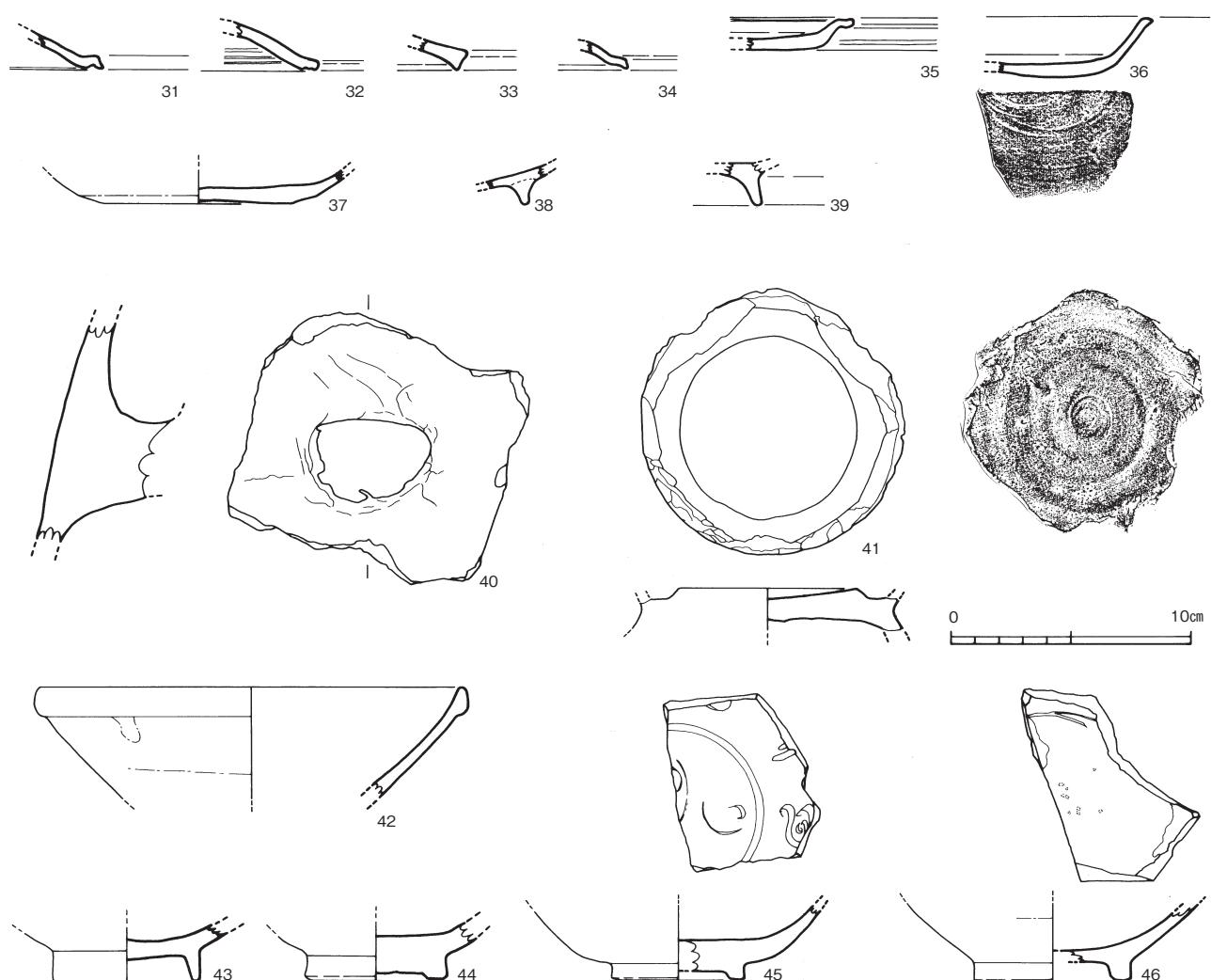
第21図 151-SD2003 出土遺物実測図（1/3）



第22図 151-SD2022出土遺物実測図 (1/3)

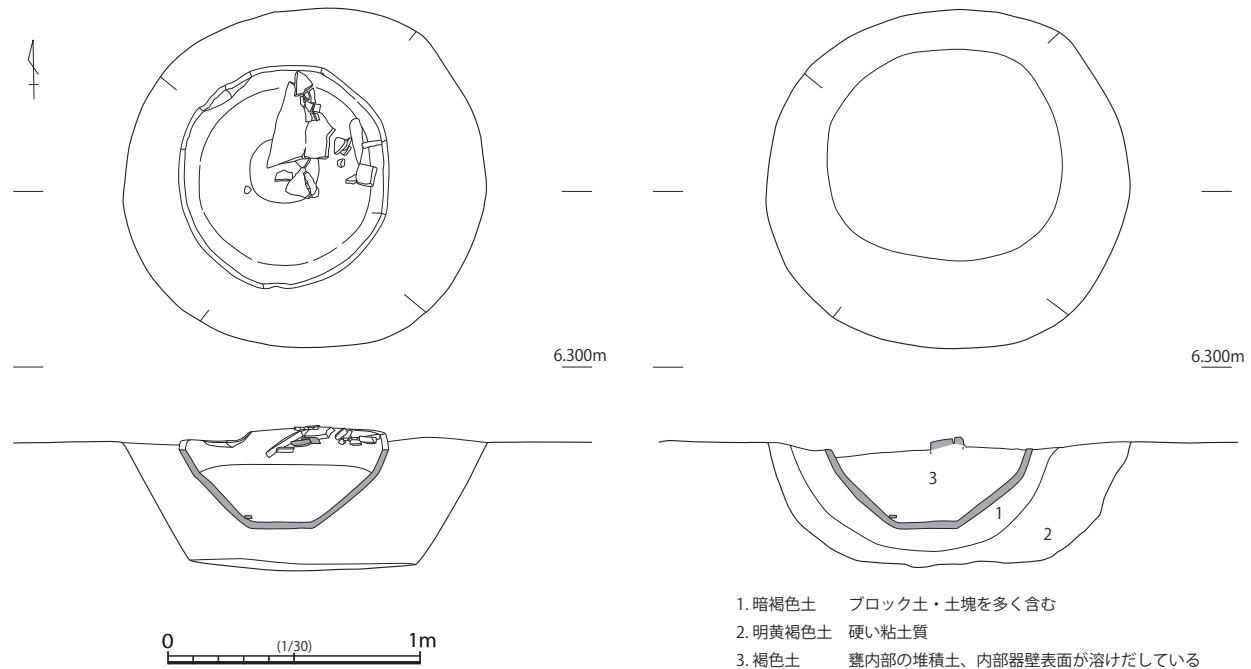


第23図 151-SE2122 実測図 (1/40)

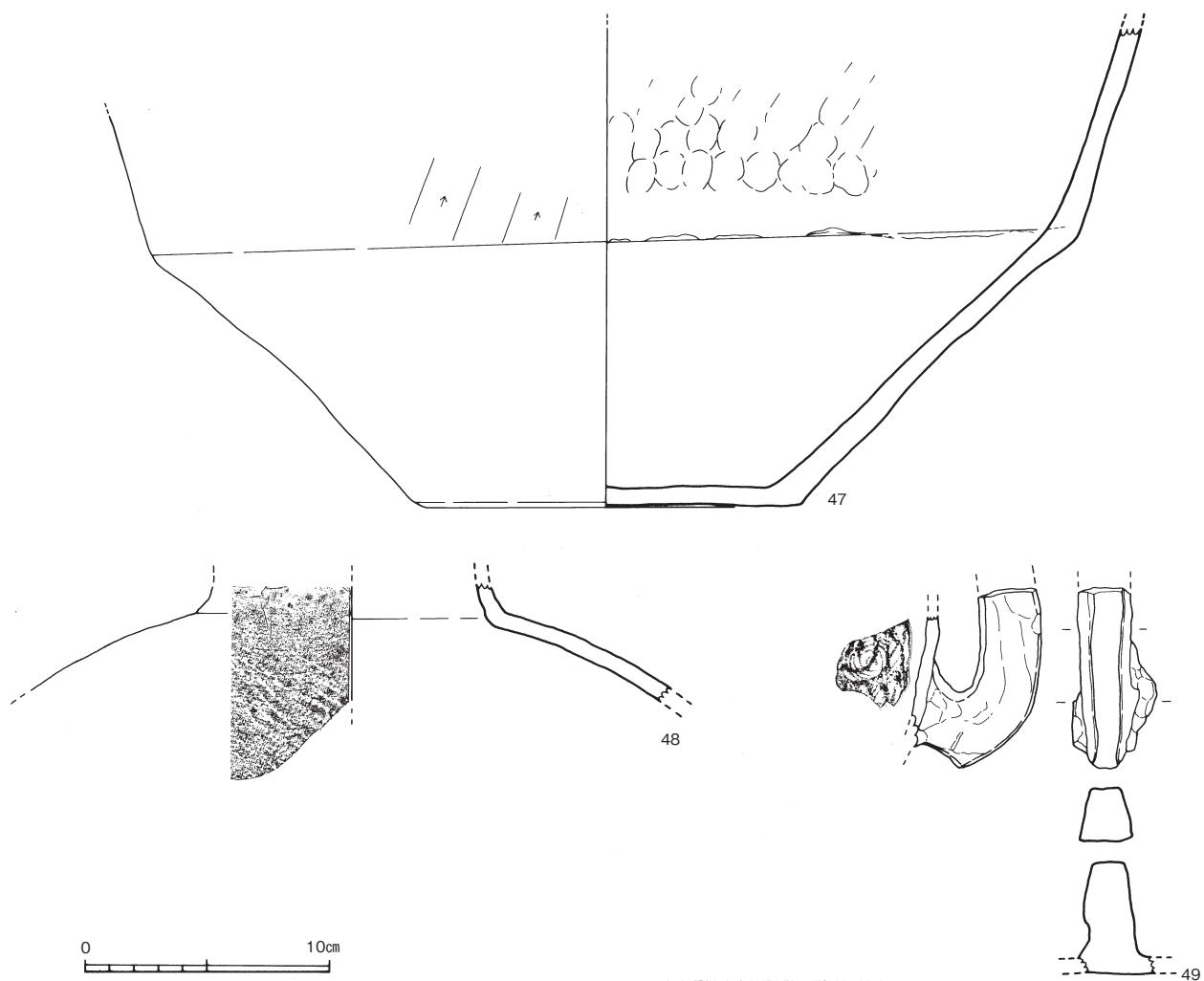


第24図 151-SE2122 出土遺物実測図 (1/3)

第3章 調査の成果



第25図 151-SK2001 実測図 (1/30)



第26図 151-SK2001.SK2012 出土遺物実測図 (1/3)

口唇部付近がナデつけられ、跳ね上げ気味の上端部を有する。また、頸部へと至る部分は「く」の字に屈曲する。16・17も同様の形状であり、胎土には若干角閃石などを含む。いずれも口径の復元はできなかった。いずれも色調は黄褐色を呈し、表面はハケで仕上げられる。18は下城式甕形土器である。口縁部が残存する。口縁部外面の若干下がった位置に刻目突帯が間隔を開けて2条施される。色調は黄褐色を呈する。19は布留式甕であろう。口縁部から胴部にかけて残存する。口径は13.4cmに復元でき、色調は黄橙色を呈する。外面器壁は縦方向のハケで調整した後、部分的ではあるがミガキが施される。内面にはナデやオサエの痕跡が確認できる。20は須恵器の坏蓋片である。器色調は灰白色を呈する。径の復元はできなかった。内外面ともにナデの痕跡が残り、外面にはケズリが施される。21は須恵器甕の口縁部片である。色調は灰白色を呈する。22は須恵器の甕胴部と思われる破片である。表面には2条の沈線が確認でき、その下には連続する線文が施される。23は土師器坏の底部である。上半部は大きく欠損する。底部径は残存値で8.8cmを測る。色調は橙色を呈し、胎土中に角閃石や長石が確認できる。底部面はロクロ切り離しが用いられる。24は土師器坏の口縁部片である。色調は黄橙色を呈する。25は土師器の甕であろうか。器壁は薄手である。色調は淡黄橙色を呈する。26は平瓦の破片である。外面に縄目タタキ、内面には布目痕が確認できる。色調は灰褐色を呈する。27は白磁碗の底部である。高台の一部が残り、露胎する。底部径は4.6cmを測る。28は摺鉢の口縁部である。色調は赤灰色を呈する。破片であるため摺目は確認できない。30は管状土錐である。色調は褐色を呈し、孔の径は0.7cmを測る。

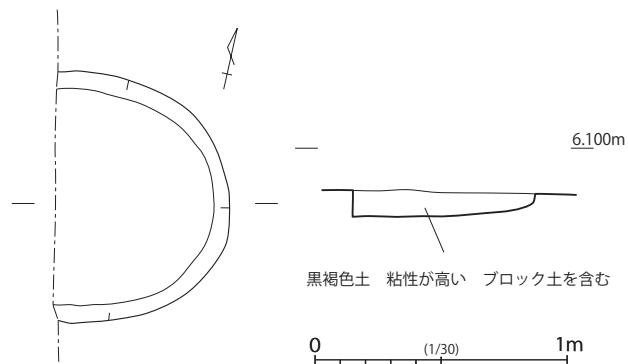
2. 井戸 (S E)

151-SE2122 (第23図)

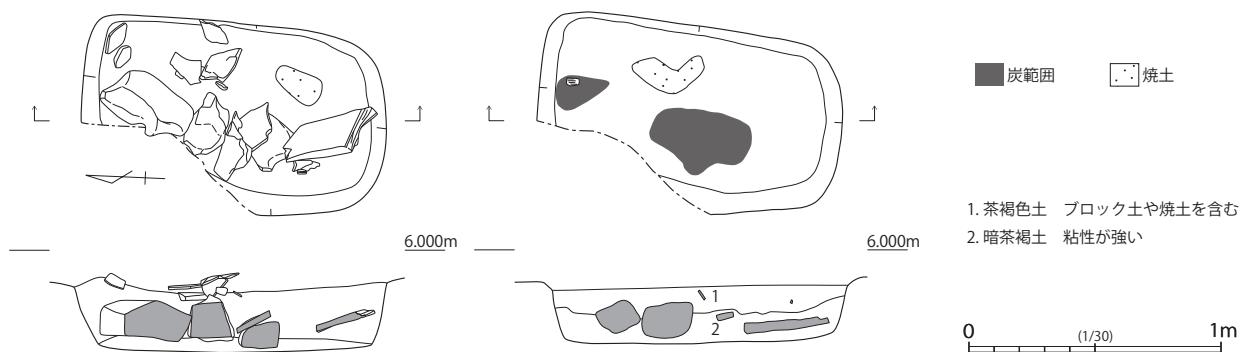
2-A区、B2グリッド東端で検出した井戸である。遺構の規模は径2.6～2.7m、検出面からの深さ1.8mを測るが、1mほどで湧水が見られるようになり、まもなく掘削を停止した。そのため暫定の深さであることを申し添えておく。井筒は確認できなかったため、素掘りの井戸であると考える。遺物は土師器や須恵器を中心に陶磁器も確認した。廃絶もしくは埋没の時期は14世紀ごろであろう。

151-SE2122 出土遺物 (第24図)

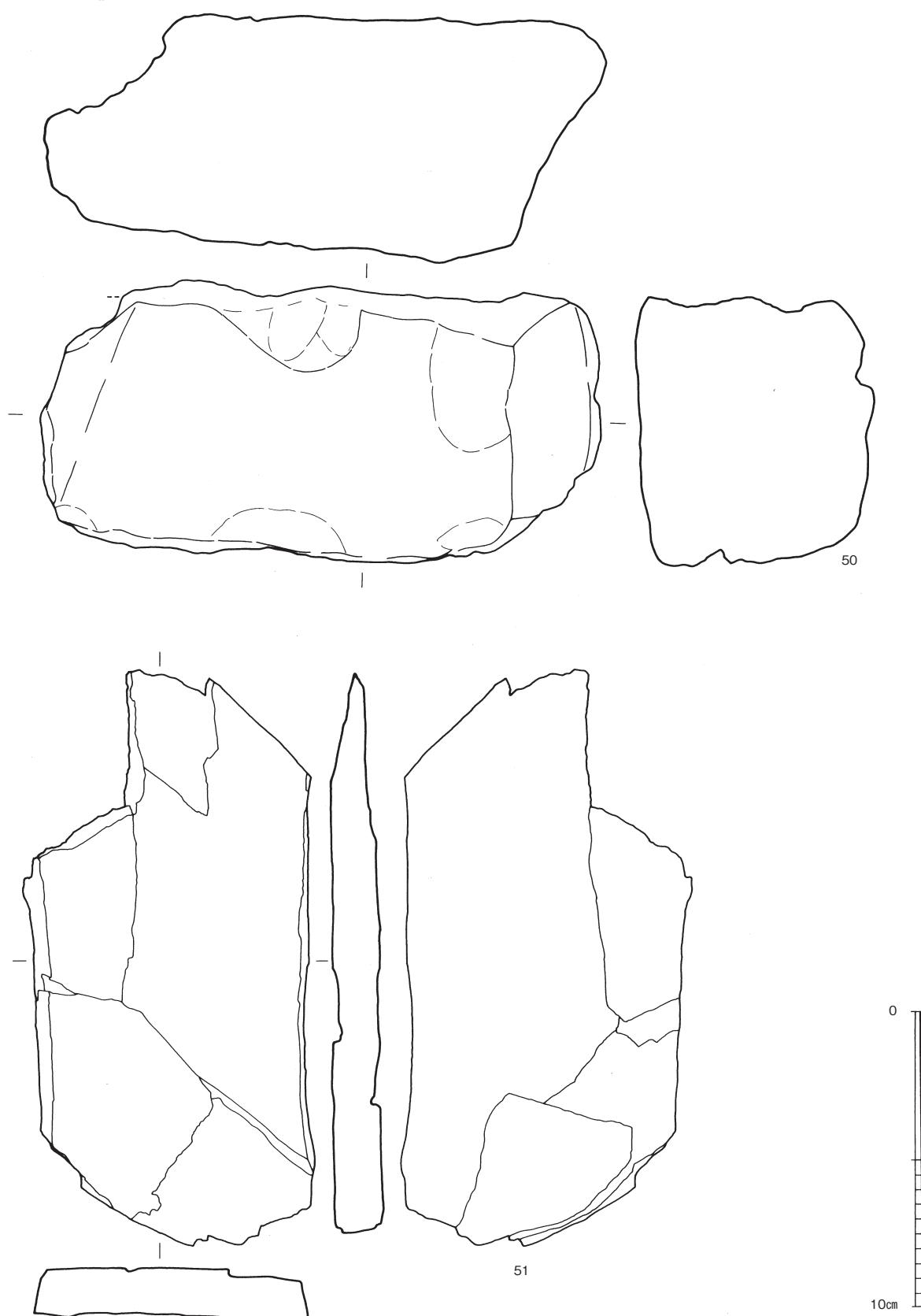
SE2122から出土した遺物を第24図に示す。31～



第27図 151-SK2012 実測図 (1/30)



第28図 151-SK2013 実測図 (1/30)



第29図 151-SK2013出土遺物実測図 (1/2)

34は土師器壺蓋の破片である。いずれも小破片であるため、口径等の法量は復元できなかった。色調は橙色～褐色を呈し、いずれも焼成は良好である。35～39は土師器壺である。これらも破片が多く、詳細を記述しえない。38・39は高台と底部が接続する部分の破片である。37の内面にはミガキが確認できる。40は土師器甌である。口縁部・胴部を欠損しており、取手部分のみが残る。残存長9.4cmを測り、色調は橙色を呈する。粘土塊をそのままナデつけて接合する。41は須恵器の円面硯である。陸部分の径は7.8cmを図り、色調は灰色を呈する。墨を磨る陸部分は粘土を巻き上げた痕跡が残るもの、表面は平滑である。墨の付着等痕跡の残存について、詳細に観察したもの特に確認できなかった。周縁部は打欠いたようにも見受けられる。転用品の可能性も指摘しておきたい。42は白磁碗である。復元口径は17.8cm、色調は灰色を呈する。玉縁を有する点や形状から、白磁IV類であると考えられる。43～45は青磁碗である。高台を有する底部が残存する。43の底部径は復元値で6.2cmを測り、色調は透明な淡灰色を呈する。44は底部径6.0cmを測る。45は龍泉窯系の青磁I～5類である。色調は灰がかったオリーブ色を呈する。46は白磁碗である。底部径は復元値で6.6cmを測る。色調は灰白色を呈する。SE2122からは古代の土師器、須恵器に加えて、14世紀代の陶磁器が確認できた。遺構の廃絶・埋没時期は上述のとおり、14世紀ごろと考えたい。

3. 土坑 (SK)

2区で検出した土坑は、性格や機能を明らかにできなかつたものが多かった。土坑として報告した遺構の中に、柱穴など別機能・性格を持つものを含む可能性があることを最初に断っておきたい。

151-SK2001 (第25図)

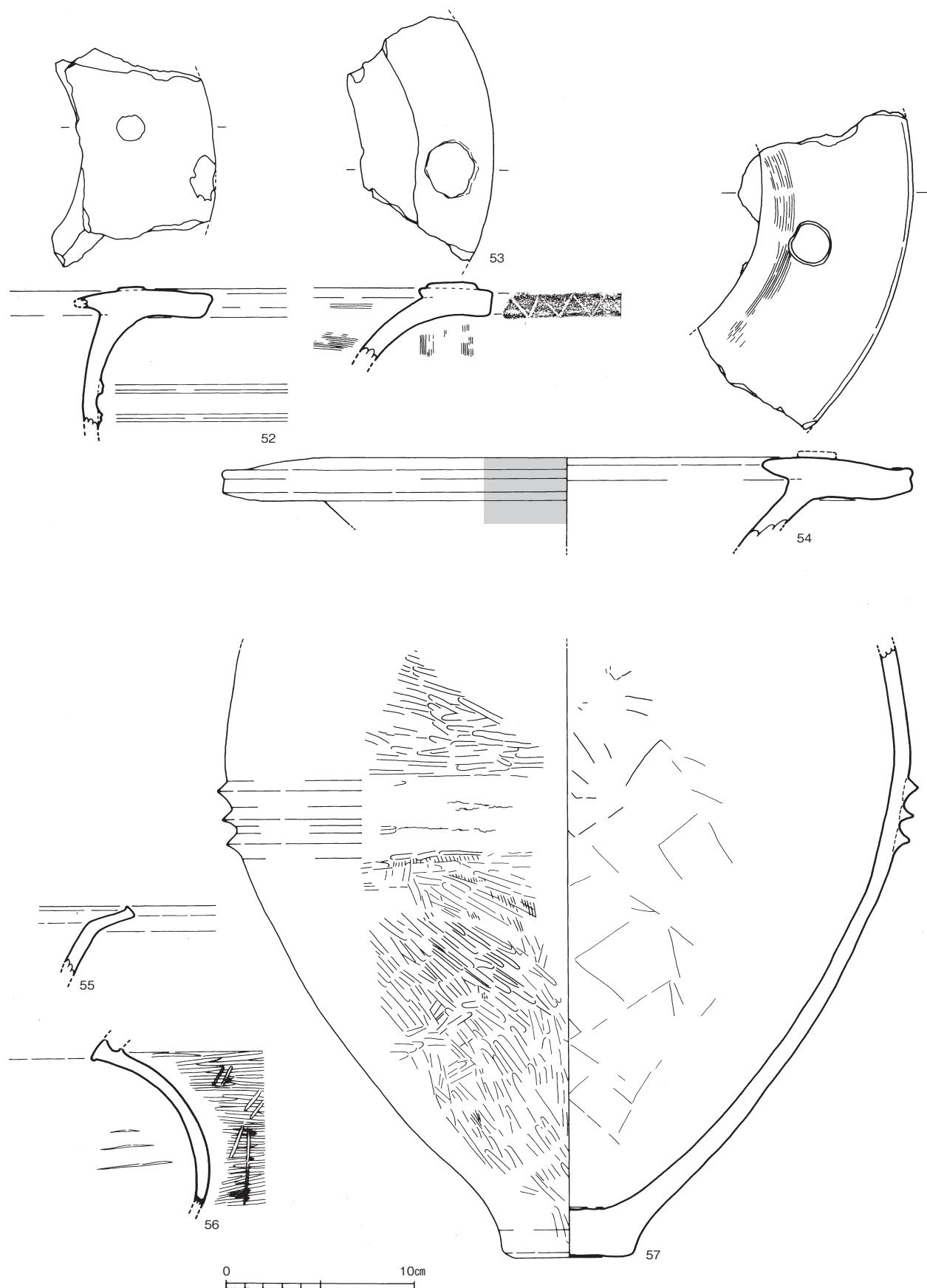
2-A区、B2・B3グリッド境界で検出した、大甕を据えた土坑である。機械による表土掘削段階から確認しており、調査区で確認した遺構の中でも比較的新しい時期のものと判断できる。遺構のプランは円形をなし、検出面から0.4mほど地面を掘りくぼめて甕を設置している。甕はバラバラに割れた状態で検出された。土層は3層からなり、甕設置に際して掘削を行った状況が観察できる。遺構の機能としては肥溜であろう。甕の取上げに際して、甕内部堆積状況を詳細に観察したが、単純な流入土のみであった。なお、甕以外の遺物は確認していない。遺構の時期は近世に属するものと判断する。

151-SK2001 出土遺物 (第26図)

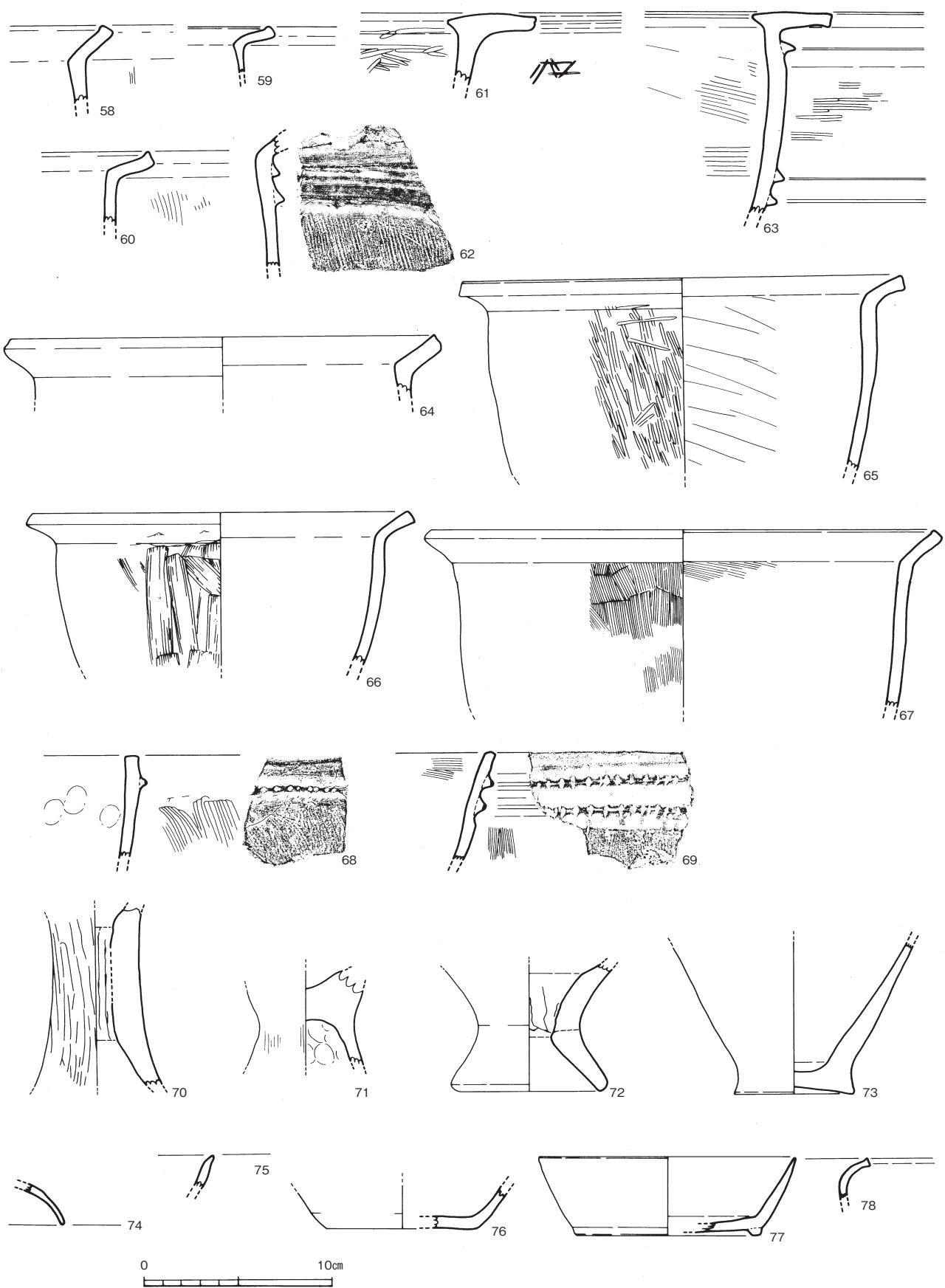
47は土坑に据えられていた大甕である。上半部を大きく欠損するため口縁部を含めた全体形状は伺い得ないが、底部径は20.7cmである。素焼きであり、色調は橙色を呈する。胴部から底部へ至る部分に屈曲を有する。



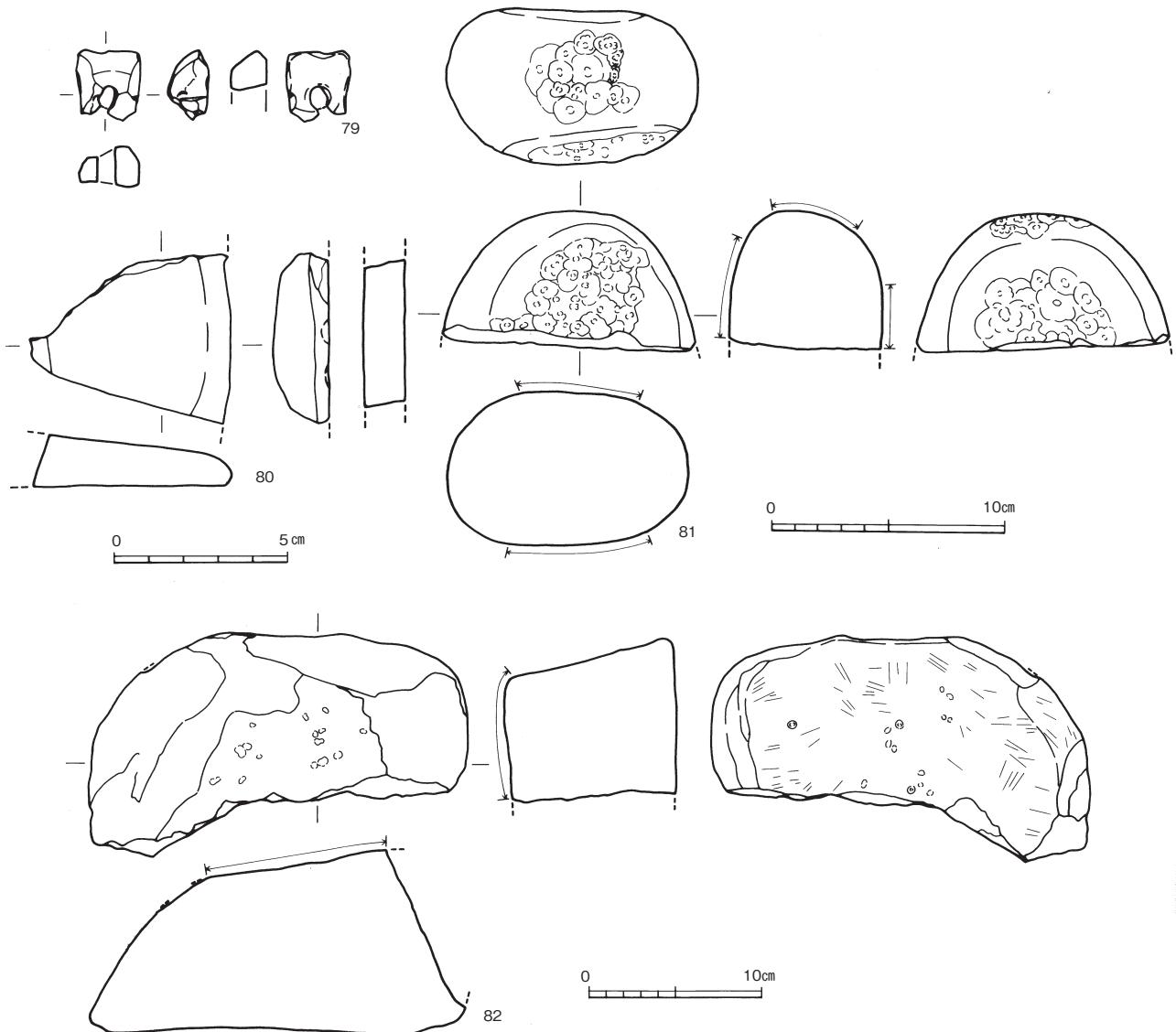
第30図 151-SK2001 実測図 (1/30)



第31図 151-SK2021 出土遺物実測図1 (1/3)



第32図 151-SK2021出土遺物実測図2 (1/3)



第33図 151-SK2021出土遺物実測図3 (1/2.1/3)

内面にはユビオサエの痕跡が明瞭に確認できた。据付けるためか、底部は平底である。

151-SK2012 (第27図)

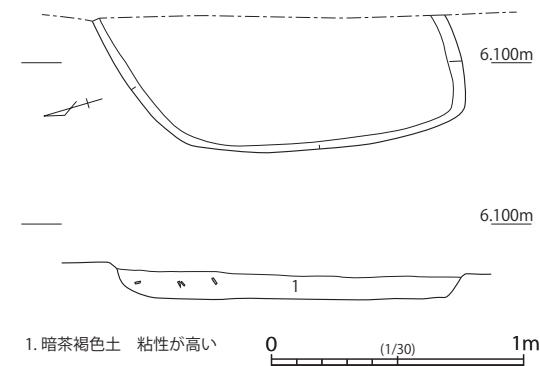
2-A区、C2グリッドで検出した円形の土坑である。最大径は0.98mである。堆積は単層からなり、わずかにブロック土を含む茶褐色土が充填していた。遺物は須恵器の甕片と取手を確認している。遺物の点数が少ないため決め手に欠けるが、遺構の時期は8世紀ごろと考えたい。

151-SK2012出土遺物 (第26図)

48は須恵器の甕である。頸部から胴部にかかる部分の破片である。色調は茶褐色を呈し、内面は格子目タタキの痕が残る。49は須恵器の取手である。残存長は5.3cmを図り、色調は灰色を呈する。器壁と接続していたと思われる部分の内面に同心円状のタタキ痕が確認できる。外面は丁寧にナデつけられ、面取り部が3つ確認でき、全体として平滑に仕上げられる。器種としては平瓶などが考えられる。

151-SK2013 (第28図)

2-A区、B2グリッドで検出した長方形の土坑である。北西部を搅乱によって切られるが、内部の状況は良好に残存していた。遺構の長軸は1.25m、短軸は0.8mを測る。内部には結晶片岩の破片が多量に堆積している状況を確認した。検出段階では、上面で確認できた石材に被熱の痕跡が確認できたこと、堆積土に焼土が多く確認できたことから、小規模な墓を想定していた。慎重に掘り下げを行い、内部に堆積する石材を取り除いたが、石材以外の遺物はまったく出土しなかった。底面には焼土、炭化物が溜まる様子が確認できた。骨らしき破片を堆積土中で確認したが、わずかであり非常にもなく自然科学分析等の実施はできなかった。墓として積極的に評価できないため、今回は土坑として報告するものである。石材以外の遺物が確認できず、厳密な時期比定は困難である。



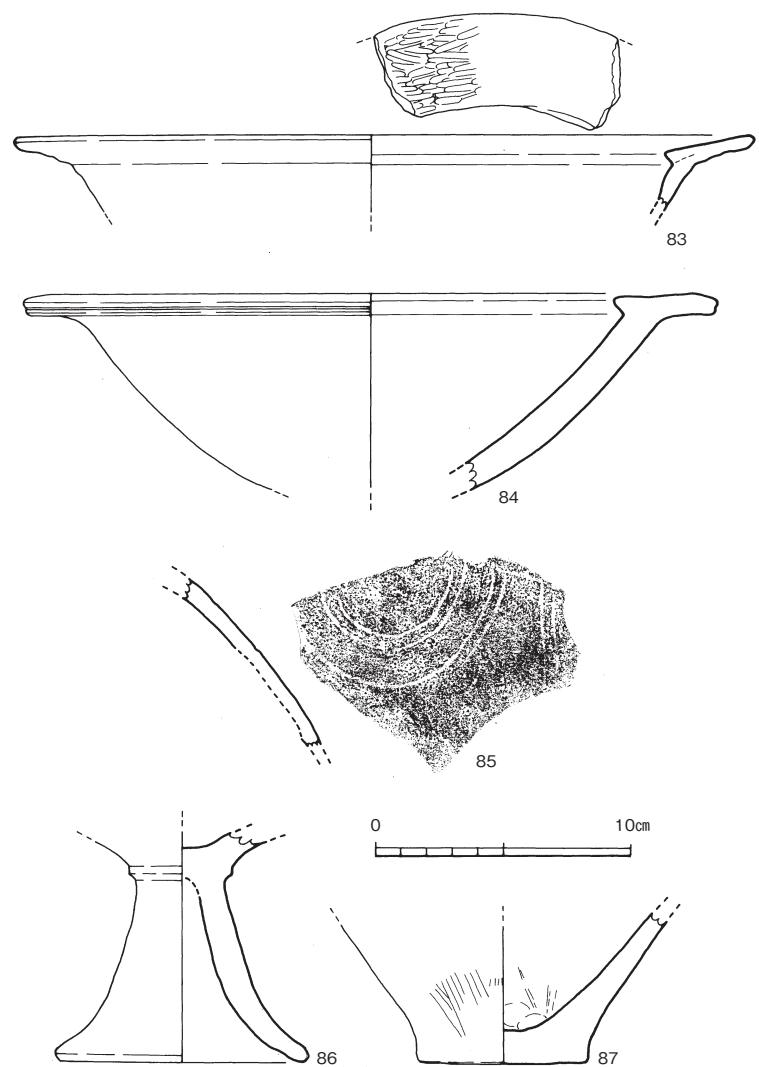
第34図 151-SK2013 実測図 (1/30)

151-SK2013 出土遺物 (第29図)

50・51は遺構内に堆積していた石材である。50は凝灰岩、51は結晶片岩である。とくに51の表面は赤みを帯びていることから被熱したものと想定できる。表面には特に調整や加工の痕跡は確認できなかった。51は残存長38.8cmを測る。

151-SK2021 (第30図)

2-A区、B2・C2グリッドで検出した長方形の土坑状遺構である。検出段階から遺物の集中が確認できていたものの、本体の明確なプランや堆積が確認できず、SXでの取上を考えた。しかし、複数回にわたって遺構の観察を行ったところ、わずかではあるが不成形の遺構ラインが確認できたため、土坑として報告するものである。実測図には土層断面図等を示していないが、2cm程度の非常に薄い堆積であったためである。確認した遺物はほとんどが弥生土器でありおおよそ同時期の所産と考える。しかし、一部須恵器も出土しているため、積極的に遺構の時期を評価しえない。遺構ラインの不明瞭さに起因する流入、混入があった可能性を否定しきれないため、時期比定は行わない。なお、弥生土器については、おおよそまとまった時期の遺物であり、弥生時代中期の所産であると考える。



第35図 151-SK2021 出土遺物実測図 (1/3)

151-SK2021 出土遺物（第31～33図）

SK2021から出土した遺物を第31図から第33図までに示した。52～54は壺形土器の口縁部片である。ともに口縁上部平坦面には、円形の浮文を貼り付けている。色調については、52・54が黄橙色を呈し、53は橙色である。55・56は弥生土器の広口壺の破片である。57は壺形土器の胴部である。胴部最大径は37.5cmを測り、底部径は6.8cmを測る。胴部最大径となる箇所に3条の突帯を施している。突帯の断面はM字である。58～60までは東北部九州系の甕形土器口縁部である。いずれも跳ね上げ口縁を有し、頸部にかけて「く」の字に屈曲する。61は須玖系の高坏である。鋤先状口縁の破片であり、ともに色調は淡褐色を呈する。63は甕形土器の口縁～頸部片資料である。鋤先状口縁や突帯が確認でき、須玖II式段階に位置付け可能である。68・69は下城式土器の甕である。68は口縁端部から1cmほど下に刻目突帯を1条施される。69は口縁端部下2cm付近に2条の刻目突帯を有する。70は高坏の脚部である。残存長9.4cmを測る。内部は中空である。色調は淡黄褐色を呈する。71～73は弥生土器の底部である。71は暗褐色を呈する。72は底部資料として判断したが、器台の可能性もある。色調はにぶい黄褐色を呈する。内面には絞り痕が確認できる。73は若干内湾気味ではあるが、平底である。色調は橙色を呈し、底部径は6.4cmである。74～76は土師器の坏蓋と坏である。破片資料であるため詳細はうかがいえない。77は須恵器の坏である。高台を有する。復元



第36図 151-SK2027 実測図 (1/30)

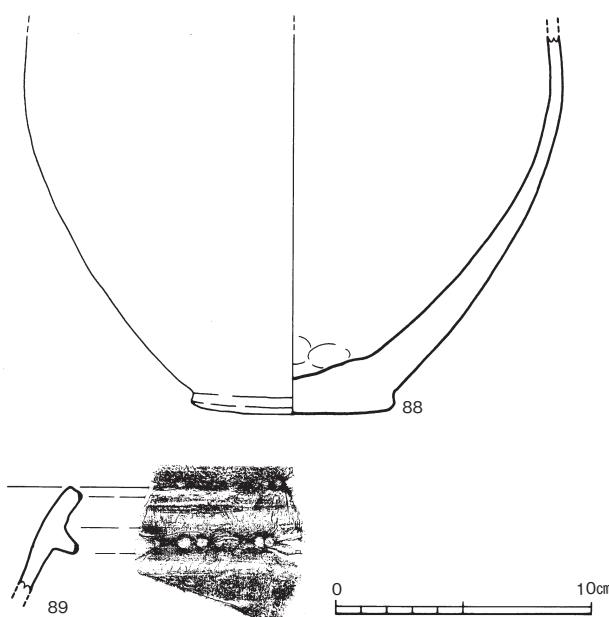
口径13.8cm、底部径10.0cmを測り、色調は灰黄色を呈する。摩滅しているため観察できる箇所は少なかったが、口縁端部は尖り気味となる。79～82は石器である。81は敲石である。石材は安山岩である。表面に顕著な叩打痕が確認できる。82は石皿であろう。安山岩質の石材が用いられる。

151-SK2024（第34図）

2-A区、B3グリッド東端部で検出した長方形の土坑である。検出時にわずかな土器の堆積を確認した。黒茶褐色土上では遺構のラインが明確に判別できず、遺物が出土する西側端部に小さなトレーナチを設け、堆積状況と遺構ラインを観察した。結果、堆積は薄く単層からなることが判明した。遺物は弥生土器が出土しており、須玖式系の土器も確認できることから、弥生時代中期に比定できる。

151-SK2024 出土遺物（第35図）

83・84は須玖式土器の高坏である。ともに坏部のみが残存し、下半部の形状は不明である。83は復元口径27.8cmを測り、色調は褐灰色を呈する。わずかであるが表面に赤彩が確認できる。口縁平坦面はミガキで調整する。84は復元口径25.6cmを測り、色調は橙色を呈する。粘土を折り曲げて平坦面を形成した痕跡が確認できる。85は下城式壺



第37図 151-SK2027 出土遺物実測図 (1/3)

形土器の胴部片である。半截竹管状の工具を用いた2条1組の重弧文が確認できる。また破片端部には、並行する直線も確認できる。86は高坏の脚部である。残存高7.0cm、復元底部径9.6cmを測る。色調は黒褐色を呈するが、焼成の状況によるものだろう。87は弥生土器の底部である。底部径6.0cmを測る。色調は橙色である。遺物はいずれも弥生時代中期に比定できる。

151-SK2027 (第36図)

2-A区、B4グリッドで検出した円形の土坑である。径0.42m、深さ0.51mを測る。検出時、土器底部が表面に露出していたため、遺構を半截して堆積の確認を試みた。掘削したところ、土器が逆さに埋没している状況が確認できたため、個別図を記録し遺物の取上げを行った。遺物は逆さの土器以外には細片が多く、図化できたものは2点のみであった。自然堆積で土器が天地逆転し埋没する可能性はあるが、土器に沿うような形で円形のプランと埋土が確認できたことから、人為的な埋納である可能性が高い。出土遺物は土器のほかにないため、遺構の機能・性格は検討が困難だが、祭祀行為などなんらかの目的を持って埋納されたのであろう。時期的な判断は難しいが、土器片の時期から弥生時代中期に比定される遺構である。

151-SK2027 出土遺物 (第37図)

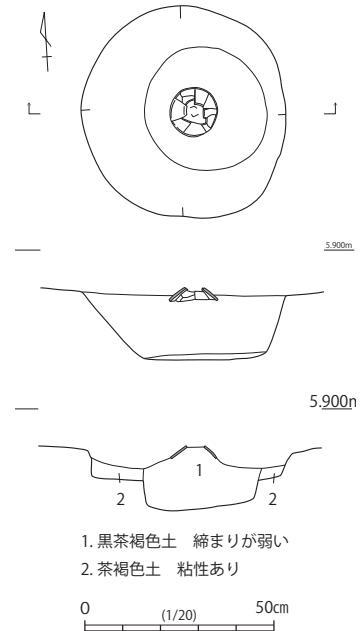
88は逆さに埋納されていた土器である。胴部最大径14.9cm、底部径8.0cmを測る。色調は明赤褐色を呈する。器壁は厚く、調整は粗雑な印象を受ける。口縁部を欠失するため器種の想定は難しいが、壺であろう。89は下城式甕形土器である。口縁部下2cmに1条の刻目突帯を有する。色調は黒褐色を呈する。89の帰属時期が弥生時代中期であることから、88も同時期の所産であると想定する。

151-SK2031 (第38図)

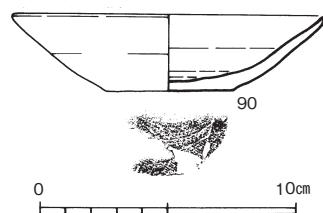
2-A区、B2グリッドで検出した円形の土坑である。径0.56m、深さ0.17mを測る。土坑中心部に土師器坏が逆さになった状態を確認した。祭祀行為に伴う遺構の可能性がある。

151-SK2031 出土遺物 (第39図)

90は土師器坏である。口径12.3cm、復元底部径5.0cmを測る。色調は淡明橙色を呈する。形状から15世紀の土師器坏と判断した。底部の残りが悪く切り離し痕は判別が困難だが、糸切りであると思われる。



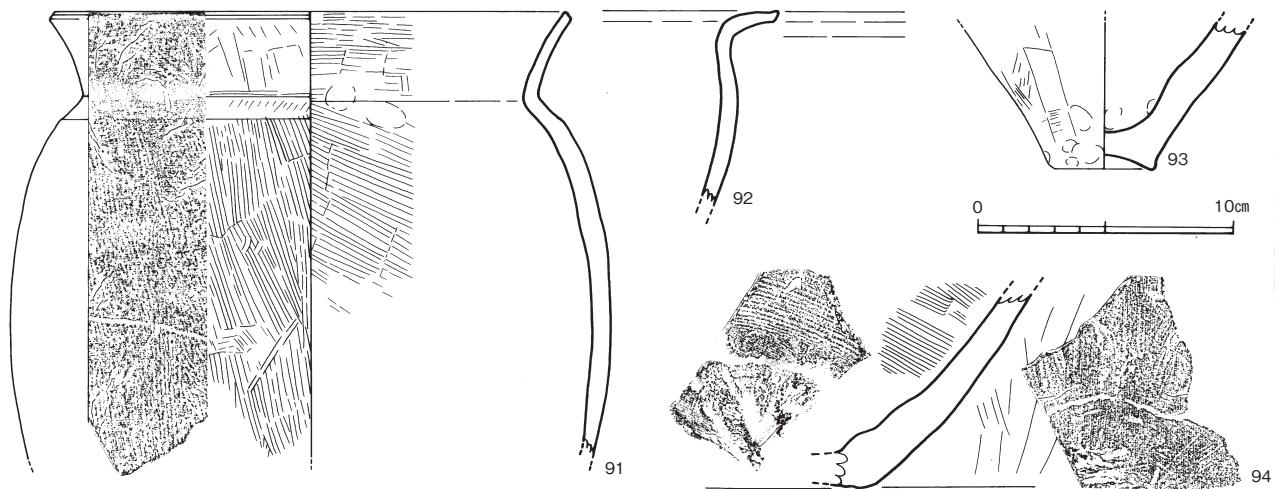
第38図 151-SK2031 実測図 (1/30)



第39図 151-SK2031 出土遺物実測図(1/3)



第40図 151-SK2040 実測図 (1/20)



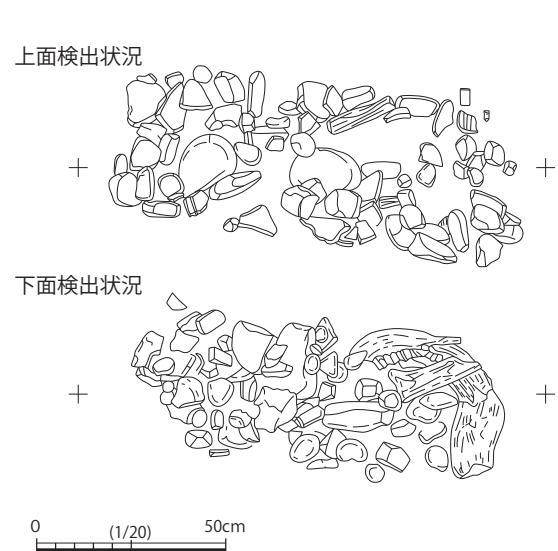
第41図 151-SK2040 出土遺物実測図 (1/3)

151-SK2040 (第40図)

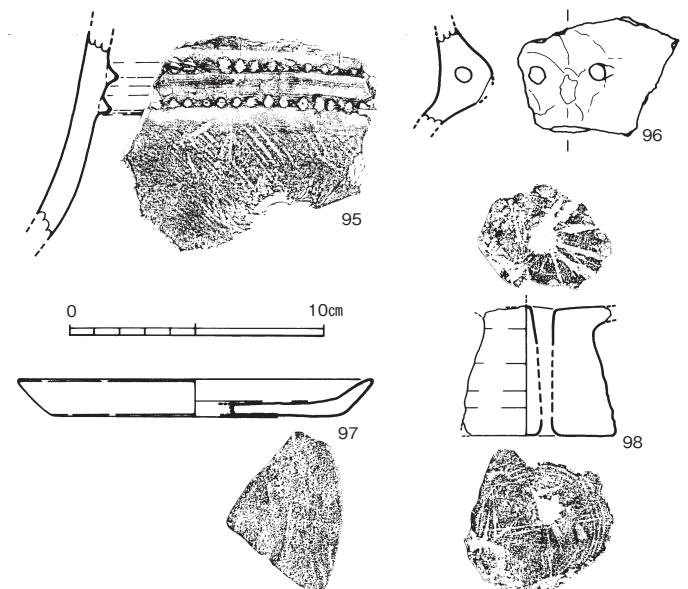
2-A区、B4グリッドで検出した円形の土坑である。径0.5m、深さ0.48mを測る。遺構内部から弥生土器が堆積した状態で出土した。時期は出土遺物の年代観から、弥生時代終末期から古墳時代初頭に比定できる。

151-SK2040 出土遺物 (第41図)

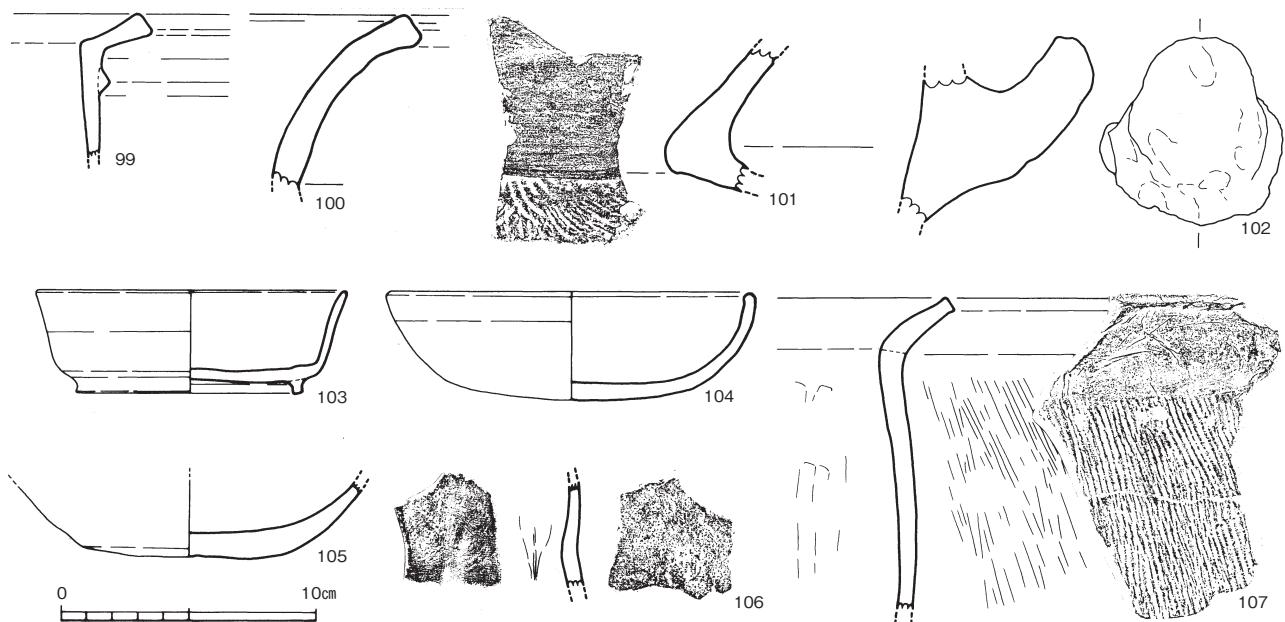
91は土師器甕資料である。復元口径20.1cmを測り、色調はにぶい橙色を呈する。胴下半部は欠損する。口縁部は内湾気味に頸部へ接続する。92は甕形土器である。色調は黄褐色を呈する。口縁部から頸部は大きく外方へ開く。93・94は底部である。尖り気味の形状をなす底部資料93は底部径3.9cmを測り、色調はにぶい橙色を呈する。内外面ともに強いハケ目が観察できる。これらの資料は弥生時代終末期～古墳時代初頭に位置づけが可能である。



第42図 151-SK2044 実測図 (1/20)



第43図 151-SK2044 出土遺物実測図1 (1/3)



第44図 151-SK2044 出土遺物実測図2 (1/3)

151-SK2044 (第42図)

2-A区、B3グリッドで検出した楕円形の遺構である。長辺 1.24 m を測る。検出段階から遺物の集中を確認しており、堆積状況を精査したところ、獣骨片が確認できたため、個別図を作成し、取上げを行った。遺構内には多量の自然礫が確認できた。礫の一部は被熱を受け変色していた。獣骨を含め、被熱した礫の存在などから何らかの儀礼行為に伴う遺構である可能性が考えられる。獣骨に関する自然科学分析は実施できていないが、観察する限り動物の下顎骨であった。臼歯は確認できるため、ウマやウシなどの草食動物であろう。今後分析を実施し、その詳細を検討したい。遺物は複数時期にわたるものであり、遺構の年代の評価は難しい。土師器燭台の存在から、中世以降に比定できるだろう。

151-SK2044 出土遺物 (第43図、第44図)

SK2044については、獣骨の存在する上層部分と、小礫の溜まる下層部分に分けることができる。遺物についても、それぞれに分けて報告する。95～98は上層出土の遺物である。95は下城式甕形土器の胴部か。2条の刻目突帯を有する。96は須恵器の取手状破片である、突出部に孔が貫通しており、紐などを通せるような形状である。色調は灰色を呈する。97は土師器皿である。口径 13.8 cm、底部径 10.5 cm に復元できる。平たい底部を有する。色調は橙色を呈する。98は土師質の燭台である。器高 5.1 cm を測る。上下に孔が貫通しており、軸の受け部であると想定できる。色調はにぶい黄橙色を呈する。99～107は下層出土の遺物である。99は弥生土器の甕である。東北部九州系に該当する弥生時代中期の資料である。色調はにぶい橙色を呈する。100・101は須恵器の甕口縁部の破片である。ともに色調は灰色を呈する。102は土師器甕の取手である。粘土塊のまま貼り付けて整形している。色調はにぶい黄橙色を呈する。103は高台を有する須恵器坏である。口径 12.1 cm、底部径 8.4 cm を測る。色調は灰色を呈する。104・105は土師器坏である。ともに色調は橙色を呈する。106は製塩土器である。色調は淡橙色を呈する。107は土師器の甕である。色調は明黄褐色を呈する。外面には粗いハケ目が施される。

第3章 調査の成果

151-SK2089 (第45図)

2-A区、B2グリッドで検出した楕円形の土坑である。長軸で0.64mを測る。検出の段階で下城式甕形土器が破碎した状態で出土した。それ以外の遺物は出土しなかった。遺構の年代は弥生時代中期である。

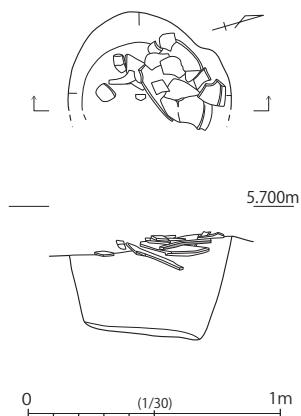
151-SK2089 出土遺物 (第46図)

108・109は下城式甕形土器である。108は口径27.8cmを測り、色調は灰褐色を呈する。口縁部下約2cmに1条の刻目突帯が巡らされる。また、刻目突帯は約1.5cmほど突出して貼付けられる。109は残存高14.0cmを測り、色調は灰黄褐色を呈する。口縁部下2cmほどの箇所に1条の刻目突帯が巡らされる。外面器壁はナデ後強いハケが施される。これら諸特徴から弥生時代中期の資料と判断できる。

151-SK2090 (第47図)

2-A区、B2グリッドで検出した楕円形をなす大型の土坑である。長軸2.75m、短軸1.92mを測る。151-SK2003が南北に貫通するため、遺構中央部を切られている。埋土は4層からなる堆積状況が確認できた。大型である点やテラス状の段を有する点などから貯蔵穴としての機能が想定できる。遺物は弥生土器の出土

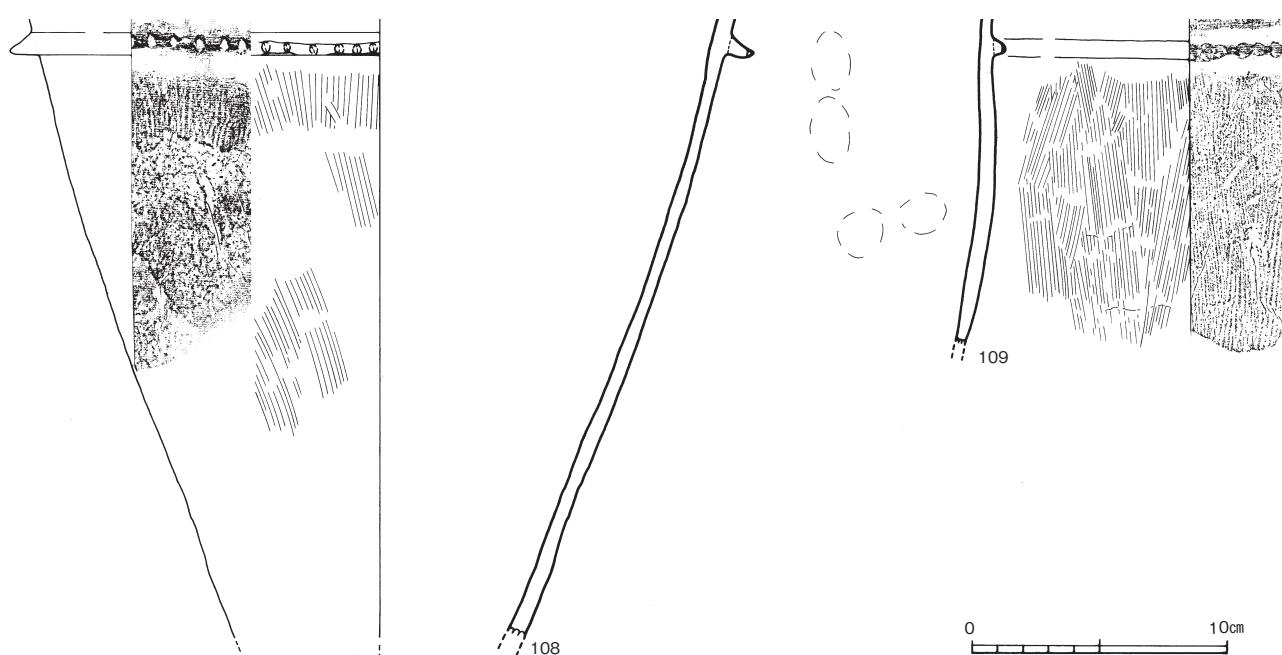
が見られ、それらの諸特徴から遺構の年代は弥生時代中期に比定できる。



第45図 151-SK2089 実測図 (1/30)

151-SK2090 出土遺物 (第48図)

110～113は弥生土器である。110・111はともに下城式甕形土器の口縁部片である。いずれも口縁部下に1条の刻目突帯が巡らされる。110の色調は暗橙褐色を、111の色調は黒色を呈する。112は下城式壺形土器の胴部片である。二又工具による重弧文や刺突文が外面器壁に確認できる。色調は暗褐色を呈する。113は弥生土器の底部片である。復元した底部径は3.0cmを測り、色調は茶褐色を呈する。



第46図 151-SK2089 出土遺物実測図 (1/3)

151-SK2134 (第49図)

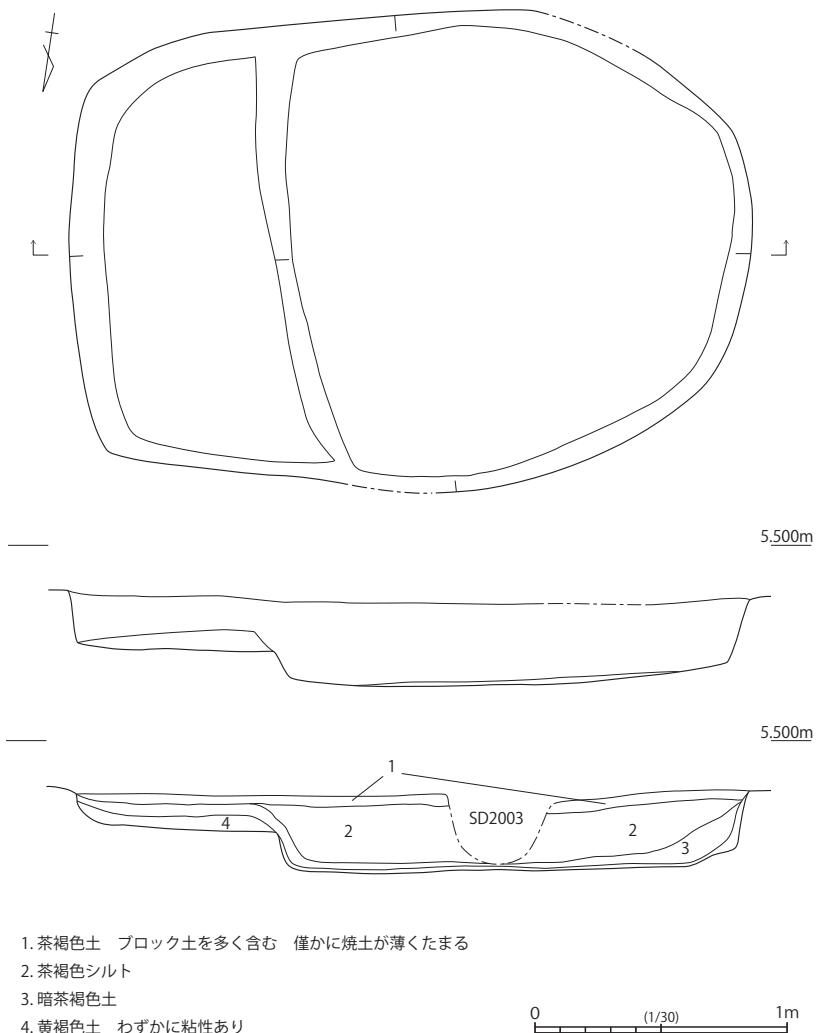
2-A区、B3グリッドで検出した長方形の土坑である。長軸1.82m、短軸0.72mを測る。埋土は2層で構成される。遺構の形状から土坑墓の可能性もあるが、堆積状況や出土遺物からは墓と判断できる根拠がなかったため、土坑として報告した。遺物は弥生土器のほかに検出時に製塩土器が出土している。遺構の時期は弥生時代中期と位置づける。

151-SK2134 出土遺物 (第50図)

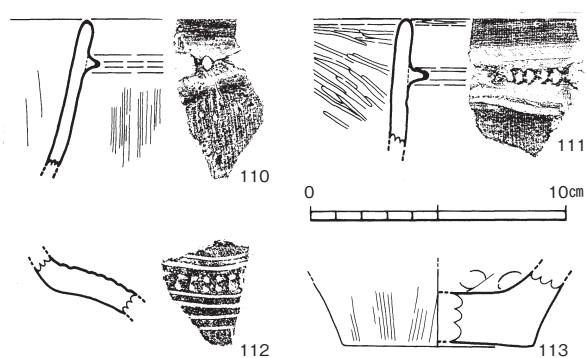
114・115は東北部九州系の甕形土器である。ともに色調は白色系であり、114が淡橙色、115が暗黄色褐色を呈する。116・117は下城式甕形土器である。ともに口縁部分のみが残る。116は口縁端部下に1条の刻目突帯が巡らされる。色調は黒褐色を呈する。117は口縁端部から3cmほど下に2条の刻目突帯を有する。色調は暗橙褐色を呈する。118は製塩土器の口縁部片である。色調は橙色を呈する。内面にはケズリ後ナデを施している。119は弥生土器の高坏脚部片である。残存長6.2cmを測り、色調は淡橙色を呈する。外面にはミガキによる調整が確認できる。また脚内部は一体型の中実で製作される。

151-SK2140 (第51図)

2-A区、B4グリッドとC4グリッドの境界部で検出した長方形の土坑である。長軸で2.28mを測り、短軸1.42mを測る。堆積は2層からなるが、0.1m弱と薄く堆積している。遺物は弥生土器が数点出土している。遺物の量が乏しいため時期的な位置づけが難しいが、本遺構の時期は弥生時代中期に比定できるだろう。



第47図 151-SK2090 実測図 (1/30)



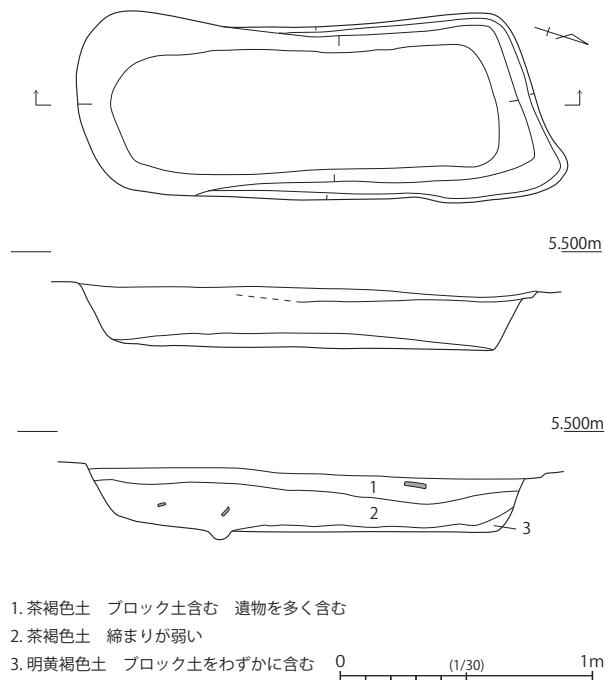
第48図 151-SK2090 出土遺物実測図 (1/3)

第3章 調査の成果

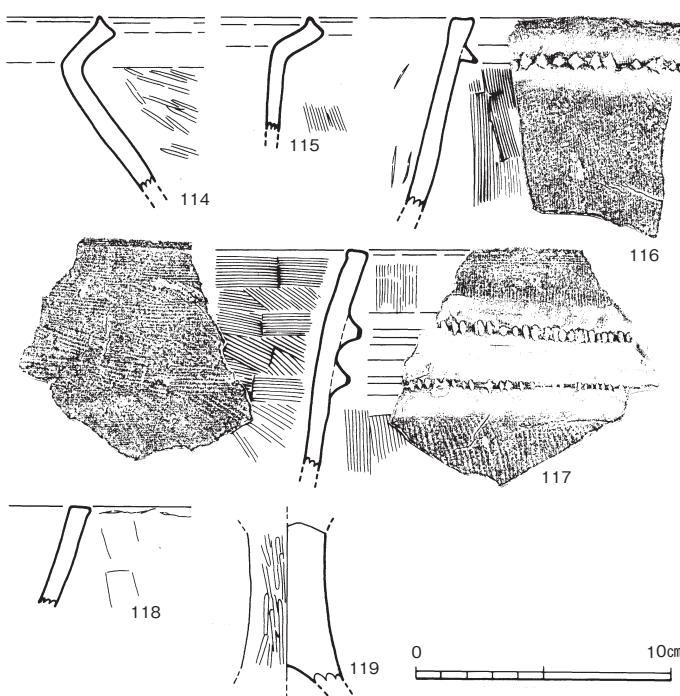
151-SK2140 出土遺物（第52図）

120・121は弥生土器である。120は下城式壺形土器の破片である。口縁端部下に2条の刻目突帯を有する。時期差によるものだろうが、極端に内湾する形状のため、全形が小型である、もしくは鉢など別器種である可能性も想定できる。色調は淡黄褐色を呈する。121は弥生土器の壺形土器の口縁部片である。口唇部平坦面に刺突文と細かな平行線文が施される。口縁上部平坦面には勾玉浮文が施される。色調は橙褐色である。

2点とも弥生時代中期に比定できるものである。



第49図 151-SK2134 実測図 (1/30)



第50図 151-SK2134 出土遺物実測図 (1/3)

151-SK2149（第54図）

2-A区、B3グリッドで検出した円形の土坑である。径1.72mを測る。堆積は3層からなり、下層の埋土は明るい色調を示す。遺構中央部はさらにピット状にくぼみ、中心部に寄るように堆積する状況がうかがえる。遺物は弥生土器が数点出土している。だがいずれも細片であるため、遺構の時期的な位置づけに適用することが躊躇されるが、暫定的に本遺構の時期を弥生時代中期としておきたい。

151-SK2149 出土遺物（第53図）

122から125は弥生土器である。122は甕の口縁部片で、東北部九州系の甕形土器であろう。色調は灰白色を呈する。内外面ともにナデで調整される。123～125は下城式壺形土器の胴部破片であろう。123は細片であるが、器壁に半截竹管状の二叉工具を用いた施文が確認できる。色調は黒褐色を呈する。124は胴部から頸部へ至る部分の破片である。123と同じく工具を用いた2条1組の施文が確認できる。125はナデで調整したのち表面にミガキを施した痕跡が確認できる。弧状の文様と平行線文が施されている。色調は褐色を呈する。

151-SK2150（第55図）

2-A区、B3グリッドで検出した半円形の土坑である。調査区北壁に面しており、遺構の南半分のみ調査を行った。本来は楕円状をなして遺構が展開するものと想定できる。堆

積状況は、壁面及び遺構断面を確認すると5層に分層できる。壁面の状況を観察すると、検出面から更に上部から掘り込まれていた可能性が想定できる。出土遺物は数点であり、いずれも判別不可能で図化に耐えない細片であったため、実測図の提示ができない。年代を特定できる資料に乏しいため、詳細な年代は不明である。上部から掘り込まれる状況と想定すれば、近現代の遺構である可能性もあるだろう。

151-SK2164（第56図）

2-A区、B3グリッドで検出した土坑である。検出時は1つの遺構であると判断したが、遺構の半截をおこなったところ、下部に2つのピット状の掘り込みを伴っていたことを確認した。遺物は土器の細片が見られるが、細片であるため図化できなかった。遺構の時期についても詳細を明らかにしえない。

151-SK2169（第56図）

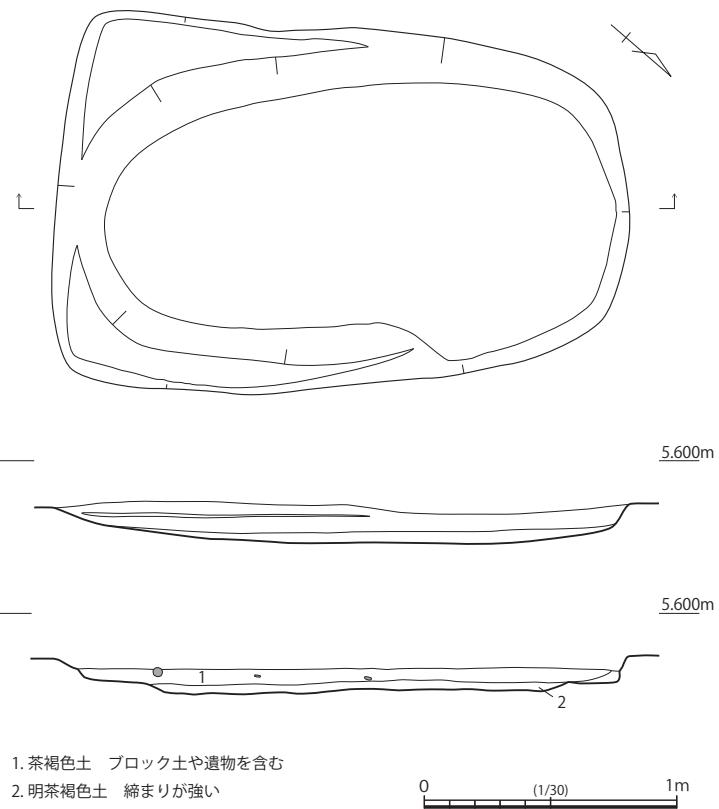
2-A区、B3グリッド南部で検出した土坑である。平面形は不正円をなす。柱穴痕が確認できなかったため土坑としたが、柱穴として機能していた可能性もある。遺物は数点土器が出土しているが、細片のため図示できるものはない。遺構の年代を特定できる資料に乏しいため、詳細な時期を明らかにし得ない。

151-SK2172（第56図）

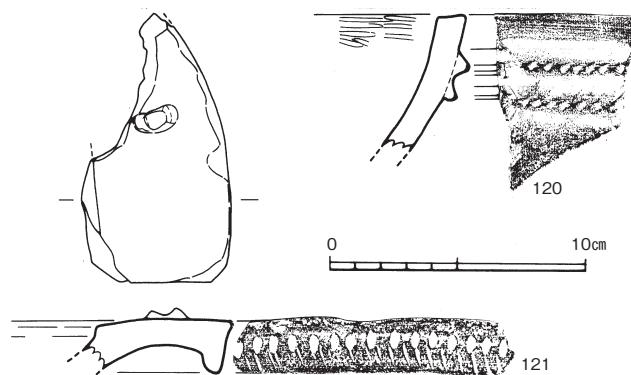
2-A区、B3グリッドで検出した土坑である。平面形は橢円形をなす。内部北側にテラス状の段がついており、南側は一段深く掘り込まれる。遺構の検出段階で遺物を2点確認した。弥生時代に帰属する遺物と思われるが、年代の検討が可能な資料が少なく、詳細な時期の位置づけは難しい。

151-SK2172出土遺物（第57図）

126は弥生土器の底部である。底部径7.6cmに復元でき、色調は橙色を呈する。底部の形状は平底をなし、外面端部は若干外側へ突出する。調整は内外面に細かなミガキが施される。127は砂岩の砥石であろう。加工や調整のあとは明確に確認できなかったため、製品の素材であった可能性もあるだろう。



第51図 151-SK2140 実測図 (1/30)



第52図 151-SK2140 出土遺物実測図 (1/3)

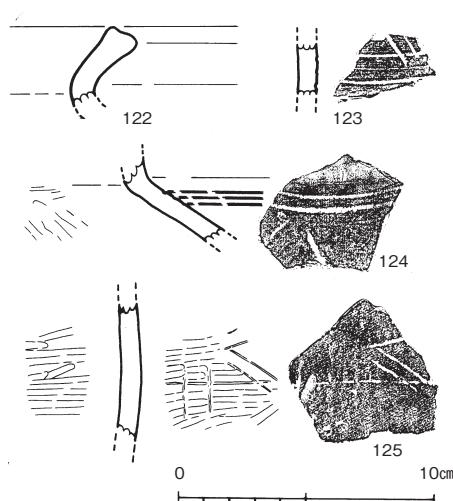
第3章 調査の成果

151-SK2180（第56図）

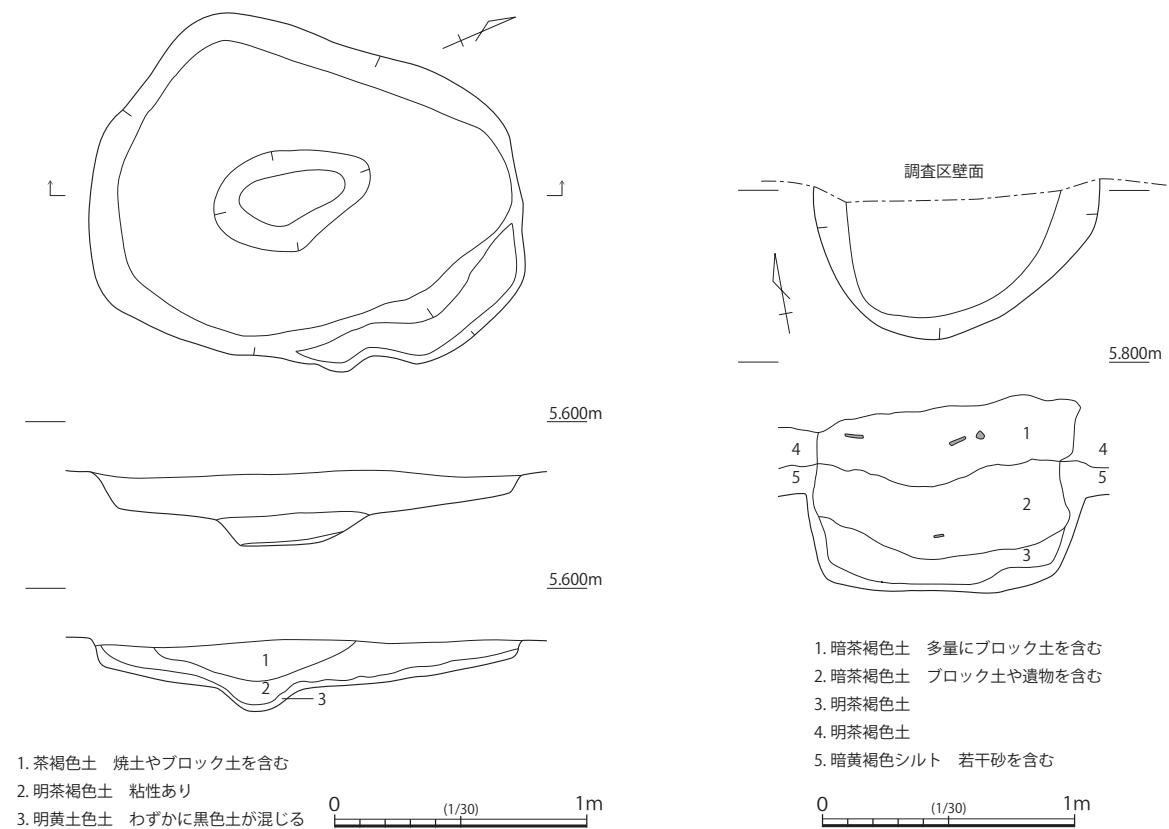
2-A区、B3グリッド北部で検出した倒卵形の土坑である。遺構の径は最大0.58mを測る。柱穴痕が確認できるため、柱穴として機能していた可能性もあるが、今回は土坑として報告する。遺物は1点土器が出土しているが、細片のため図示できるものはない。したがって、遺構の時期も不明である。

151-SK2192（第56図）

2-A区、B2グリッド北東部で検出した円形の土坑である。堆積は薄いものの、2層に分層できる。遺物は数点土器が出土しているが、細片のため図示できなかった。年代を特定できる資料に乏しいため、遺構の時期も不明である。

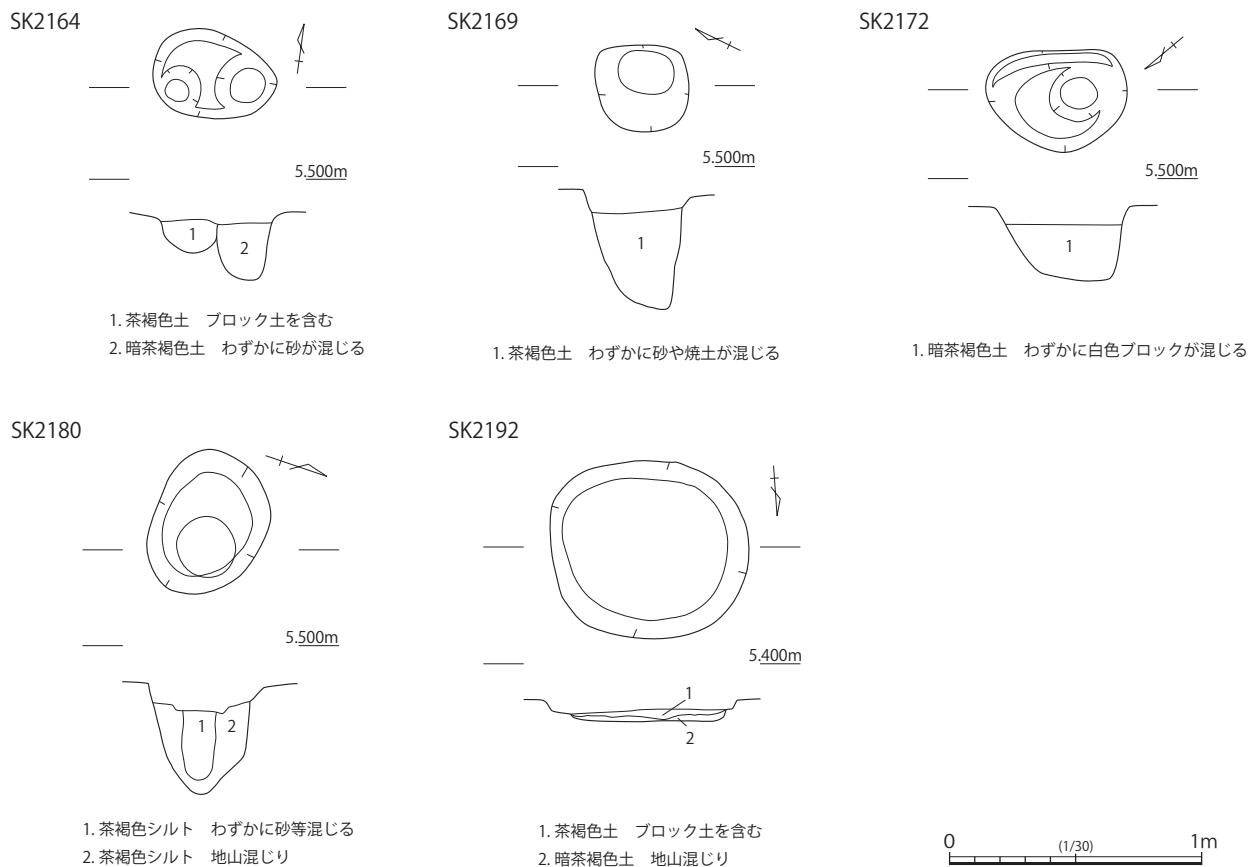


第54図 151-SK2149 出土遺物実測図 (1/3)



第53図 151-SK2149 実測図 (1/30)

第55図 151-SK2150 実測図 (1/30)



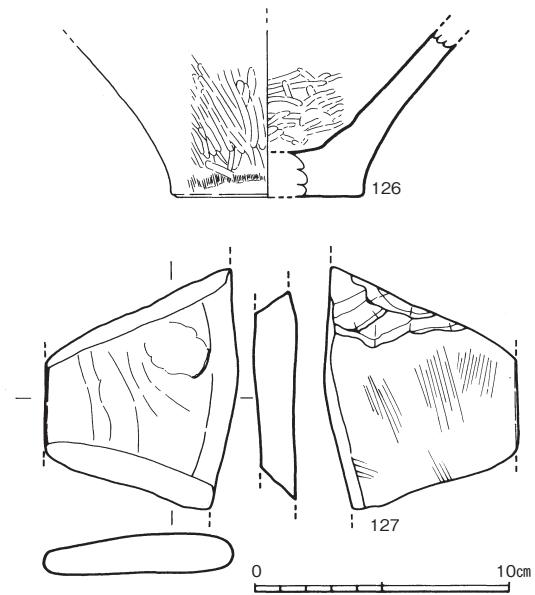
第56図 151-SK2164 ほか実測図 (1/30)

151-SK2224 出土遺物 (第59図)

128・129は弥生土器である。128は壺形土器の口縁部片である。内面には沈線による山形の文様が確認できる。色調は灰黄褐色を呈する。外面器壁はナデ後ミガキが施され、平滑に成形されている。129は鉢形土器である。復元口径は21.0cmを測り、器高は残存値で6.4cmを測る。色調は灰黄褐色を呈する。内外面ともにナデで成形したのち、細かなミガキで仕上げられた様子が観察できる。129については下半部を欠損するため、台付の鉢であった可能性もある。

151-SK2227 (第60図)

2-A区、B3グリッド中央部で検出した不正円形の土坑である。遺構の規模は、径1.94m、深さ0.52mを測る。内部北側が一段高くなっている、テラス状の形をなす。南半部は掘り込まれており、南端部はさらに一段低くなる。堆積は6層からなり、1層が最終的な埋土であろう。遺物は須恵器や土師器が出土しており、出土遺物の年代観から本遺構の時期を9世紀代と位置づける。

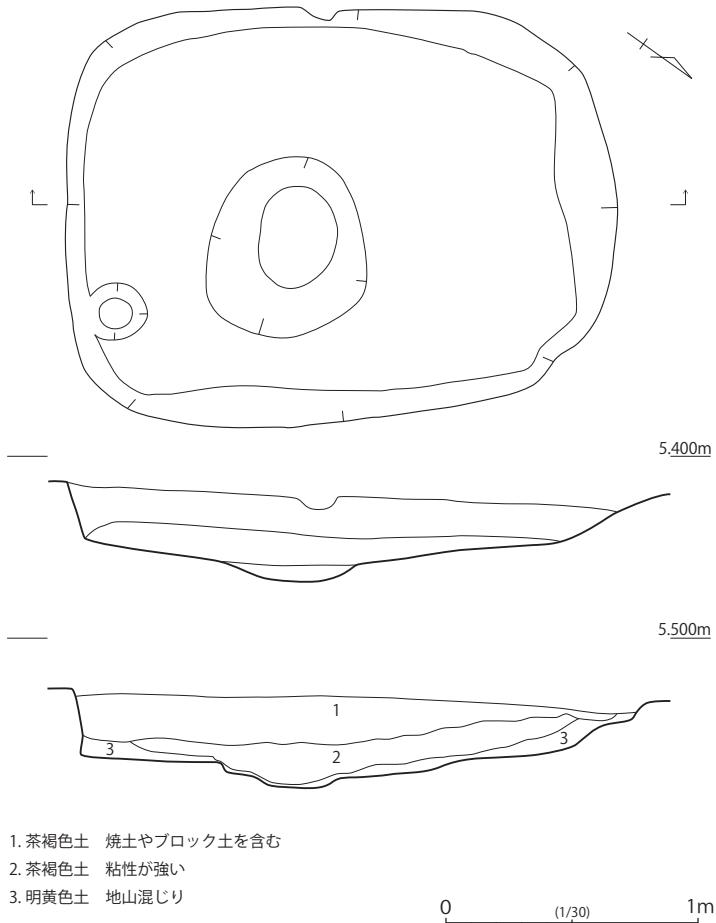


第57図 151-SK2172 出土遺物実測図 (1/3)

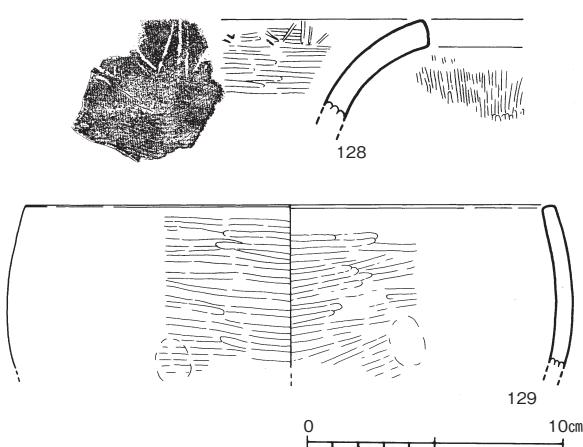
151-SK2227 出土遺物（第61図）

130は須恵器の壺蓋であり、宝珠ツマミが残存する。端部を欠失するため、口径は不明である。色調は灰色をなす。頂部を中心に回転ナデが施される。131は土師器壺である。復元口径13.9cm、底部径8.4cmを測る。色調は浅黄橙色である。132は須恵器壺蓋である。上半部を欠損するため、全形はうかがい得ない。復元口径は15.0cmを測り、色調は灰褐色を呈する。ヨコナデによって調整される。133は土師器壺である。口径14.7cmに復元でき、色調はにぶい橙色を呈する。134は土師器の瓶の取手である。残存長5.5cmを測り、色

調はにぶい橙色を呈する。粘土塊を貼付け後、ナデつけてユビオサエを施して成形している。これらの遺物は9世紀代に比定できる。



第58図 151-SK2224 実測図 (1/30)



第59図 151-SK2224 出土遺物実測図 (1/30)

151-SK2256 (第62図)

2-A区、C4グリッドで検出した長土坑である。長軸2.92m、短軸0.5m、深さ0.72mを測る。検出段階で、遺構のプランに加え人頭大の自然礫が確認できたため、記録を作成し掘下げを行った。精査した結果、堆積は3層からなり、第1層に遺物をはじめとしたブロック土などの堆積が確認できた。長軸の長さが大きいことと深さがあったため、トイレ状遺構の可能性も考慮し、各層の土層サンプルを採取し自然科学分析を行った。分析の結果は第4章に詳述されるが、SK2256の堆積土中からはトイレ遺構に該当する要素は見当たらなかったため異なる機能を有した遺構であることが想定されるが、その他の機能としては、貯蔵穴といった性格を有していた可能性を指摘しておきたい。ただ、出土遺物などからも推察できる要素が少なく判然としない。SK2256からの出土遺物は検出時に弥生土器を数点確認した。また、各層から細片ではあるが弥生土器が出土している。遺物の諸特徴から、本遺構の時期は弥生時代中期に比定できる。

151-SK2256 出土遺物 (第63図)

141～146は弥生土器である。141・142は壺形土器の口縁部である。141は口径20.0cmに復元でき、色調はにぶい赤褐色を呈する。

頸部に1条の貼付突帯が巡らされる。外面器壁にはナデ後のハケ目が強く残っている。内面にはハケと一部にナデの痕跡が観察できる。142は口径16.8cmに復元でき、色調は暗赤褐色を呈する。頸部は残存しないが、口縁端部の形状が142と類似しており、同一の型式に属する資料であると判断できる。143は甕型土器である。口縁部から胴部にかけて残存する。口径は21.0cm、色調はにぶい褐色を呈する。内外面ともにナデの痕跡が確認でき、内面にはユビオサエによる成形痕が観察できる。144は下城式甕形土器である。口縁端部下1.5cmに1条の刻目突帯を有する。色調は明褐色を呈する。145は弥生土器の底部片である。器高は残存値で4.8cmを測り、底部径は6.5cmである。色調はにぶい黄橙色を呈する若干内湾気味の平底である。

146は壺形土器の口縁部片である。端部平坦面に2段の刺突文を有する。全体形状は内湾する。色調は橙色を呈する。147は台石である。石材は凝灰岩であり、重量は9000gを量る。台形状をなすが、上端部は欠損する。

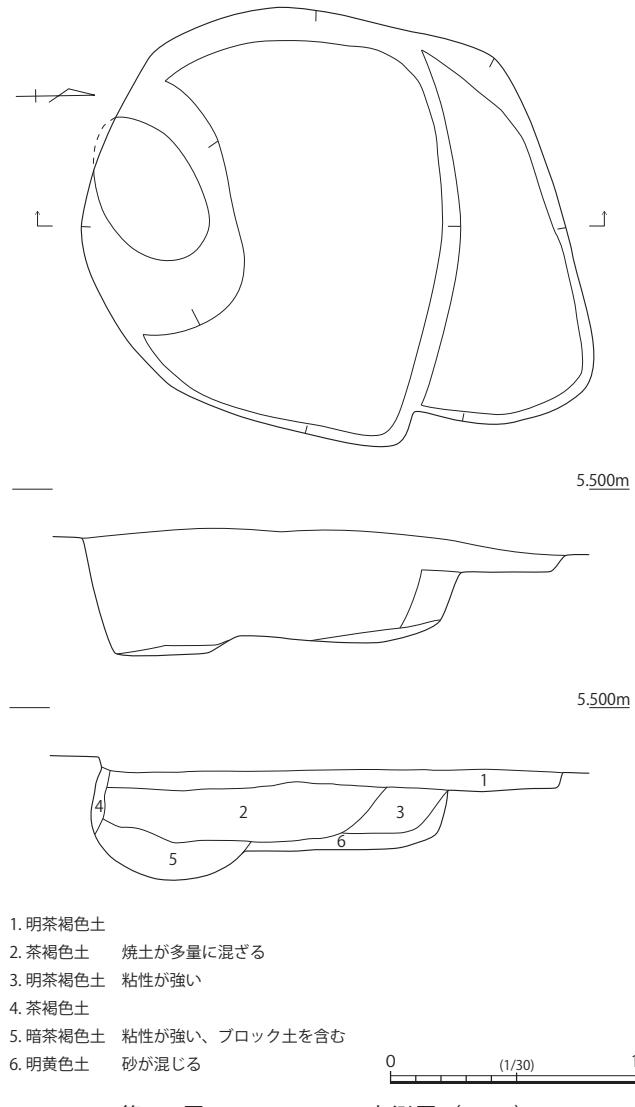
4. ピット (SP)

151-SP2228

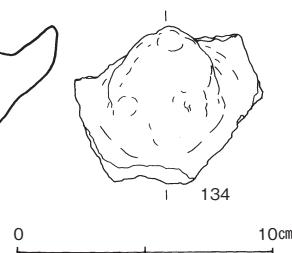
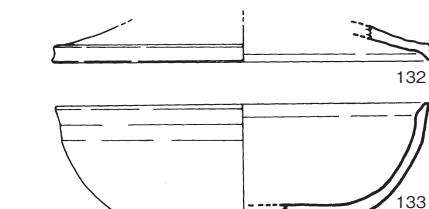
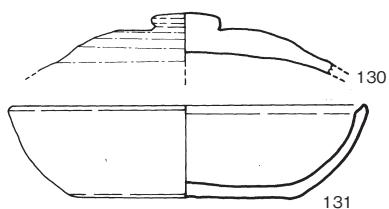
SP2228は2区における調査終了間際に検出した遺構である。埋戻しの最中、調査区へ出入りする階段を撤去する際にその角に確認した。調査区の壁面直下に位置しており、埋戻しも急ぐ必要があったため、個別図作成など詳細な記録を行い得なかった。遺物については第64図で報告する。

151-SP2228 出土遺物（第64図）

148は須玖式土器の高坏片である。鋤先状口縁をなす口縁部分が残存する。上部平坦面は粘土貼付けによって整形され、厚ぼったい印象をうける。口唇部外面には棒状工具によって施された刺突文が連続する。色調は淡橙色を呈する。149も須玖式土器の高坏片である。148同様、鋤



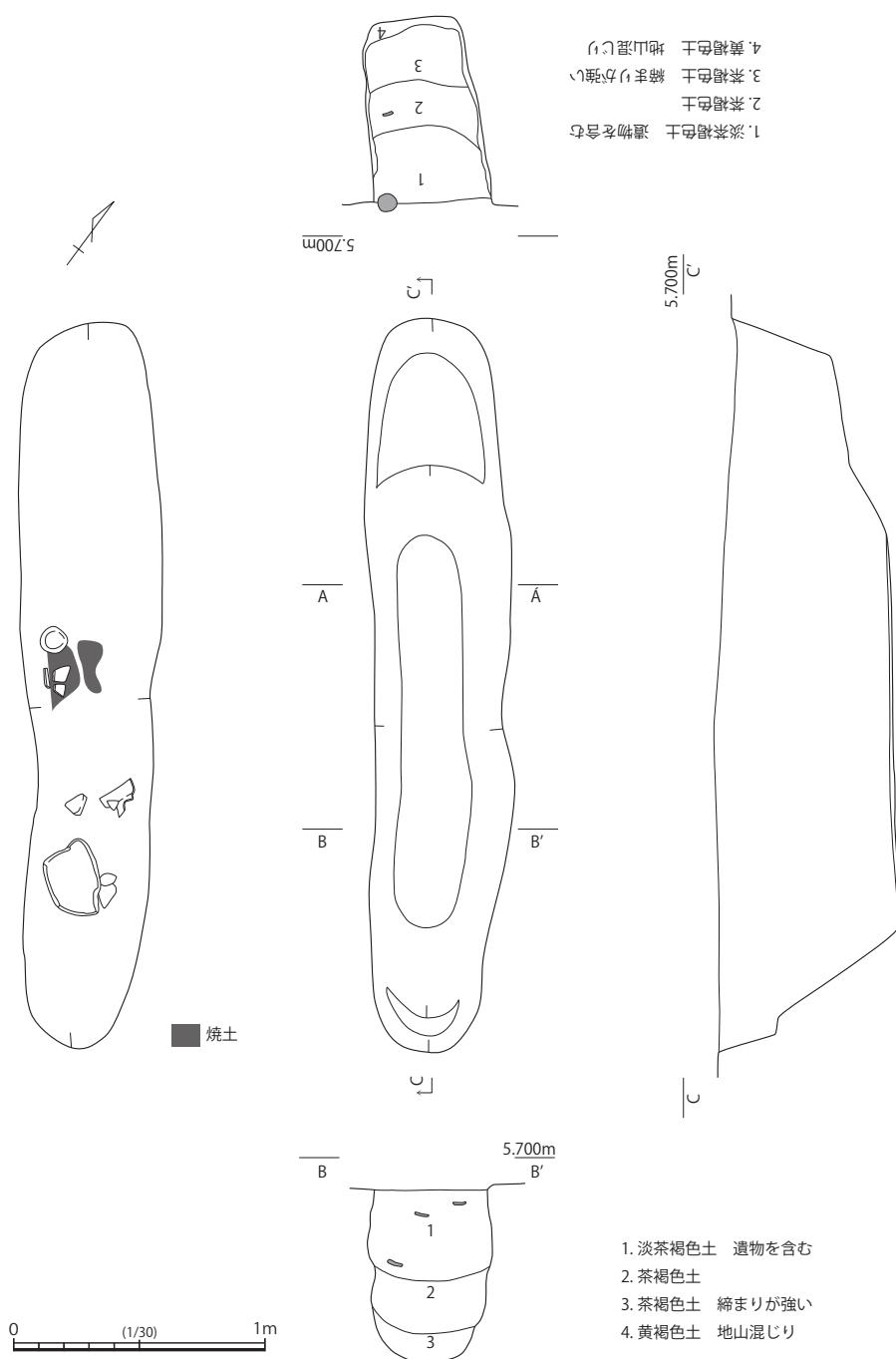
第60図 151-SP2228 実測図 (1/30)



第61図 151-SP2228 出土遺物実測図 (1/3)

第3章 調査の成果

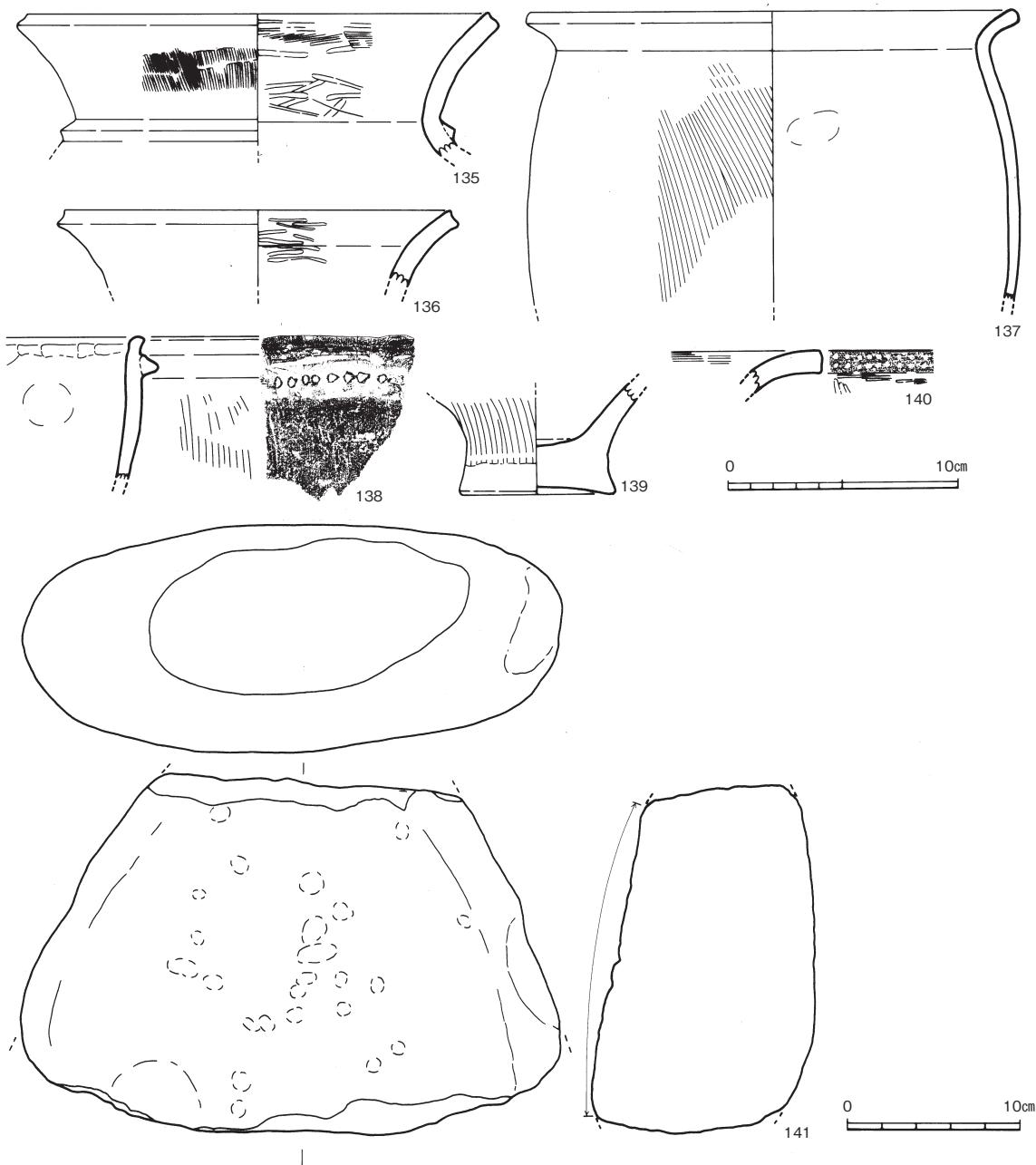
先状口縁をなす口縁部分が残存する。施文や丹塗りなどは確認できないが、口縁端部をつまみ上げている。色調は淡黄橙色を呈する。150は東北部九州系の甕形土器口縁部であるが、頸部屈折点に1条の刻目突帯が確認できる。在地の下城式甕形土器に見られる刻目突帯を施すことから、折衷型式の土器であると考える。色調は橙色を呈する。内外面ともに調整にはナデが施される。151～153は下城式甕形土器である。151は口縁部からやや離れた位置に2条の刻目突帯が巡らされる。色調はにぶい橙色を呈する。調整には、ナデ後ハケで仕上げられる状況が確認できる。152は1条の刻目突帯を有する資料である。色調は黄橙色を呈する。胎土には角閃石や長石を多く含むことが観察できた。153は下城式甕形土器のうち、口縁下部に2条の刻目突帯が貼り付けられる資料である。ただ、破片であるため、さらに突帯が巡る可能性もある。色調はにぶい



第62図 151-SK2256 実測図 (1/30)

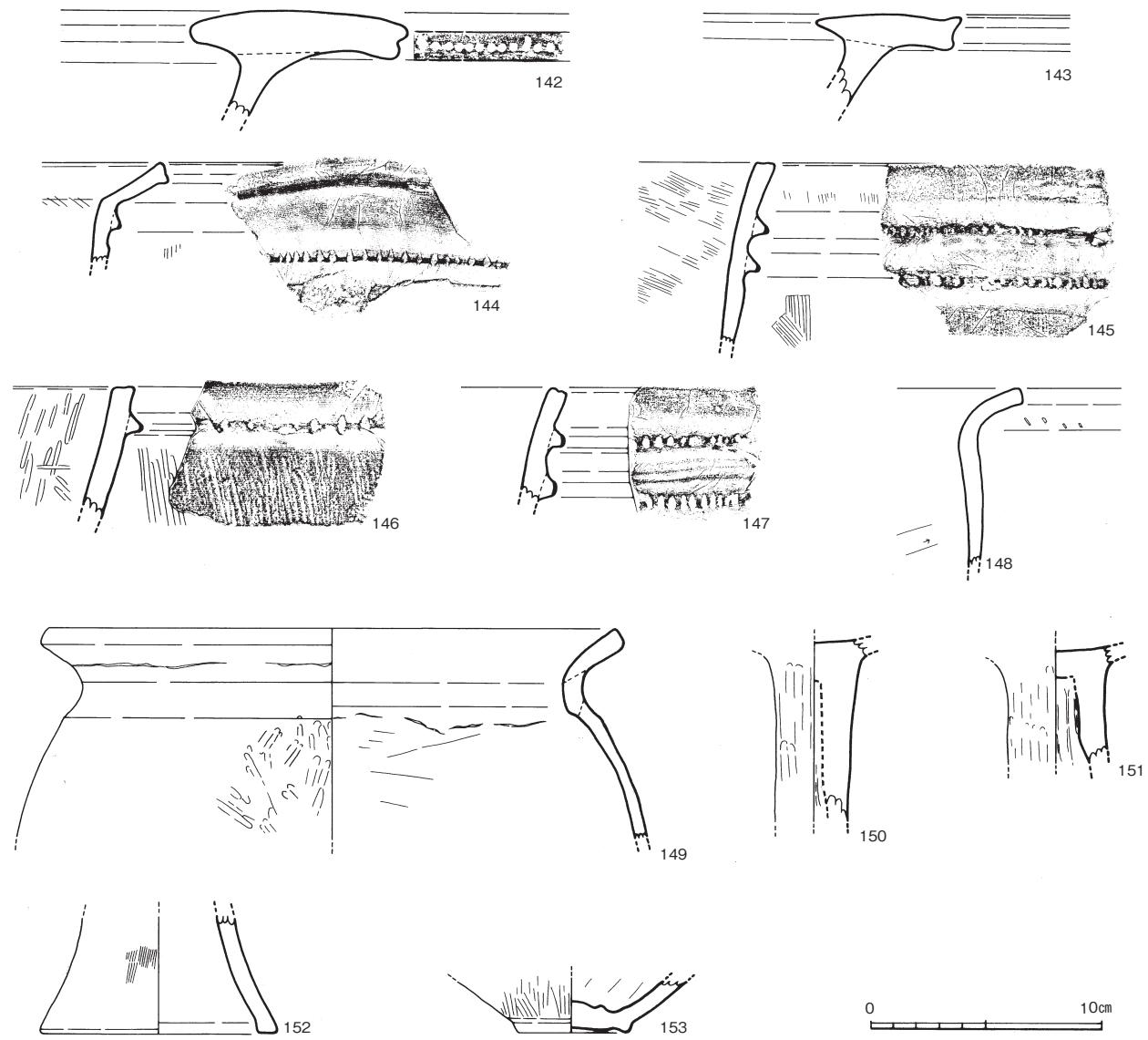
黄橙色を呈し、胎土には若干角閃石や長石が混ざることが確認できる。154は甕型土器の口縁部片である。破片のため口径等は復元できなかった。「く」の字に屈曲するが、カーブはゆるやかであり、わずかに外反しながら胴部へいたる。色調は橙色を呈する。155は布留式系の甕である。口縁部から胴部上半部分が残存しており、口径は24.6cmに復元できる。色調はにぶい橙色を呈する。器壁はナデで平滑に成形されるが、外面の一部にはミガキの痕跡が確認できる。上述の遺物と比べ所産時期が異なる。156・157は高壊の脚部である。ともに壊部以下は中空である。156は残存する器高が7.9cmを測り、色調はにぶい褐色を呈する。内面は成形に伴う絞り痕が確認できる。外面にはヘラミガキで調整した痕跡が残る。157は残存する器高5.5cmを測り、色調は浅黄橙色を呈している。断面は詳細に観察しえないため形状からの想定であるが、壊部分を充填し

て成形した可能性がある。158は器台の脚部である。159は碗の底部か。軸の受け部であると想定できる。



第63図 151-SK2256出土遺物実測図 (1/3)

第3章 調査の成果



第64図 151-SP2228出土遺物実測図 (1/3)

(4) その他の遺構と遺物

ここでは、遺跡の中心となる時期とは異なる遺構、及び位置づけが困難な遺構について報告する。また、表土掘削時や遺構検出時等、明確に遺構に伴わざ出土した遺物のうち、主要なものを示す。

151-SB2261 (第65図)

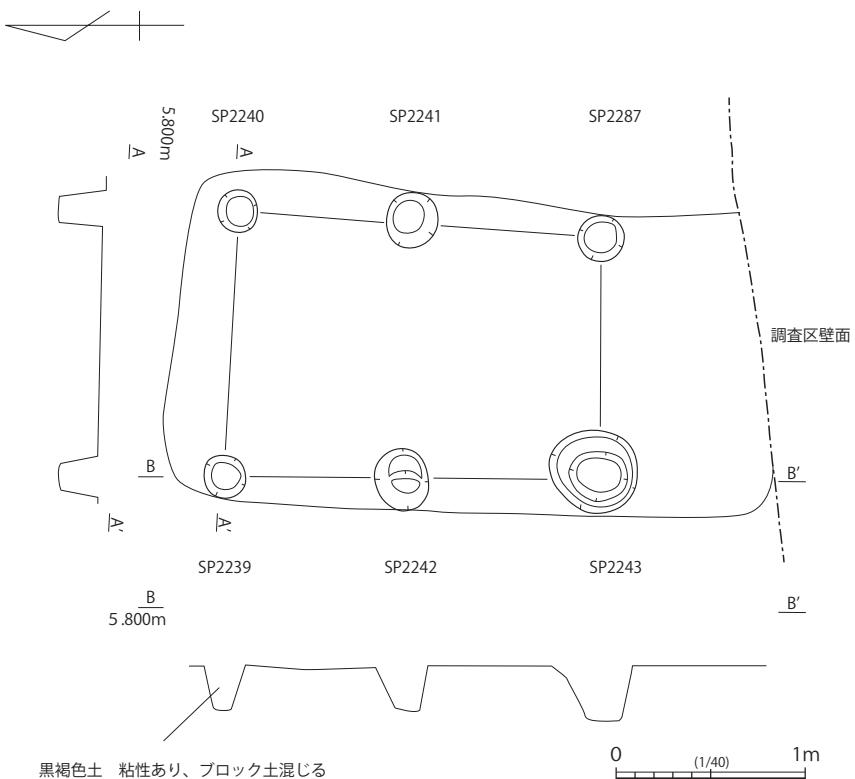
2-B区、C3グリッド内で調査区南壁に面して検出した建物跡である。1間×2間の規模を有し、ほぼ南北方向に配置される。SB2261を構成する柱穴はそれぞれ不定形の円形をなす。柱穴のうち、SP2243からビール瓶や鉄釘が出土したため、本建物跡の時期は近代に比定できる。SB2261の機能としては、倉庫や防空壕などの用途が考えられるだろう。

151-SB2261 出土遺物 (第66図)

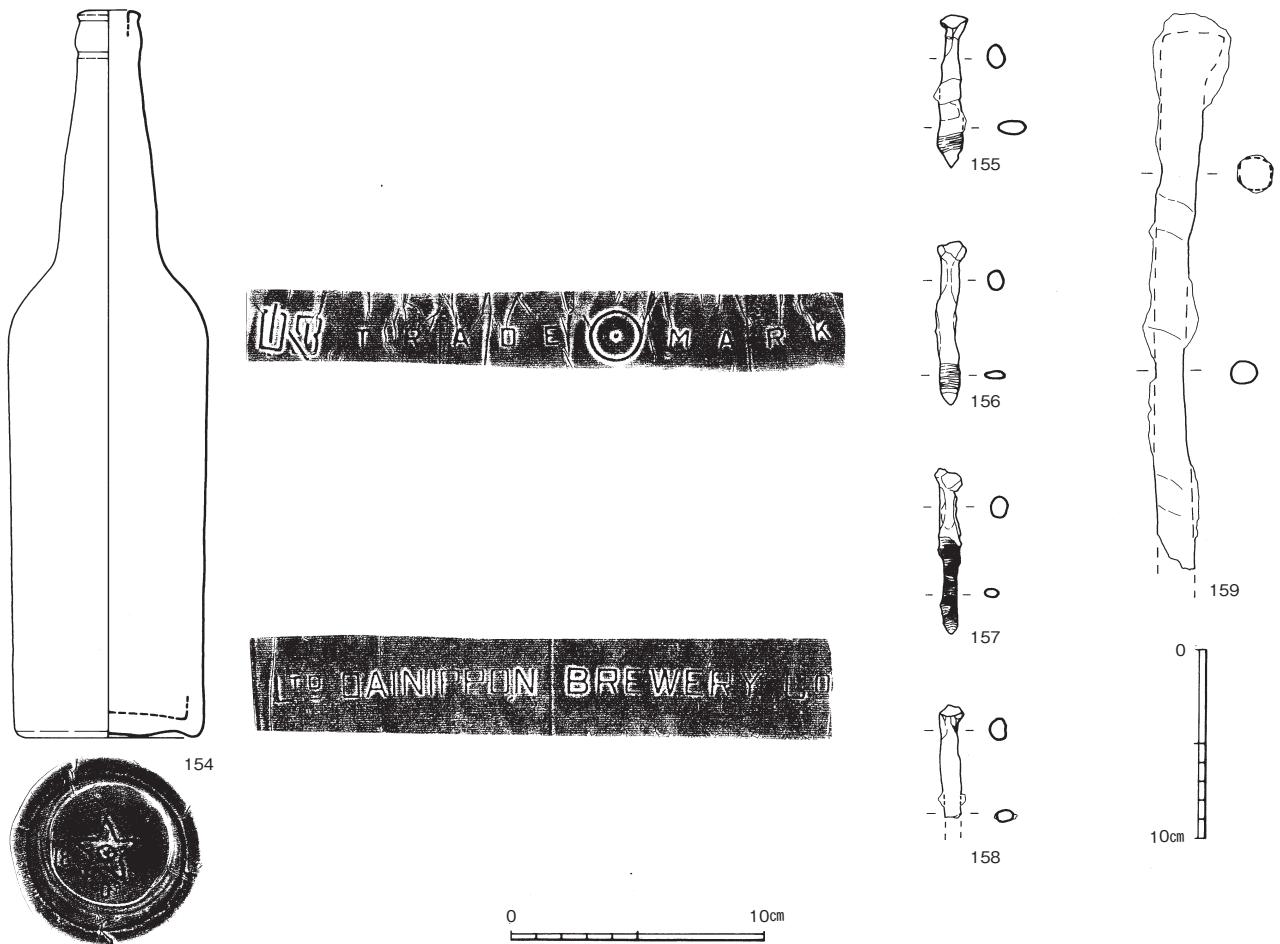
155はガラス瓶である。器高28.6cm、底部径7.6cmを測る。重量は600gを量る。色調が茶褐色を呈するため、ビール瓶と判断した。肩部に「TRADE © MARK」の文字が、底部付近に「DAINIPPON BREWERY CO LTD」の文字が陽刻され、底部には星のマークが確認できる。これらの諸特徴は「大日本麦酒」製のビール瓶であるとしており、所産時期は戦前の1906年から戦後の1949年の間に属するものと判断できる。156～159は鉄釘である。遺存状態が悪く、断面の詳細な図化作業や写真撮影は行えなかった。これらはいずれもSB2261を構成する柱穴のうち、SP2243から出土した資料である。

151-SX2004 (第67図)

2-A区、B2グリッドで検出した土器集中ブロックである。SK2021に隣接して検出したが、SK2021以上に明確なプランを有さず、断ち割りを行っても土層に痕跡が確認できなかった。調査期間の都合上、出土状況の記録を行いえなかった。堆積は薄く、茶褐色の粘性を有する土が確認できるが、地山の色調と酷似するため、検出や掘削に困難を要した。出土遺物には弥生土器と古代の土師器・須恵器等がある。遺構の年代的位置づけは難しく、SX2004の年代は不明であると言わざるを得ない。局所的な包含層である可能性が高いものと思われる。



第65図 151-SB2261 実測図 (1/40)



第66図 151-SB2261 出土遺物実測図 (1/3)

151-SX2004 出土遺物（第68図～第77図）

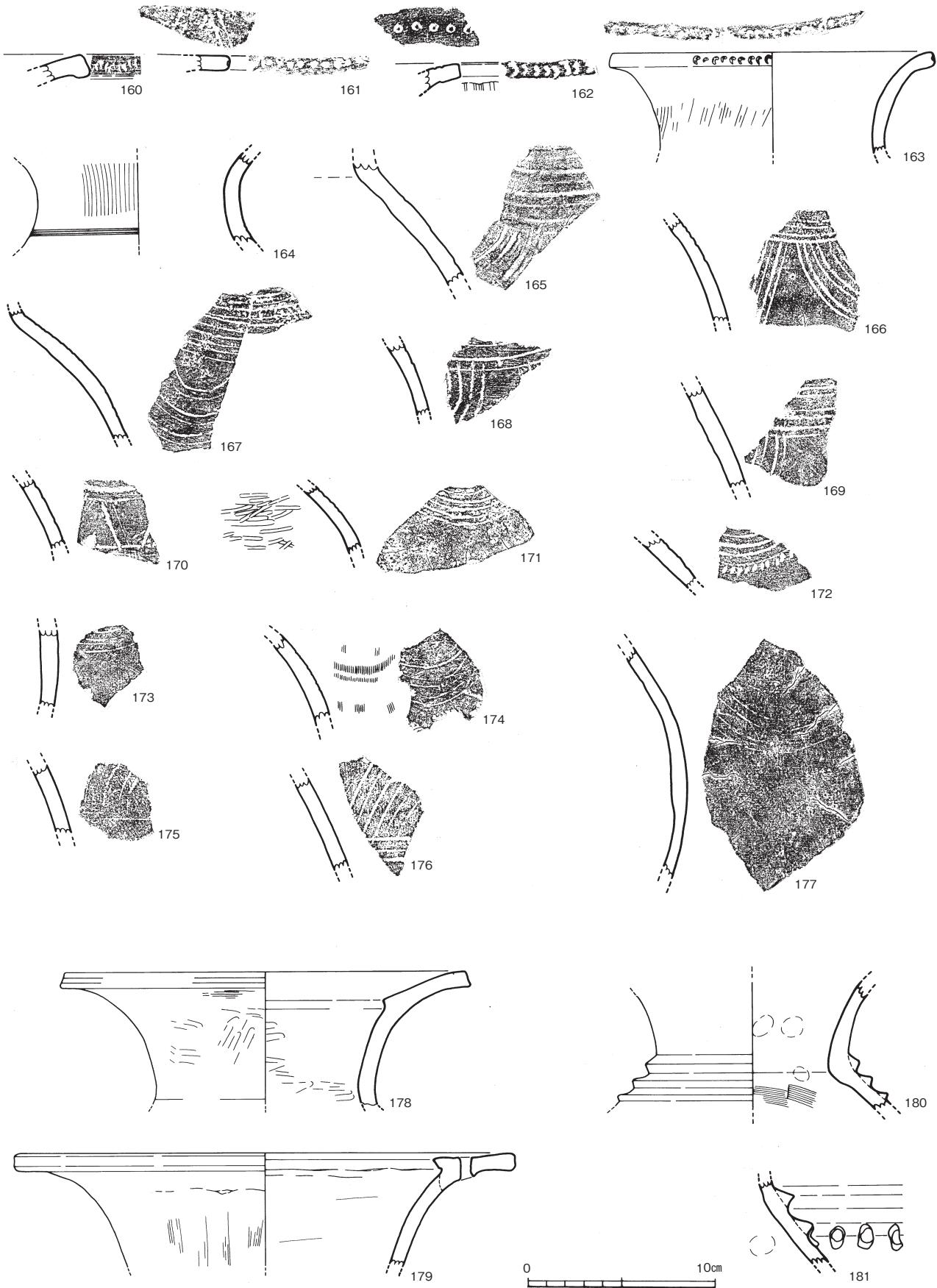
SX2004 から出土した遺物は非常に数量が多く、コンテナボックス約20箱にのぼる。大別すれば弥生時代と奈良時代の遺物が主体であり、その多くを土器類が占める。出土遺物のうち、形状の比較検討に耐えうる資料をピックアップして掲載した。一方で、完形品や接合して準完形となる資料は少なく、いずれも破片資料が中心となっている。遺構の評価に関わるだろうが、今回はそれら遺物をまとめて報告することで、今後の検討につなげるものとしたい。なお、点数が多いため、遺物の諸特徴を概略して述べる。法量や色調に関する詳細な情報は遺物観察表をご参照いただきたい。



第67図 151-SX2004 遺物出土状況

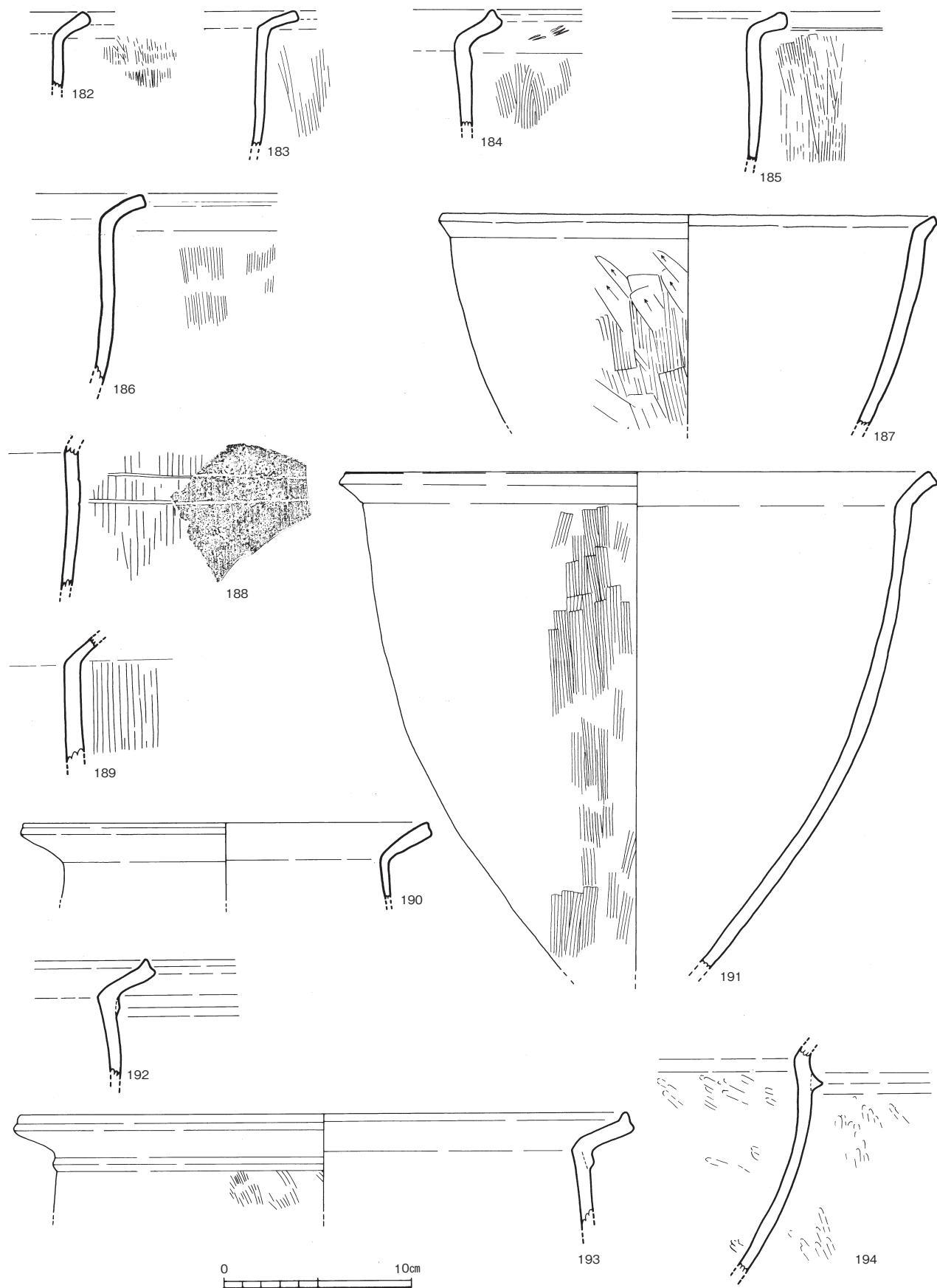
1. 弥生土器（第68図～第72図）

160～238は弥生土器である。160～162は壺形土器の口縁部片である。半截竹管状の工具を用いて施したものと確認できる。いずれも色調は赤褐色～橙色を呈する。161は口縁上部平坦面に沈線が施される。162は口縁上部平坦面に円文が施される。これらは弥生時代中期前半に属する資料であろう。163は壺形土器の口縁部から頸部にかけて残る破片である。口唇部には半截竹管状の工具によるC字状の文様が施され



第68図 151-SX2004出土遺物実測図1 (1/3)

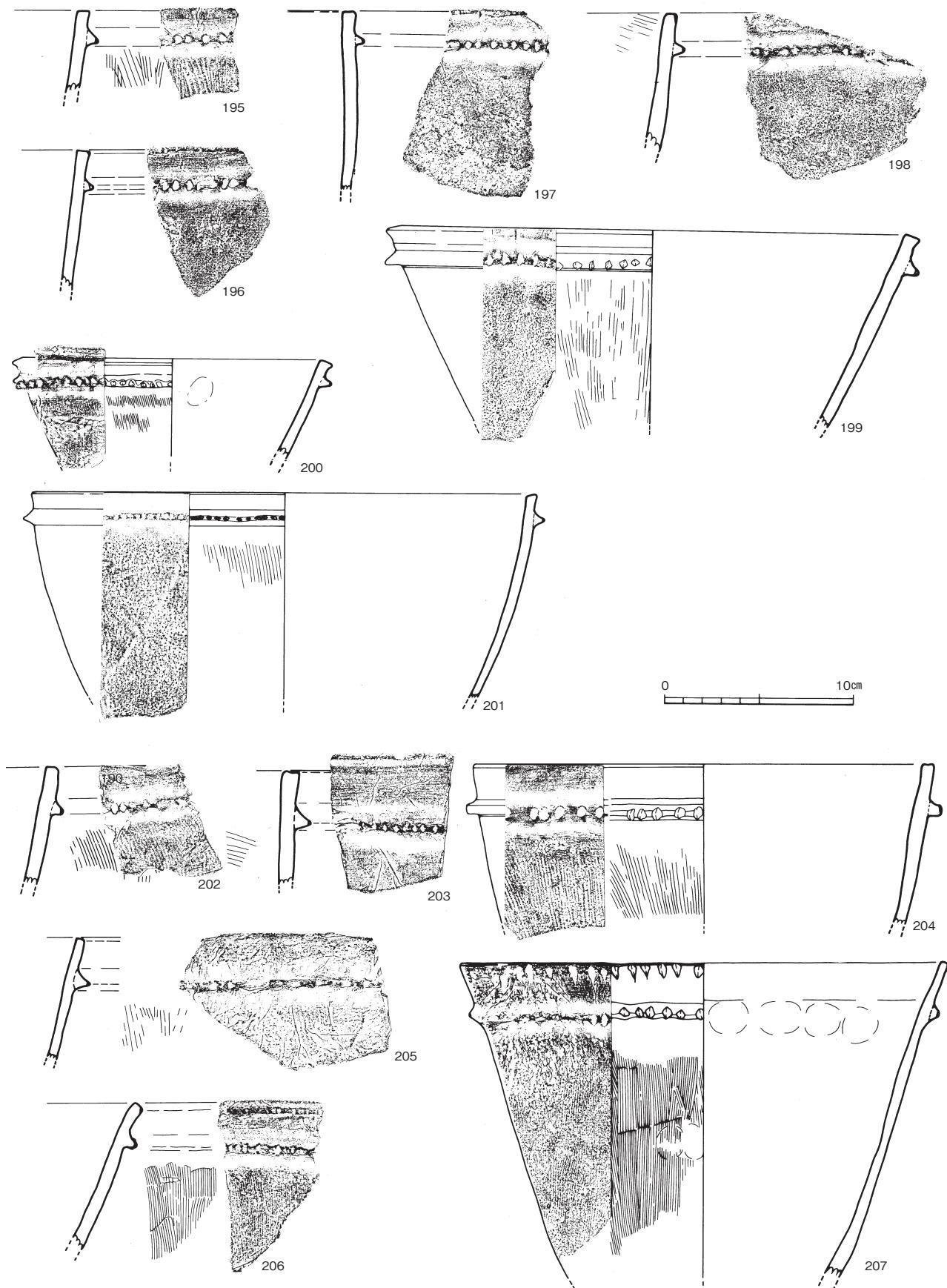
第3章 調査の成果



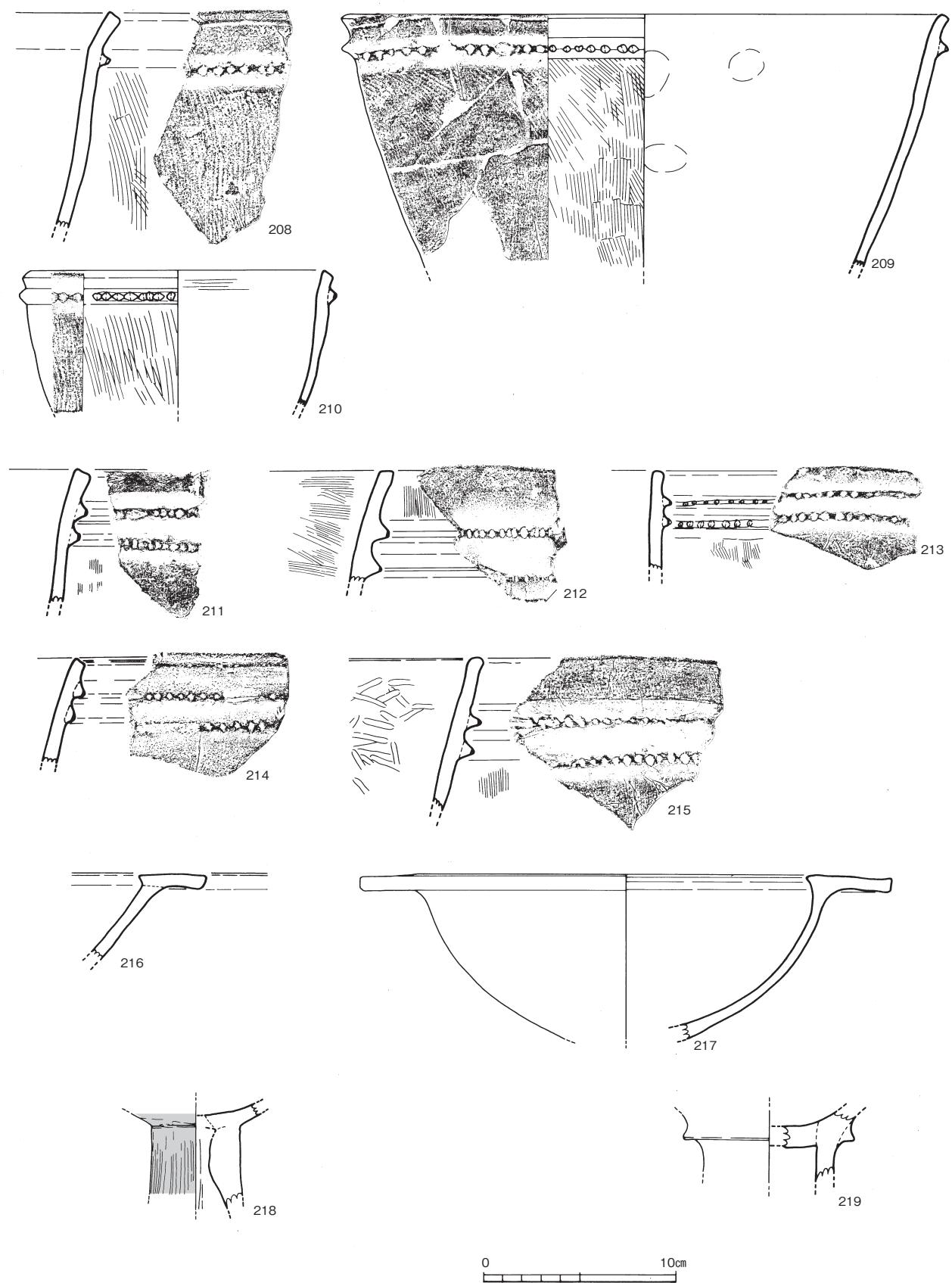
第69図 151-SX2004 出土遺物実測図2 (1/3)

る。164は壺形土器の頸部片である。顕著な施文等は見当たらないが、頸部下端部、胴部と接続すると思われる箇所に2条の沈線が確認できる。165～177は下城式壺形土器である。すべて胴部の破片であり、半截竹管状の二又工具を用いて施文した重弧文や平行線文、刺突文が施される。うち165や166などは2条1組で施文した様子が器壁の状況からうかがえる。これらの施文パターンは互いに類似しており、色調も似るが、接合関係にあり大きく復元できる資料は確認できなかった。器壁の調整については、基本的に内外面ともにナデで仕上げられる。ミガキが見られる箇所もあり、171などは内面に施される。いずれの資料も、胴部上半部の破片であると思われ、屈曲の具合などから肩部や頸部に当てはまるものと思われる。178・179は壺形土器の口縁部～頸部にかけての破片である。178は胎土に角閃石や長石などの鉱物を多く含む。179は口縁部平坦面に上下に貫通する穿孔が施される。口縁平坦部分は粘土を接合して成形した様子が確認できる。外面器壁の調整にはナデ後ハケが施される。180・181は壺形土器の頸部片資料である。180は頸部にM字状の貼付突帯が3条確認できる。色調は黄褐色を呈し、胎土には長石が多く含まれる。調整は内外面ともにナデが確認でき、内面の一部にはハケ目の痕跡が残る。181は細片であり法量の復元はできない。色調はにぶい黄橙色を呈し、外面はナデで調整される。口縁部へ屈曲しながら延びていく箇所に2状の突帯が貼り付けられる。断面は三角形状をなし、下段突帯の下部には勾玉状の浮文が等間隔に連続して施される。182～193は、東北部九州系の甕形土器である。口縁端部が上部へつまみあげられる形状をなし、口縁部から頸部にかかる箇所は「く」の字に屈折する。法量が復元できる187は復元口径26.2cmを測り、色調は暗茶褐色を呈する。内外面ともにナデで調整され、外面にはケズリやハケ目が観察できる。胎土には長石を多く含んでいる。190は復元口径21.6cmを測る。色調は浅黄橙色を呈しており、胎土には長石を含む。調整は内外面ともにナデが主体となる。191は復元口径31.2cmを測る。底部を除いて全体の形状が良好に残る資料である。色調は橙褐色を呈し、胎土には角閃石や長石を多く含む。193は復元口径32.8cmを測る。口縁端部は段を形成するようにつまみ上げられ、屈曲する頸部には1条の突帯が巡らされる。色調はにぶい黄褐色であり、胎土には角閃石を多く含む。いわゆる如意状の口縁である。188は胴部の破片資料であるが、2条の沈線が施される。色調は黄橙色であり、調整はナデ・ハケが確認できる。194は甕形土器の胴部片であると思われる。胴部上端に1条の貼付突帯が巡らされ、その断面形状は三角形をなす。色調は灰黄褐色であり、胎土に角閃石を多く含む。195～215までは下城式甕形土器の資料である。いずれも完形に復元できるものはなかった。195～201は刻目突帯を口縁部から近い場所に施す一群である。比較して、202～208などは口縁部から2～3cmほど離れた箇所に刻目突帯を施す一群である。211～215は刻目突帯を2条有する一群である。突帯同士の間隔はほぼ開きをもたない。これらも、刻目突帯を口縁直下に施す一群と口縁部から離れて施す一群に分類できる。以下、法量の復元できる資料を中心に詳述する。199は口径26.8cmに復元でき、器高は残存値で10.3cmを測る。色調は灰白色を呈し、胎土に角閃石を多く含む。200は口径15.9cmに復元でき、器高は残存値で5.3cmを測る。色調は橙褐色を呈し、胎土中の含有物は少ない。201は口径が27.6cmに復元でき、器高は残存値で5.8cmを測る。色調は淡橙褐色であり、胎土中に長石、石英の粒が確認できる。207は復元口径26.0cmを測り、色調はにぶい暗褐色を呈する。他の下城式甕形土器資料と異なり、口縁端部に刻目が直接施される。いずれも単口縁の刻目突帯を有する甕という点で共通するが、口径や器高、色調といった特徴に加え、胎土中の含有物にも若干の違いが確認できる。観察者の視点にもよるだろうが、個体間で差異が生じている点を指摘しておきたい。216・217は須玖式系の高坏形土器の坏部である。216は鋤先状口縁を有し、口縁上部平坦面は粘土貼付けによって形成される。器壁が大きく剥離するため、調整については詳述しえない。217は口径が27.8cmに復元でき、残存する器高で8.5cmを測る。色調は淡褐色を呈し、胎土中に角閃石・

第3章 調査の成果



第70図 151-SX2004 出土遺物実測図3 (1/3)



第71図 151-SX2004 出土遺物実測図4 (1/3)

第3章 調査の成果

長石を多く含有する。調整はナデが主体であり、外面器壁はヨコナデによって丁寧に成形される。218・219は弥生土器脚部の破片である。218は高壺形土器の脚部分であると考える。外面には丹塗りが施されている。器高は残存値で5.6cmを測り、内部は中空である。外面にはミガキが施され、内面には成形時の絞り痕が確認できる。219は台付鉢の脚部であろうか。220は壺形土器の口縁部である。221の甕形土器は口縁下半部に穿孔を有する。222は鉢である。下半部を欠損するため全体形状は不明だが、台付鉢である可能性もあるだろう。223・224は広口壺の胴部片である。胴部に2条の突帯を有する。225～238はいずれも底部資料である。平底の破片が中心となるが、238のように不安定な平底をもつものがある。基本的に東北部九州系の甕形土器や下城式甕形土器・壺形土器の底部であるだろうが、231のように胴部の開きが大きいものは、蓋形土器である可能性も高い。明確に蓋形土器と判別できる資料ではなかったため、底部として報告している。236は鉢形土器の脚部である。台壺鉢であると想定でき、壺部と脚部の接合に円盤充填技法が用いられる。

2. 石器（第73図）

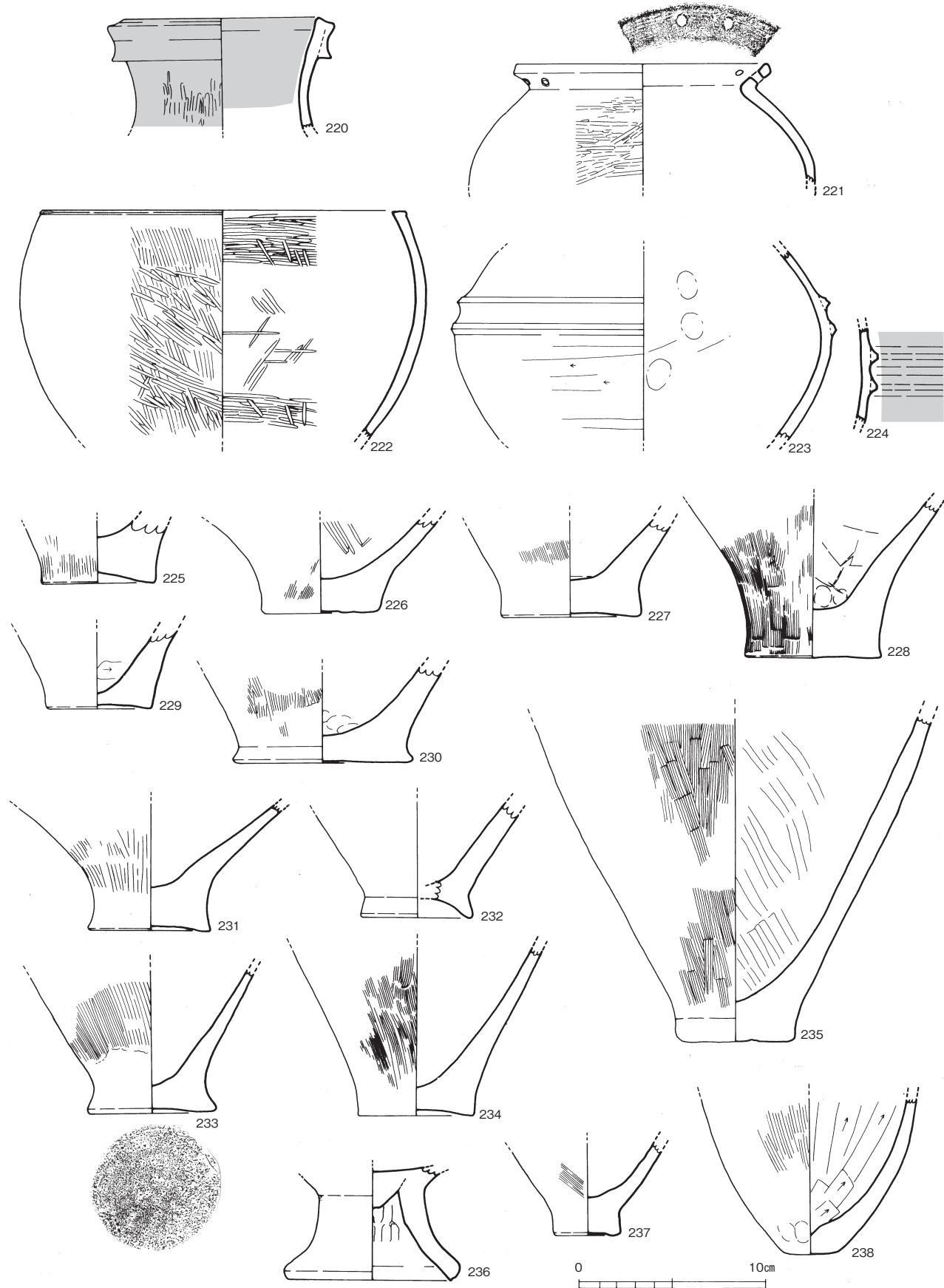
第73図にSX2004から出土した石器を示した。磨製石鏸や石包丁は弥生時代に属するが、そのほかの石器は縄文時代もしくは弥生時代の資料であると思われる。

239は姫島産黒曜石製の打製石鏸である。三角形状の無凹式である。240はチャートを用いた打製石鏸である。形状から未製品である可能性が高い。241～245は磨製石鏸である。いずれも長三角形を呈し、石材には結晶片岩が用いられる。全体に丁寧な研磨が施される。246は姫島産黒曜石を用いた石錐である。石鏸の可能性もある。247・248は姫島産黒曜石の剥片である。249は姫島産黒曜石の石核である。250は石包丁である。石材は輝緑凝灰岩が用いられ、立岩産の可能性がある。251は蛤刃型の磨製石斧である。刃部周辺には強い叩打痕が確認できるため、使用されたものであろう。252・253は結晶片岩製の打製石斧である。素材として用いた可能性があるが、耕耘具としての用途も想定できる。

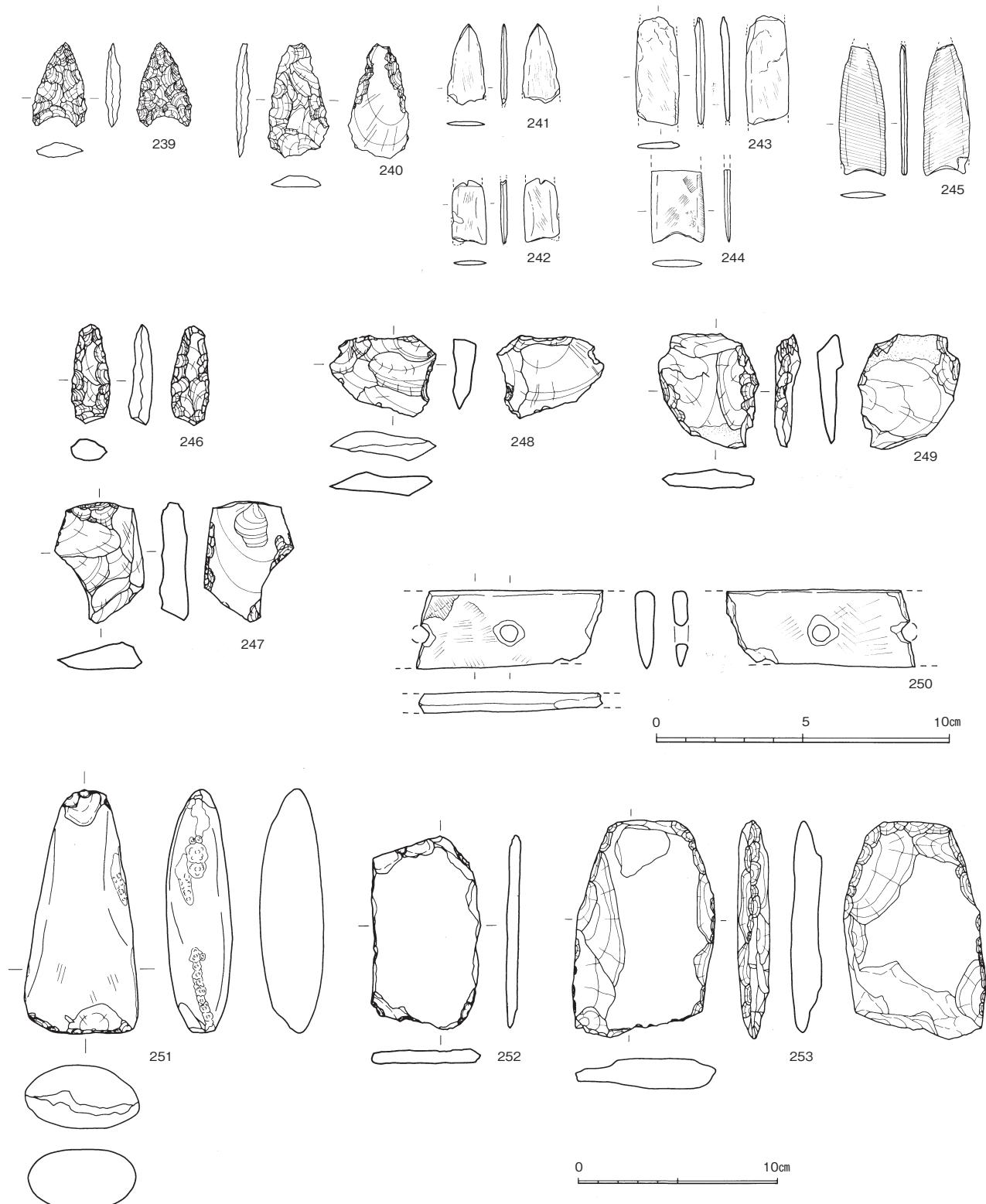
3. 古代の土師器・須恵器（第74図～第77図）

SX2004出土資料のうち、古代に属する土師器や須恵器を第74図から第77図に示した。いずれの資料も8世紀から9世紀に属するものと想定できる。以下、種別ごとに記述する。

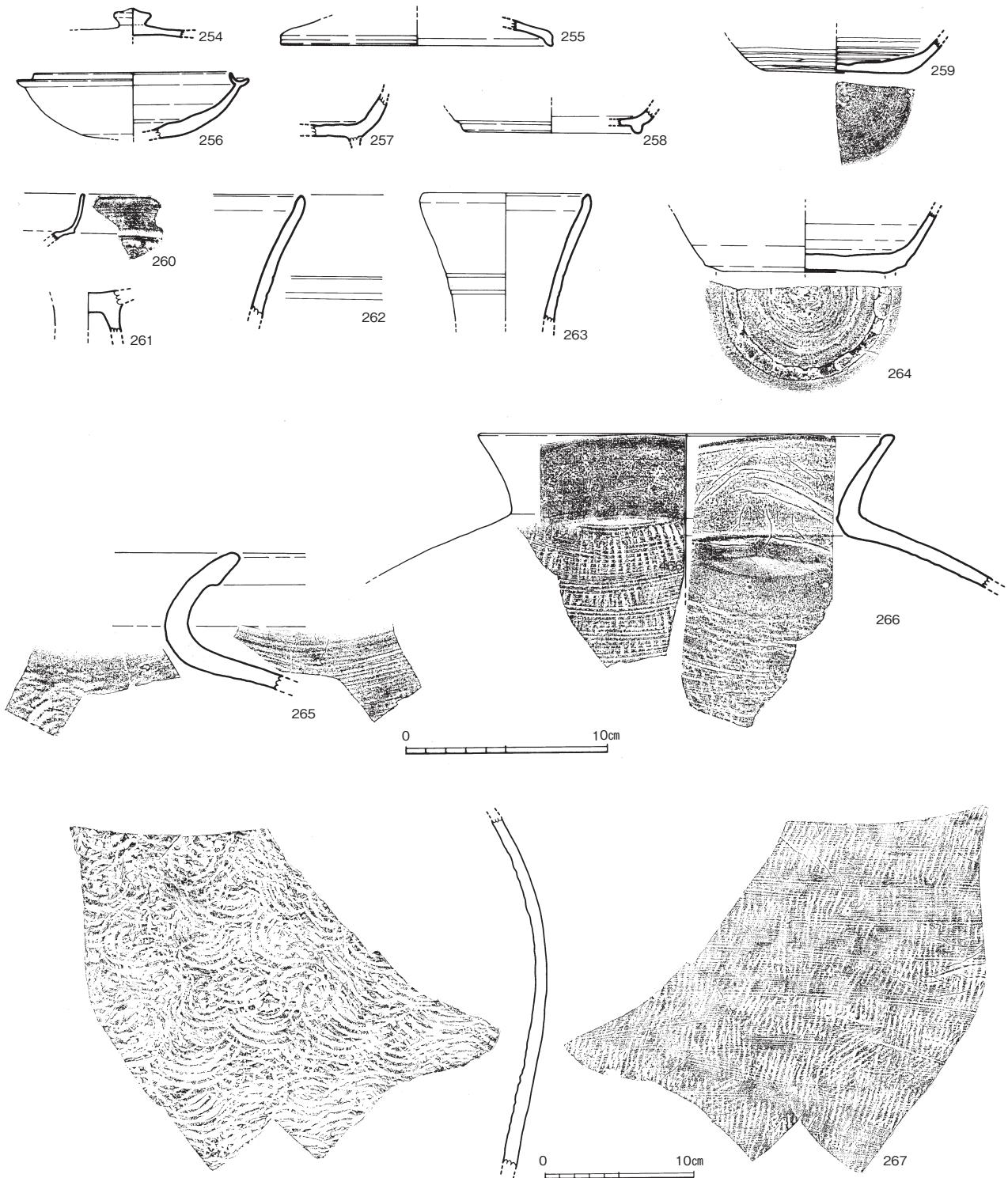
254は須恵器壺蓋の宝珠つまみ部分である。内外器面ともに回転ナデで仕上げられる。255は須恵器壺蓋の口縁端部片である。内外器面は回転ナデによって調整される。259は壺の底部片である。外部は回転ナデで調整され、底部にはヘラ切りの痕跡が確認できる。256は須恵器壺身である。外面は回転ヘラケズリ、回転ナデによって仕上げられる。陶邑編年II型式6段階に位置づけられる資料であり、7世紀の所産と判断した。257・258は高台を有する須恵器壺の底部片である。258は低く小さな高台が貼り付けられる。260は須恵器小型壺の口縁端部片である。口縁部は二重口縁状をなし、直角に立ち上がる。外面には回転ナデの痕跡が確認できる。261は須恵器高壺脚部の破片である。壺部と脚部に接続したナデの痕跡が見受けられる。262・263は須恵器長頸瓶の破片である。ともに外面は回転ナデで調整され、下半部に沈線が施される。264は高台を有する壺である。底部には輪状の剥離痕が確認できるため、高台を有するものと判断した。内外器面はともに回転ナデによって仕上げられる。265・266は須恵器甕である。265は甕口縁部から頸部にかけての破片である。外方向に大きく開く形状をなす。頸部外面にはタタキの痕跡が、内面には同心円文のタタキ痕が確認できる。266は甕口縁部から頸部にかけての破片である。口縁上端部を水平に成形する。口径は20.8cmに復元できる。外面器壁には平行のタタキ痕が残る。267は甕の胴部片である。外面器壁には平行タ



第72図 151-SX2004出土遺物実測図5 (1/3)

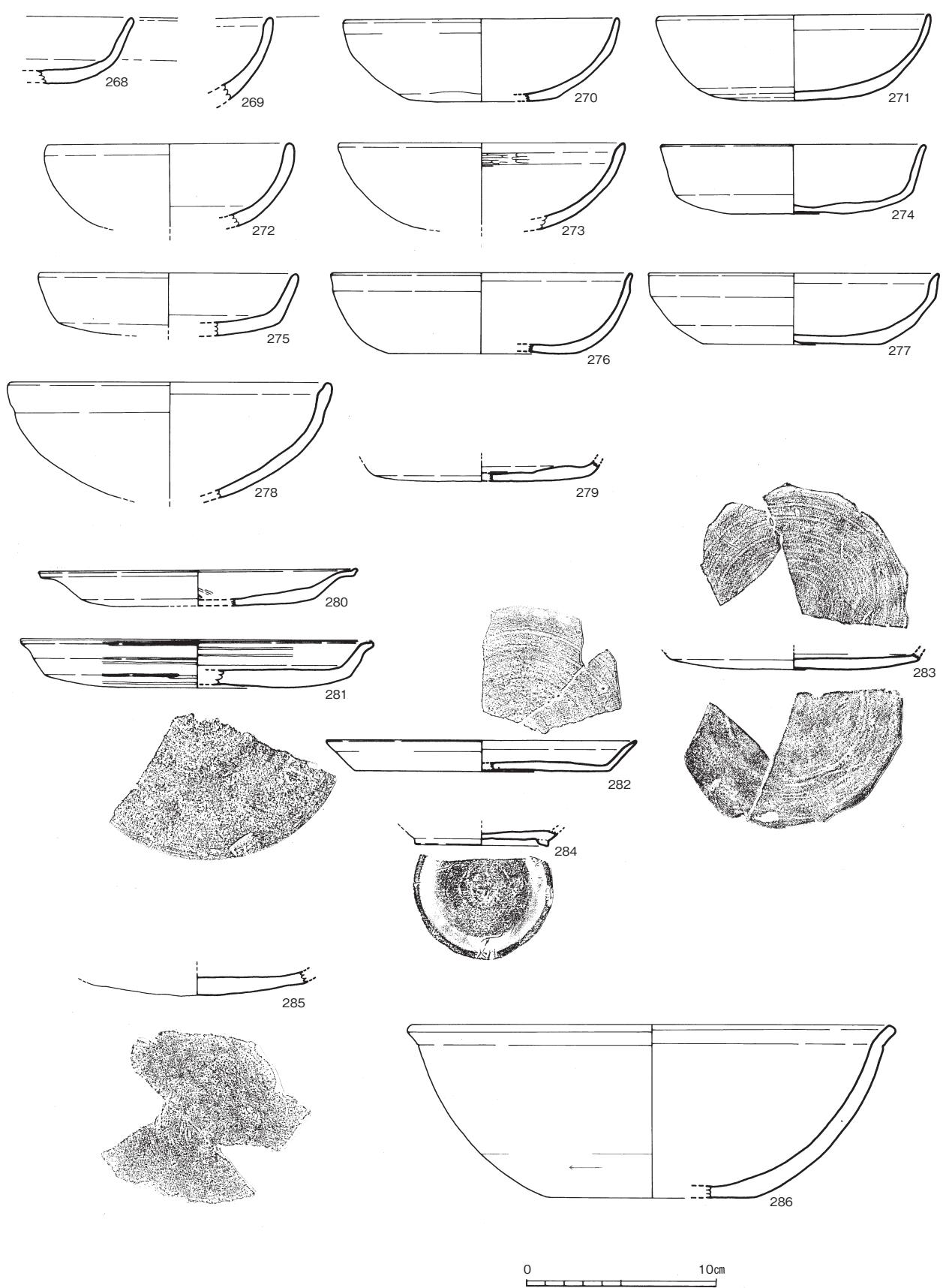


第73図 151-SX2004出土遺物実測図6 (1/1,1/2)

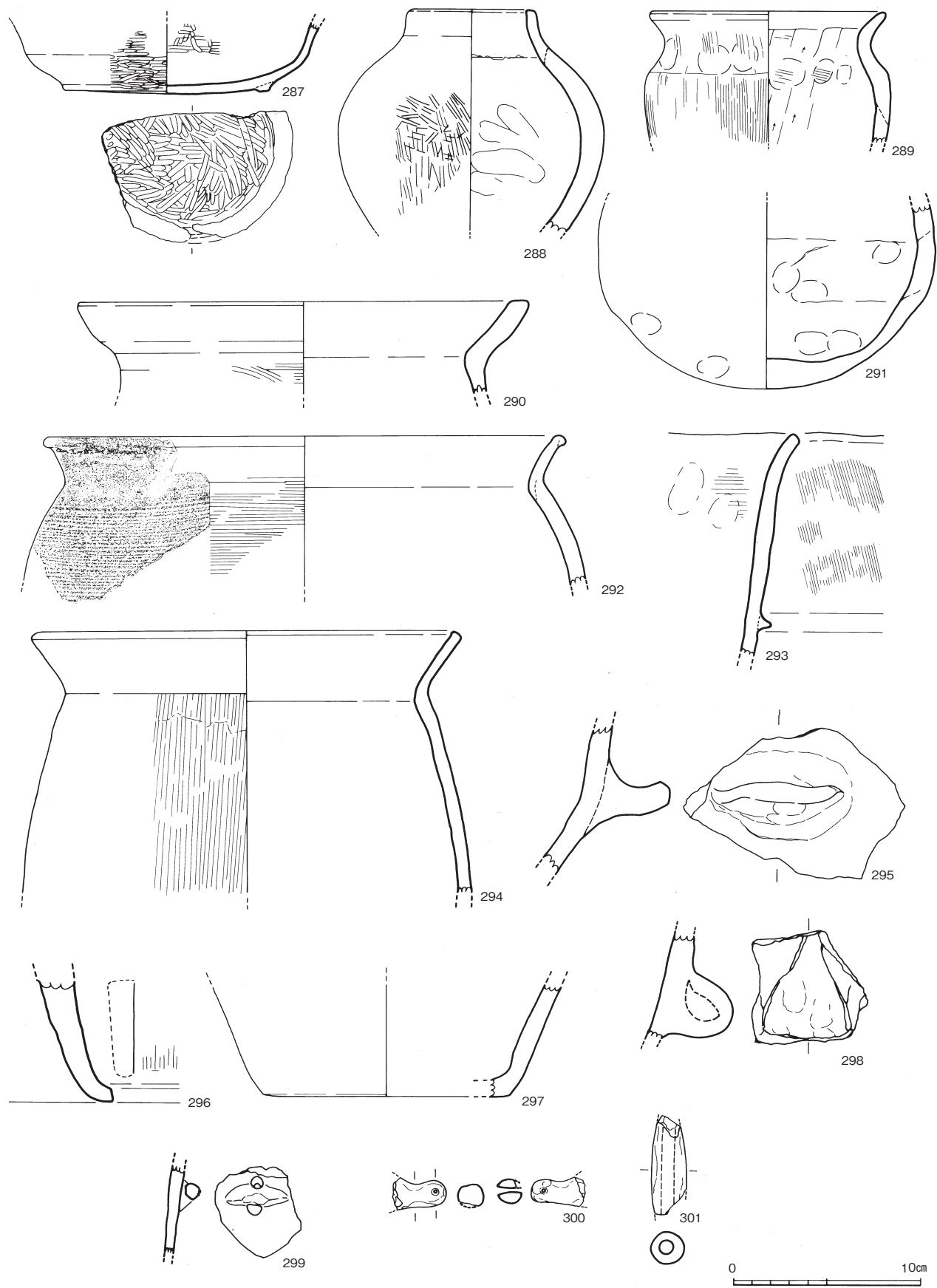


第74図 151-SX2004出土遺物実測図7 (1/1, 1/2)

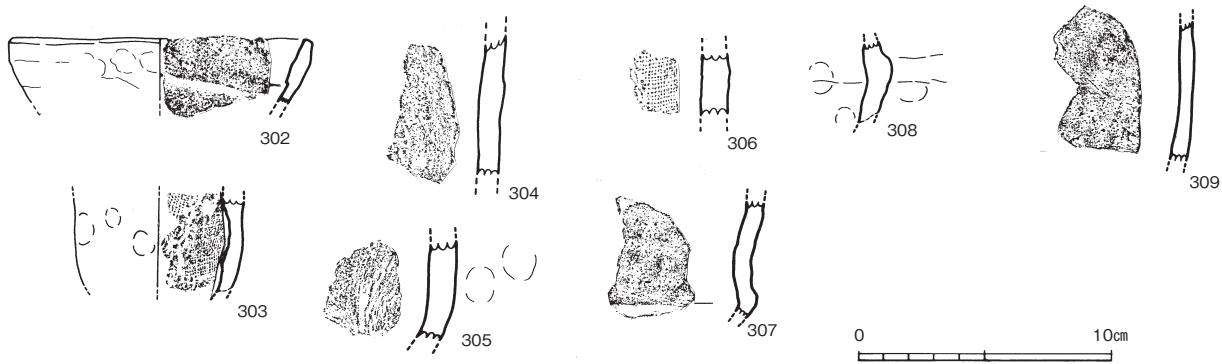
第3章 調査の成果



第75図 151-SX2004 出土遺物実測図8 (1/1,1/2)



第76図 151-SX2004出土遺物実測図9 (1/3)

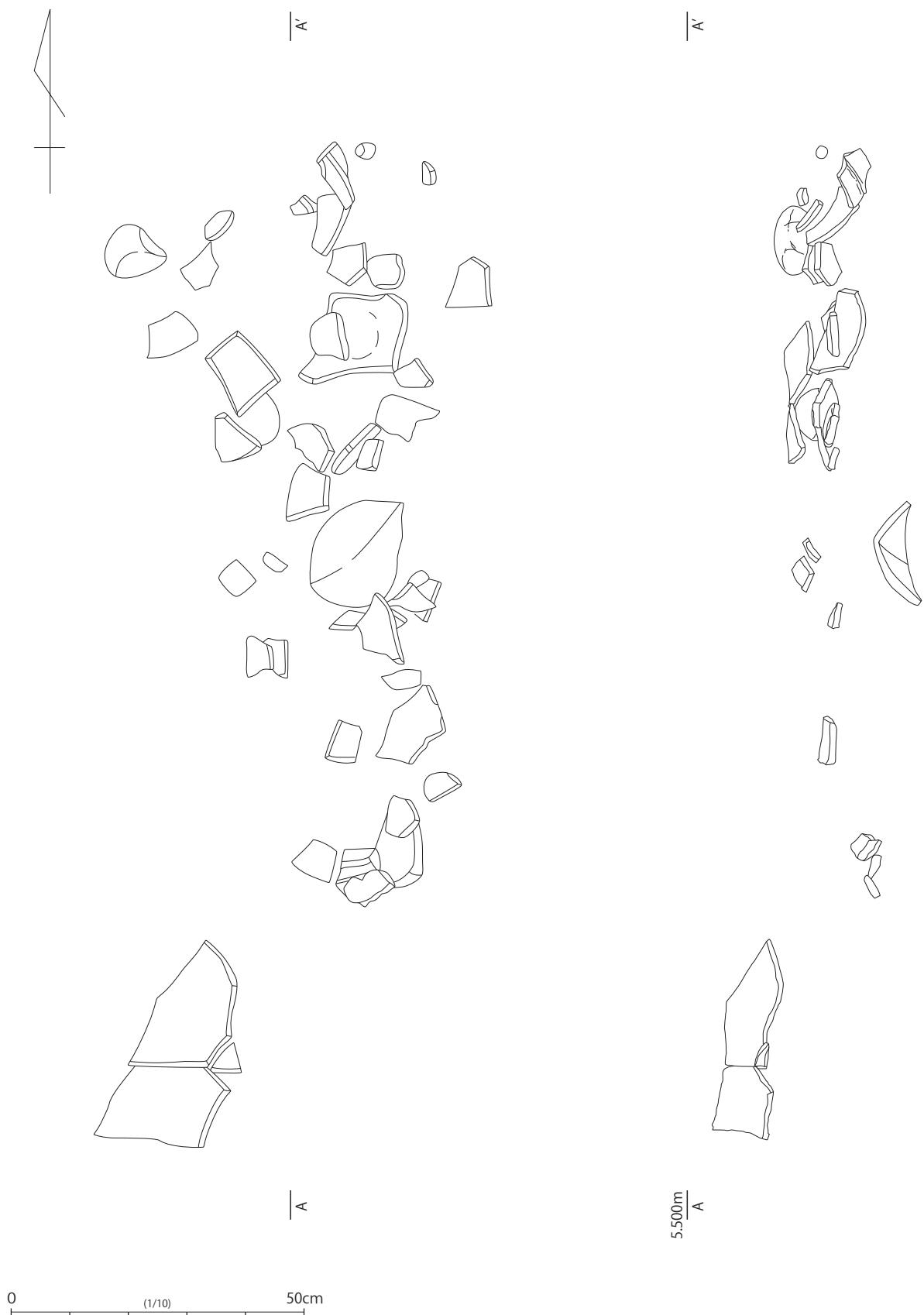


第77図 151-SX2004出土遺物実測図10(1/3)

タキ痕が、内面には同心円状のタタキ痕が確認できる。

268～277は土師器坏身の資料である。268・269は口縁端部の資料であり、内外面ともに橙色を呈する。内外面ともにナデで仕上げられる。胎土には角閃石、長石を多く確認できる。270は復元口径14.3cmを測る土師器坏である。内外面ともに淡い橙色を呈する。内外面器壁はナデが施される。271は土師器坏である。完形であり、口径は14.2cmを測る。外面器壁はナデ後回転ヘラミガキで仕上げられる。内面にはナデは施される。272は土師器坏であり、ほかの資料に比べ口縁部分は肥厚である。内外面器壁はナデが確認できる。273は口縁端部内面に面取り状の段が施され、先鋭化する形状となる土師器坏である。復元口径は15.0cmを測る。276・277も同様に口縁端部が先鋭化する土師器坏である。276は復元口径15.6cm、277は15.2cmを測る。278は土師器坏と判断したが、他の資料と比較して口径が大きいため鉢である可能性も高い。本文では一応坏として報告する。復元口径16.6cmを測る。内外面器壁はナデによる調整が確認できる。279～283は土師器皿である。いずれも色調は橙色系に属する。284は高台を有する土師器坏である。底部が残存し、高台部分は若干尖る形状をなす。286は土師器鉢である。内外面器壁はともにヨコナデが施され、回転ナデで仕上げられる。287は土師器の坏である。貼付け高台を有し、底部には丁寧なミガキが施される。288は土師器の短頸壺である。289は土師器の甕である。外面には強いハケ目が観察できる。290は企救型甕であり、典型的な企救型甕の形状をなす。291は土師器甕の底部である。下半部のみ残存するが、球胴状をなしていたうと想定できる。292はカキ目が施された土師器甕の口縁部片である。焼成は良好であり、非常に硬質に仕上がっている。293は甕の口縁部片であるが、直線的に延びる下半部に1条の突帯が確認できる。弥生土器である可能性が高いが、292らまとまって出土したため併せて報告する。295は土師器の取手である。平たい形状であり、貼付け痕も明瞭に観察できる。甕に付属するものであろうか。297は豊後大分型甕の底部であろうか。底面付近で強く屈曲し、平底を形成する。298も同じく豊後大分型甕の取手であろう。粘土を折り返して成形される。299・300は用途不明の土製品である。299は穿孔を有する。300はつまみ状の小型土製品である。先端部に2mmほどの穿孔を有する。301は管状の土錐である。

第77図、302～307は製塩土器である。いずれも胴部の破片であり、全体の形状が復元できるものはなかつた。302は径が復元でき、11.4cmを測る。303は胴部径が復元でき、6.6cmを測る。303・306などは内面に布目痕が明瞭に残る。307や308は成形時のユビオサエが明瞭に観察できる。



第78図 151-SX2039 出土状況実測図 (1/30)

151-SX2039 (第78図)

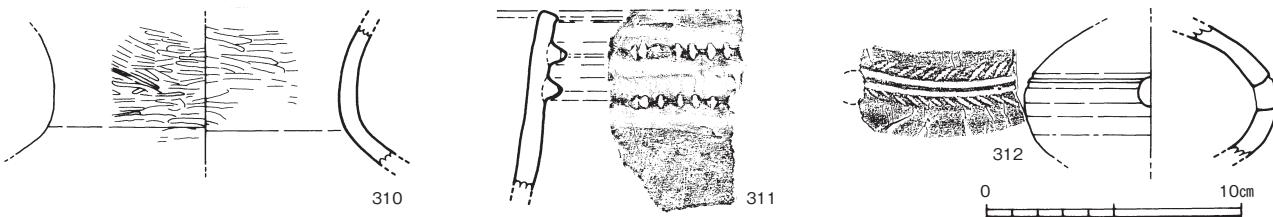
2-A区、B3グリッドで検出した土器集中ブロックである。明確なプランを有さず、土層にも遺構の痕跡などが確認できなかった。出土遺物は8世紀から9世紀に属する土師器・須恵器等が中心となる。

151-SX2039 出土遺物 (第79図～第82図)

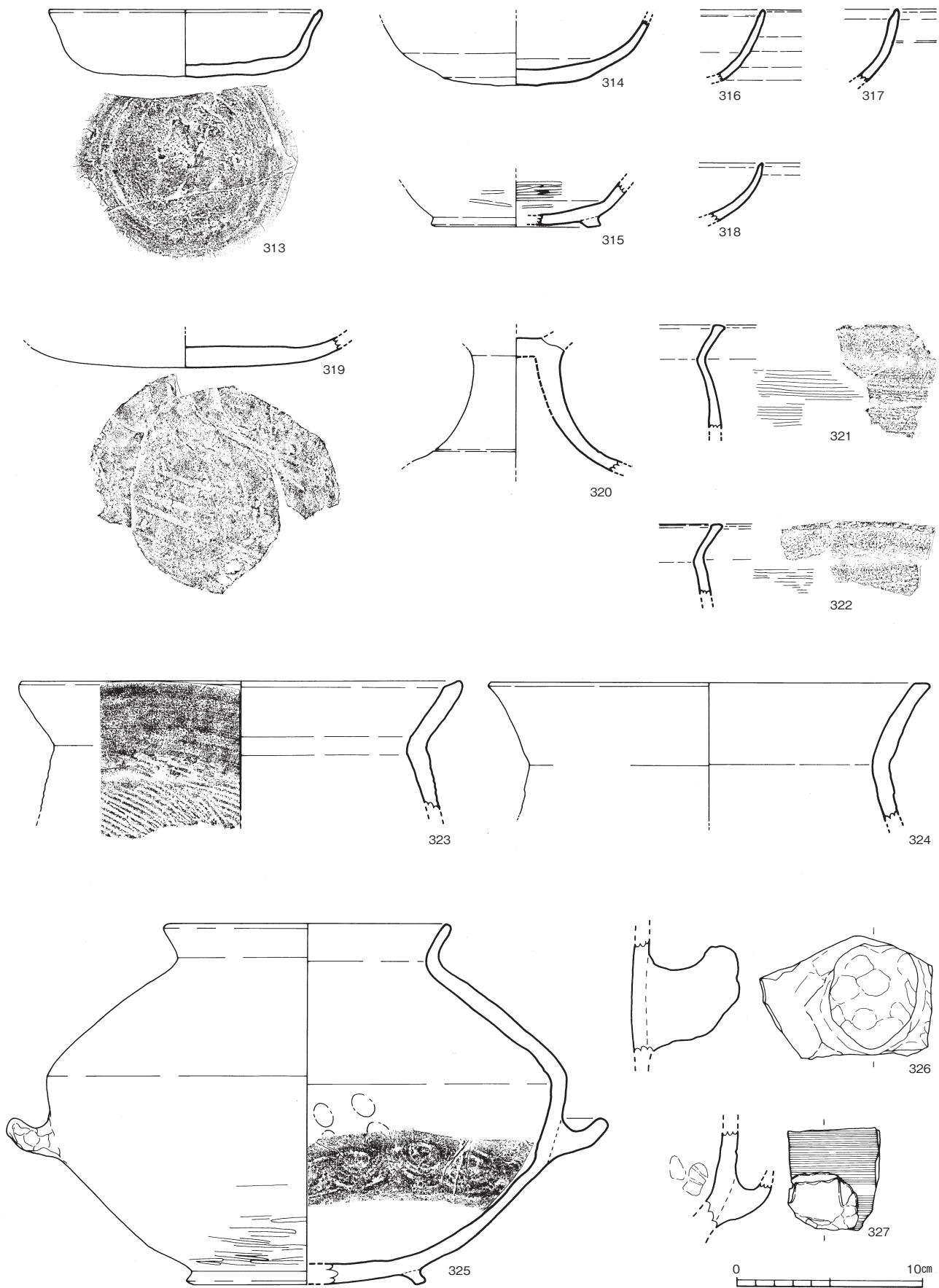
310は弥生土器である。壺形土器の頸部が残存する。311は下城式甕形土器の口縁部資料である。直立する口縁端部の若干下がった箇所に2条の刻目突帯が施される。器面はナデによって仕上げられる。312は須恵器の甕である。これらはSX2039で中心となる遺物の時期と異なるため、分けて報告した。

313～327は土師器である。うち、313～318は土師器坏である。314は底部に段を有する。315は高台を有し、台形状の高台が貼り付けられる。319は土師器の皿であろう。底面はケズリによって平滑に仕上げられる。320は土師器の高坏である。脚部が残存しており、裾が大きく開く形状をなす。脚内部は中空である。321・322は土師器の甕口縁部である。口縁部が屈曲し頸部へいたる箇所に、カキ目と思われる強い横方向の調整が施されている。323・324は土師器のいわゆる企救型甕である。口縁部から頸部の屈曲の形状も類似するが、口縁端部の成形が323は尖り気味になるのに対し、324は平坦につくられる。325は土師器の貯蔵具である。器高19.6cmを測り、色調は明黄橙色を呈する。短く屈曲する頸部からカーブして胴部を形成し、底部には高台が貼り付けられる。胴部最大径を測る箇所から若干下がった箇所に取手が施される。外面にはナデのほかケズリやミガキで調整した痕跡が残る。下郡遺跡群では類例が見られず、周辺の遺跡にも同様の形状をなすものは確認できなかった。色調や胎土の観察から土師器であると判断したが、硬質に焼成され、胴部内面には同心円状の当て具痕が見られるため、須恵器製作の技法を用いて作られた可能性が指摘できる。被熱の痕跡が見られないこと、器壁に顕著な摩滅などが確認できないことから、325の機能を貯蔵に用いるものと想定したい。326は土師器甕の取手である。327も同様の取手であるが、326と比較して硬質であり成形も丁寧である。

328～338は須恵器である。328は須恵器の高台付坏である。高台の形状は断面台形をなす。口径13.4cm、底部径10.0cm、器高3.7cmを測る完形資料である。329は須恵器壺であろう。口縁部は短く直線的に延びる。胴部最大径の下部から、厚みを増しながら底部へいたる。330は須恵器長頸壺の胴部片である。外面は丁寧にナデられ、平滑な器壁となっている。内面には粘土の接合痕のほか、底面形成の際のユビオサエなどの調整痕が確認できる。331～334は須恵器の甕である。口縁部から頸部にかかる部分が残存する。333は頸部の明確な屈曲が確認できない。331は回転ナデのち縦方向の平行タタキが確認できる。内面には同心円状の当て具痕が残る。332は横方向のタタキ痕が観察でき、内面は同心円状の当て具痕がみえる。344～336は大型の須恵器甕である。334は口径45.4cmに復元でき、色調は青灰～灰白色を呈する。口縁端部の形状は方形をなし、内湾しながら頸部へといたる。口縁上部には3条の沈線が並行して横方向に施され、その間に波状文が3条施文される。頸部外面には縦方向のタタキ痕が確認でき、内面には同心円状の当て具痕が観察で



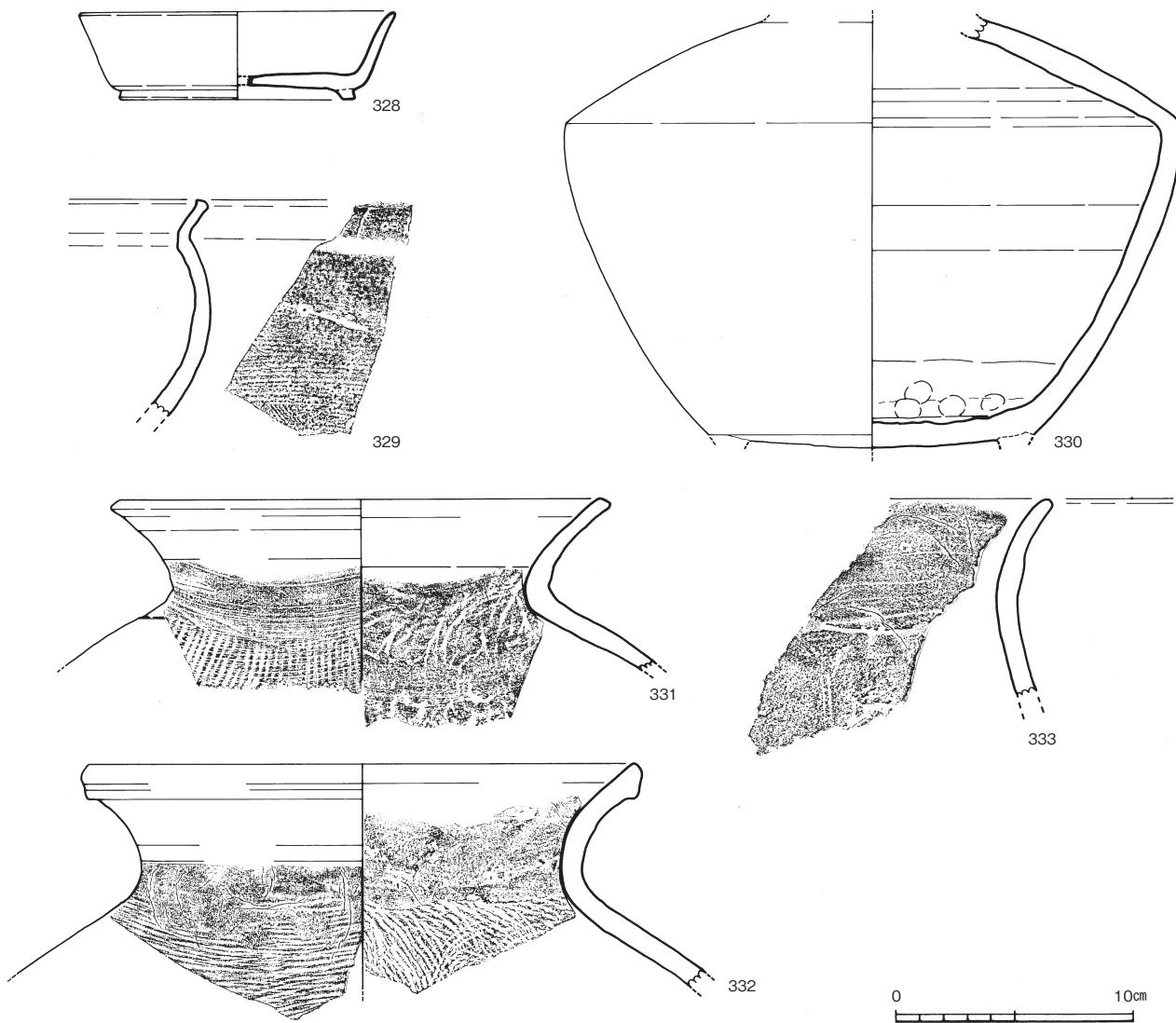
第79図 151-SX2039 出土遺物実測図1 (1/3)



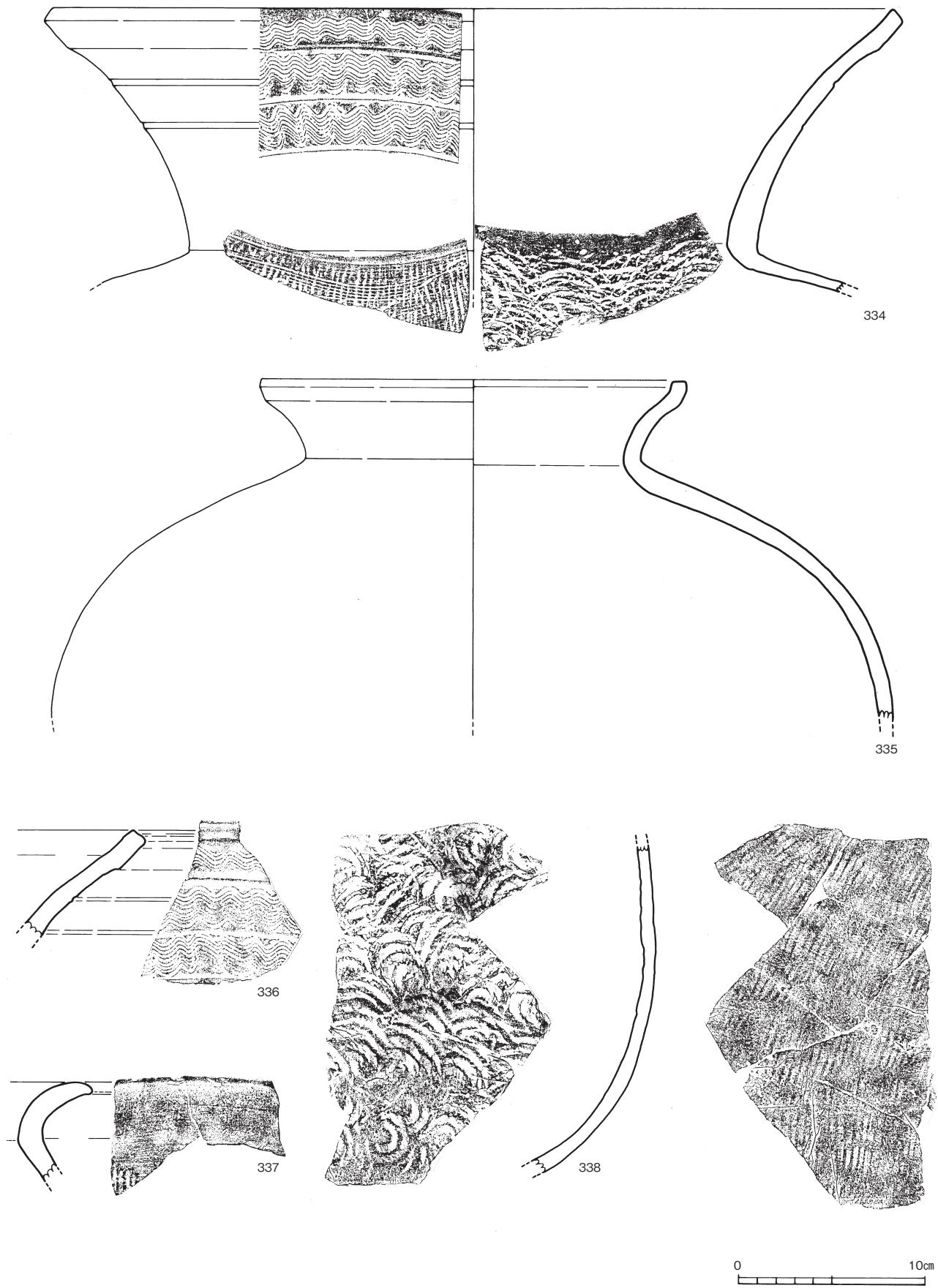
第80図 151-SX2039 出土遺物実測図2 (1/3)

第3章 調査の成果

きる。335は短い口縁部を有している。方形状をなす口縁端部は、頸部からゆるやかに外反しながら、終点部付近で上方向へと屈折する。下半部を欠損するため全形はうかがいえないが、胴部は球形をなすものと思われる。336は334と同様の特徴を有する口縁部片である。同一個体であると考えるが接合関係にないため、個別に報告した。3条の沈線と3条の波状文は確認できる。337は須恵器甕の口縁部片である。強く外反するが、頸部下を欠失するため、傾きは変わること可能性が高い。頸部端部には縦方向のタタキ痕がわずかに確認できる。338は須恵器甕の胴部片である。外面には多条のタタキ痕が、内面には同心円状の当て具痕は重複する様子が観察できる。

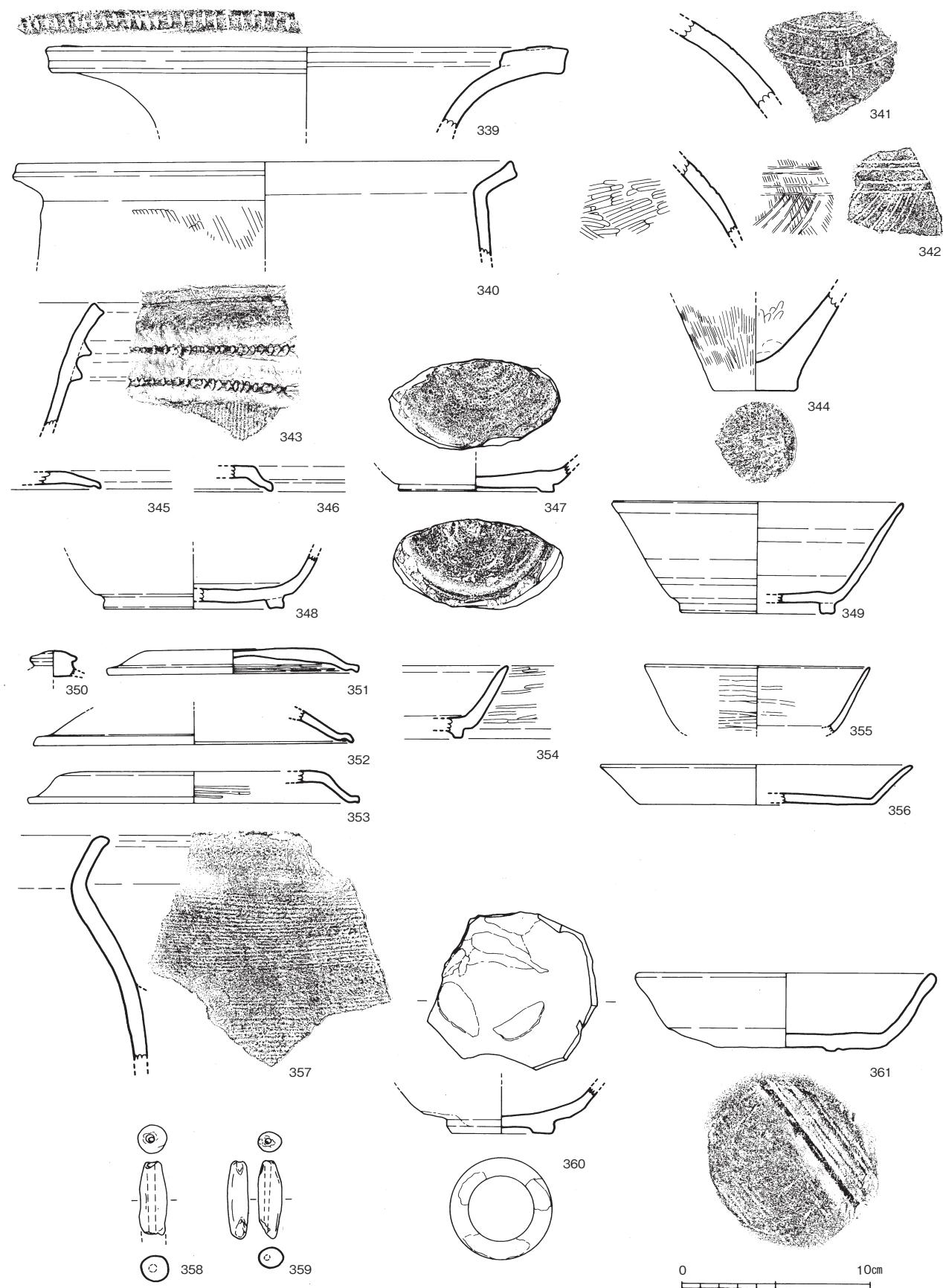


第81図 151-SX2039出土遺物実測図3 (1/3)

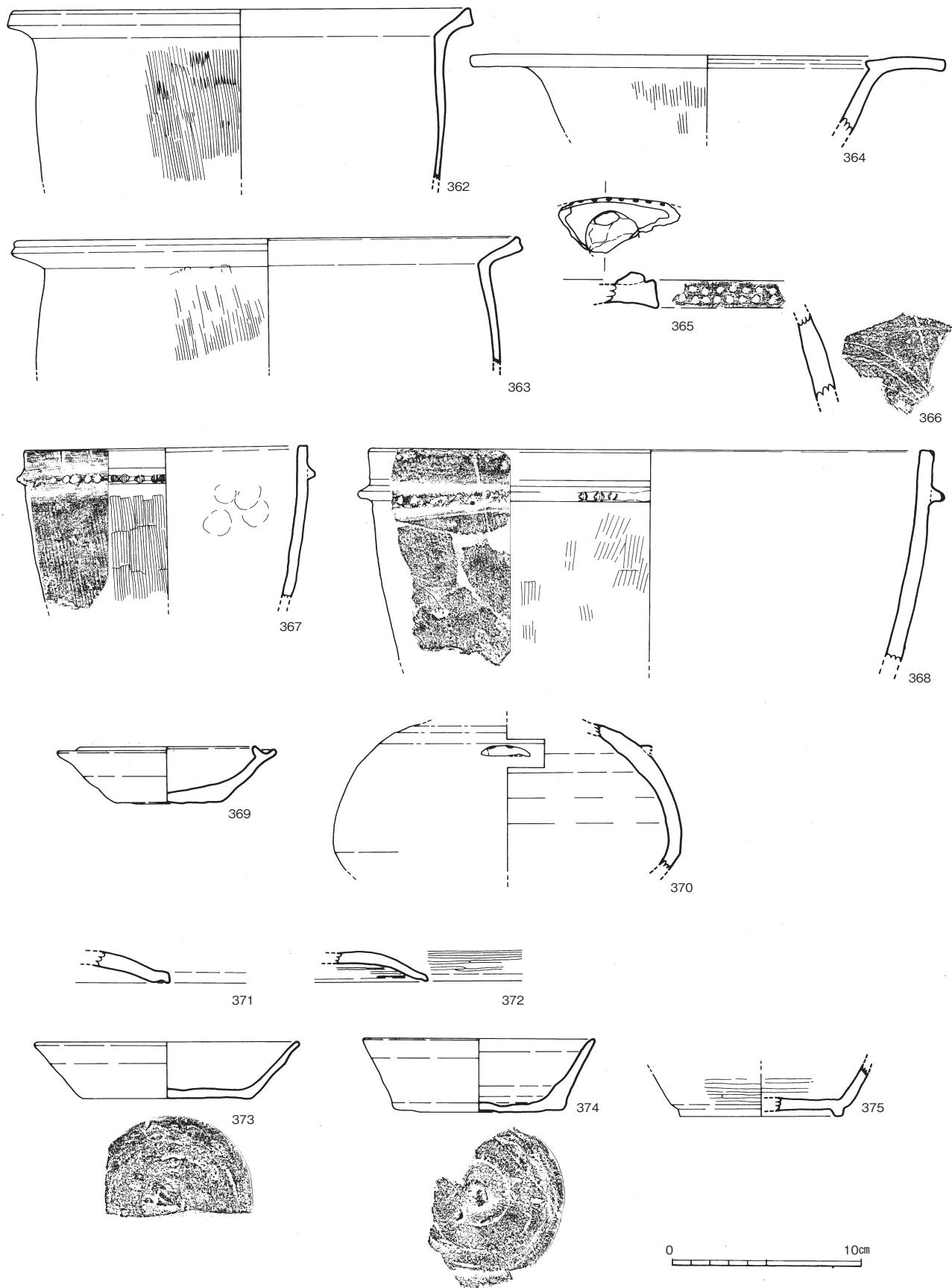


第82図 151-SX2039 出土遺物実測図4 (1/3)

第3章 調査の成果



第83図 2区表土出土遺物実測図1 (1/3)



第84図 2区表土出土遺物実測図2 (1/3)

3. 表土出土遺物及び検出時出土遺物（第83図～第89図）

2区における出土資料のうち、特定の遺構に帰属しない遺物を第83図～第89図に示した。これらの遺物は表土の機械掘削時や、人力による遺構検出作業時の出土、あるいは排土から採集したものである。

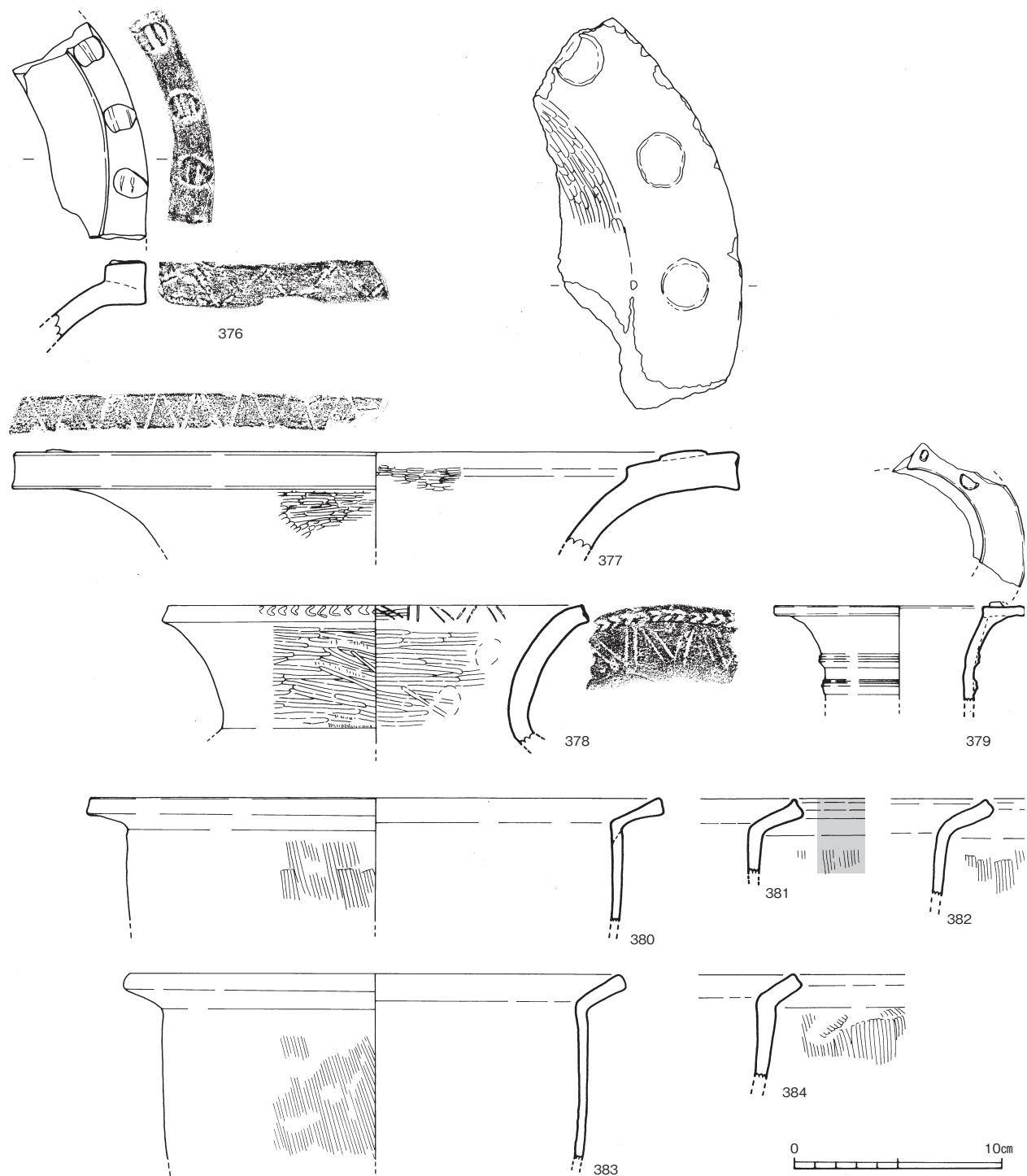
表土出土遺物（第83図・第84図）

第83図は2-A区表土掘削時の出土遺物である。339～344は弥生土器である。339は壺形土器の口縁部片である。復元口径27.4cmを測る。口縁平坦部に薄く円形浮文が、口唇部外面平坦部には連続する刺突文が確認できる。340は東北部九州系の甕口縁部の破片である。口縁部から頸部にかけて「く」の字に屈折する。色調は黄橙色を呈し、外面はハケ後のナデによって器面が調整される。341～342は下城式壺形土器である。胴部の破片資料である。341は橙色を呈し、内外面ともに丁寧なナデで仕上げられる。重弧文が確認できる。342は褐色を呈し、内面をミガキによって仕上げている。343は下城式甕形土器の口縁部片である。2状の刻目突帯を有する。内外面ともにナデが施される。344は弥生土器の底部片である。色調は黒褐色を呈し、胎土に角閃石や長石などを多く含む。平底である。345は土師器蓋資料であり、回転ナデによって調整される。346は土師器蓋であり、端部はナデの痕跡が残る。347は高台を有する土師器杯の底部資料である。底部径は4.2cmを測る。349は須恵器の高台付碗である。350は須恵器杯蓋の頂部片である。扁平気味の宝珠ツマミであり、頂部には回転ナデが施される。色調は青灰色を呈する。351～353は土師器杯蓋の資料である。351は復元口径13.2cmを測り、色調は暗橙褐色を呈する。内面はナデ後ミガキが施され、外縁は回転ナデで仕上げられる。352は復元口径16.9cmを測る土師器杯蓋である。口縁端部は受部状に成形されたため、皿の可能性もあるが、杯蓋として報告する。353も同様に土師器杯蓋である。復元口径は17.6cmを測り、色調は橙褐色を呈する。内面には一部ミガキの痕跡が確認でき、外縁はナデが施される。354は高台を有する土師器杯身である。内外面ともにナデ後ミガキで器壁を調整する。色調は暗茶色を呈し、胎土には角閃石などを多く含む。355は土師器杯の口縁部片である。体部にかけて1/3ほど残存する。色調は明橙色を呈する。356は土師器の皿である。復元口径16.4cmを測り、色調は橙色を呈する。胎土には石英粒を多く含む。357は土師器の甕である。口縁部から胴部にかけて残存する。硬質に焼成され、色調は明黄褐色を呈する。外面にカキ目、内面にはナデが施される。胴部に剥離痕が見受けられるため、本来取手が接続されていた可能性がある。358・359は管状土錐である。360は青磁の碗である。361は土師器杯である。底部には回転糸切り痕が残り、板状圧痕も認められる。

第84図は2-B区表土掘削時の出土遺物である。362～368は弥生土器である。362・363は東北部九州系甕形土器の口縁部～胴部にかけての破片である。364は高杯形土器の杯部片である。鋤先状口縁で平坦部が平たく開く。須玖II式にあてはまる資料であろう。365は壺形土器の口縁端部片である。口唇部には工具による刺突文が2段に重なりながら施文される。上部平坦面には円形の浮文が施されていたことがわかるが、破片資料のため全形をうかがいえない。366は下城式壺形土器の胴部片である。直線が1条と重弧文が2条確認できる。367・368は下城式甕形土器である。ともに胴下半部と底部を欠失する。367は復元口径17.0cmを測り、色調は灰褐色を呈する。口縁部下に1条の刻目突帯を巡らせる。368は口縁部下に1条の刻目突帯が施され、外縁器壁にはハケが確認できる。胎土には長石・石英粒を多く含む。369は須恵器の杯である。色調は灰色を呈し、内外面ともに回転ナデが確認できる。370は須恵器の瓶である。胴部が残存しており、胴部最大径は18.4cmを測る。371・372は土師器杯蓋である。いずれも口縁端部が残存する。373は土師器の杯である。374は土師器杯でハコ形の形状をなす。375は土師器杯であり、高台を有する。

検出時出土遺物（第85図～第89図）

第85～87図は2-A区検出時に出土した遺物である。376～393は弥生土器である。376・377は壺形土器の口縁部片である。とともに口縁上部平坦面に円形浮文を、口唇部に山形文が施される。379は壺形土器の口縁～頸部片である。薄手であり、口縁上部平坦面には円形浮文が施される。380～384は東北部九州系の甕形土器である。381の外面には一部丹塗りが施される。385～388は下城式壺形土器の胴部片である。重弧文や刺突文が施文される。389～393は下城式甕形土器の口縁部片である。389は拓本を示せなかったが、

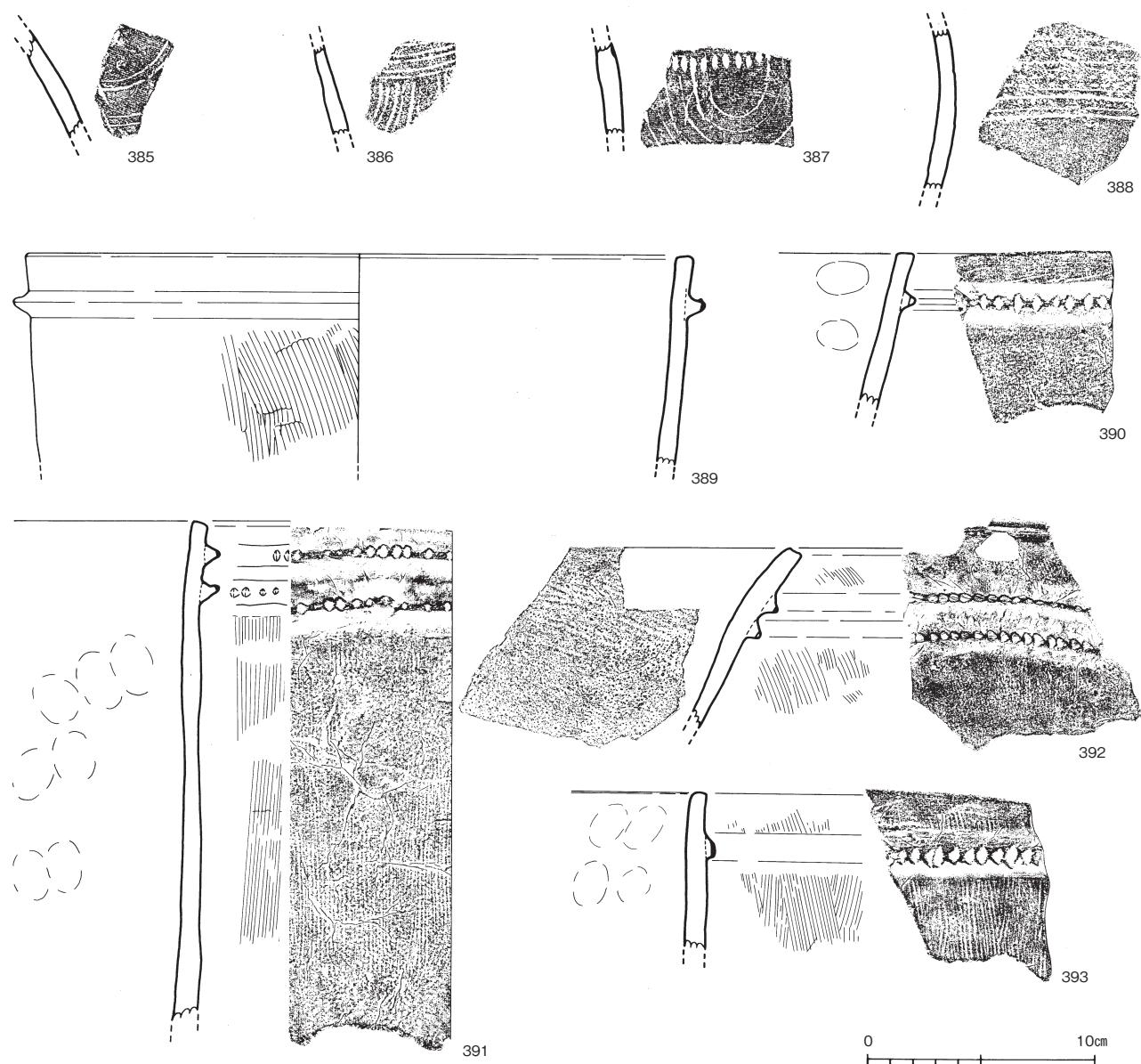


第85図 2-A区検出時出土遺物実測図1 (1/3)

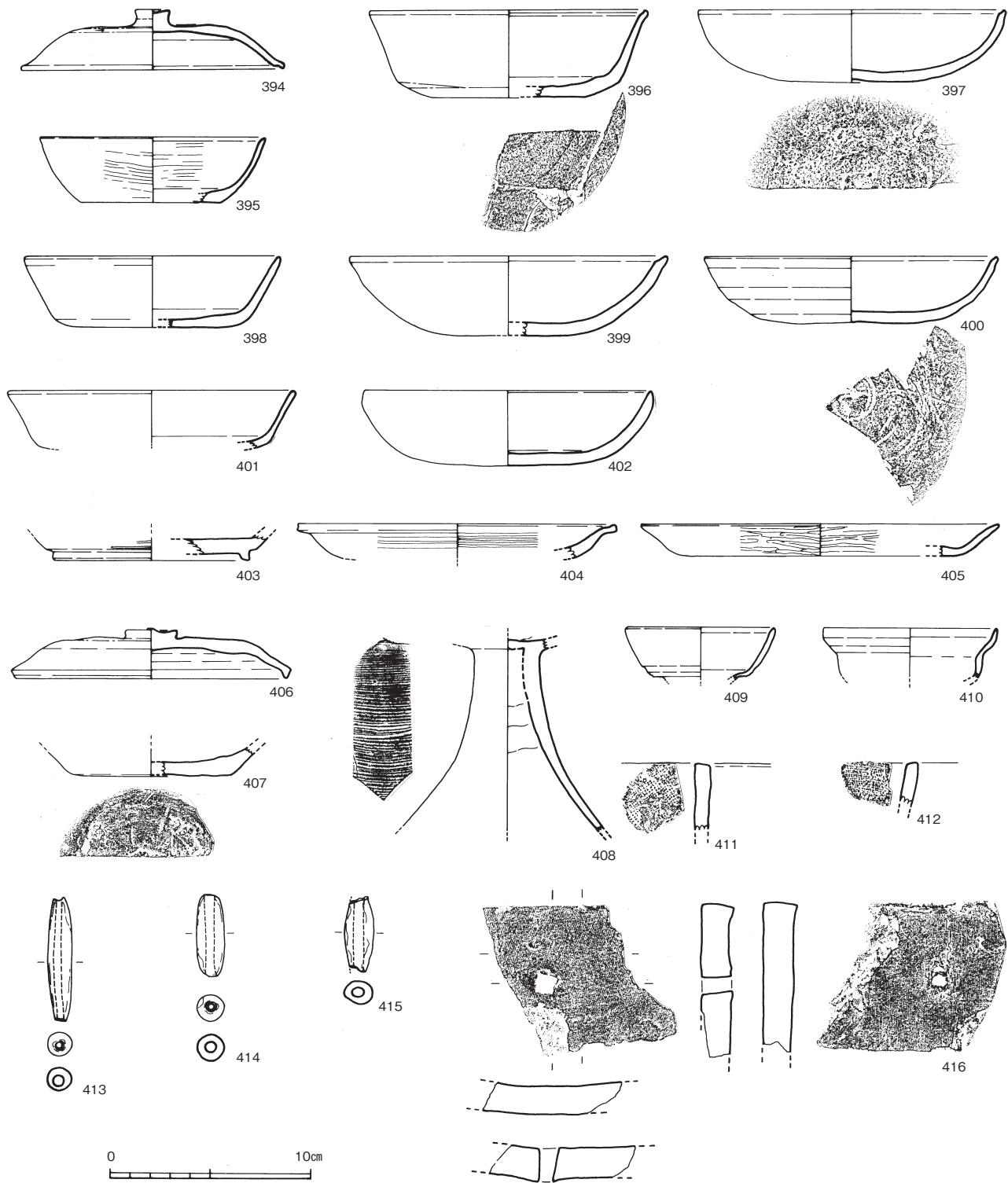
第3章 調査の成果

突帯に微細な刻目が確認できたため、下城式と判断した。394～402は土師器の坏蓋・坏資料である。394は宝珠状のツマミを有する。403は土師器の高台付坏である。404・405は土師器皿である。406～410は須恵器である。406は宝珠ツマミを有する坏蓋である。408は高坏の脚部である。409は口縁部の破片であるが、欠損部付近で強く屈曲する。薄手であるが脛の口縁部であろうか。410は須恵器の小壺資料である。411・412は製塩土器である。口縁部資料であり、内面には布目痕が確認できる。413～414は管状土錐である。416は平瓦の破片である。中央部に釘穴が貫通する。

第88・89図には2-B区検出時に出土した遺物を示した。417～423は弥生土器である。417は壺形土器の口縁部片である。上部平坦面に円形浮文が、口唇部には山形文が確認できる。418は甕形土器である。紐通しの孔が施される。420は下城式壺形土器の胴部片で、重弧文が4条確認できる。421は下城式甕形土器の口縁部片である。422・423は底部片である。424・425は土師器の坏資料である。426～429はいずれも須恵器の坏資料である。429は口縁端部に受け部を有する。

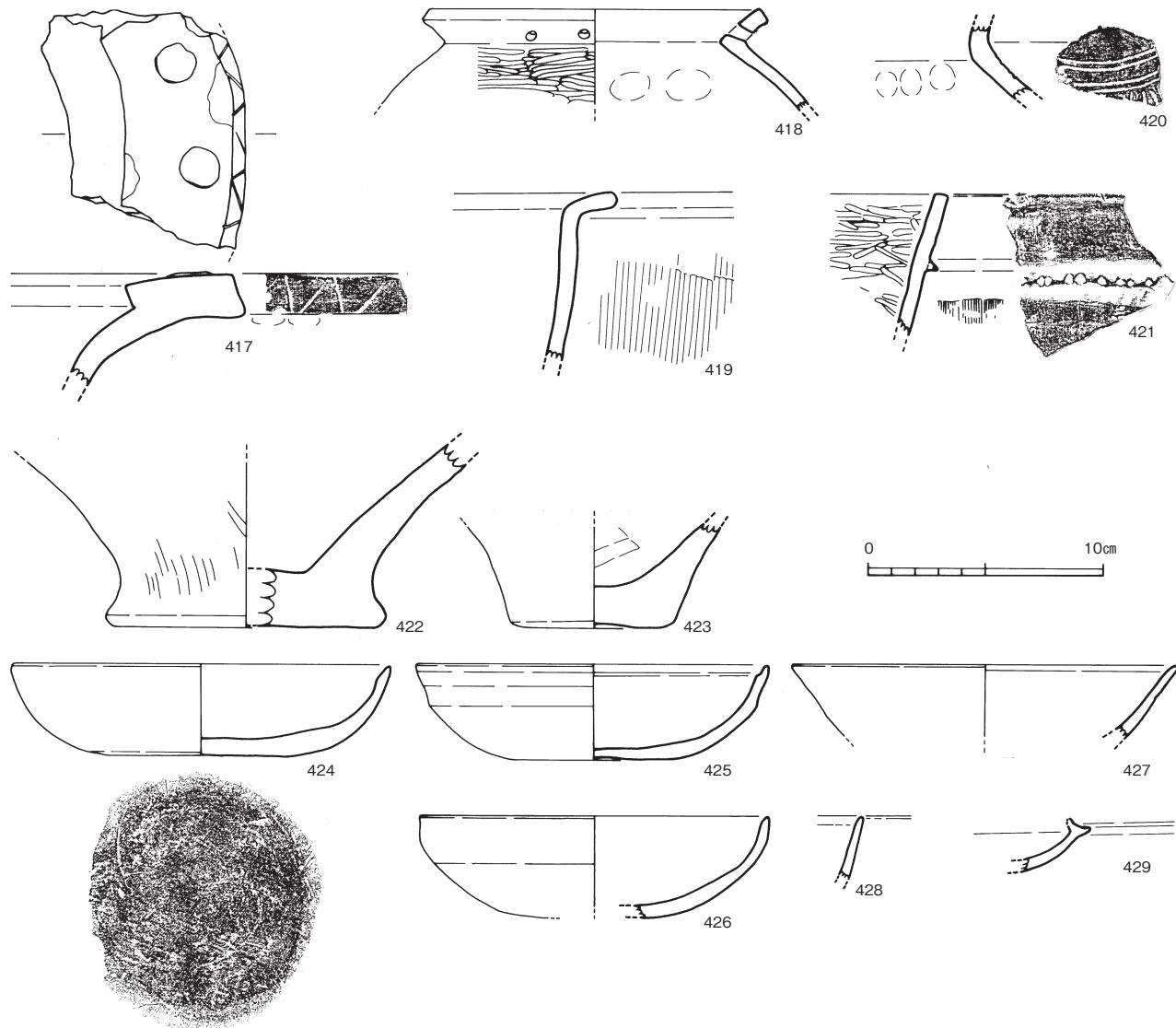


第86図 2-A区検出時出土遺物実測図2 (1/3)

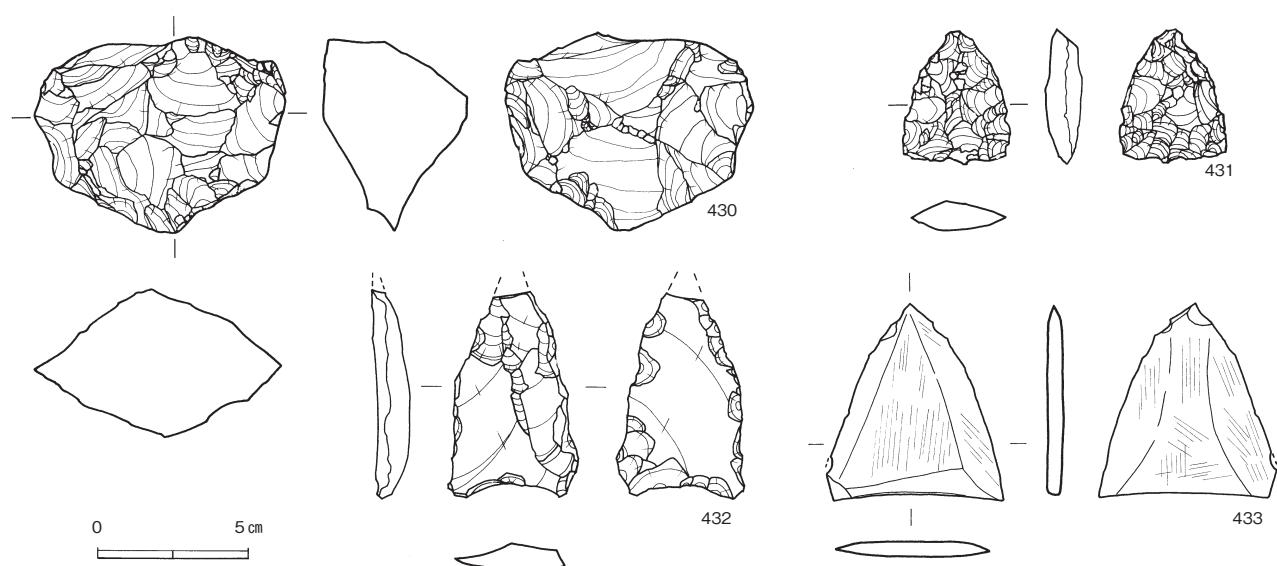


第87図 2-A区検出時出土遺物実測図3 (1/3)

第3章 調査の成果



第88図 2-B区検出時出土遺物実測図1 (1/3)



第89図 2-B区検出時出土遺物実測図2 (1/1)